松山市埋蔵文化財調査報告書32

山越・久万ノ台の遺跡

山越１・２・３次
久万ノ台・野津子山

１９９３

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

山越・久万ノ台の遺跡

山越１・２・３次
久万ノ台・野津子山

１９９３
松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　山越・久万ノ台地域の遠景（南より）

序

この報告書は、昭和62年から平成４年にかけて松山市教育委員会及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが民間業者から委託を受け、発掘調査を実施し、その結果をまとめたものです。

今回の調査では、山越、久万ノ台、野津子山等の遺跡から、弥生時代から近世に跨がる遺構や遺物を検出しましたが、特に山越遺跡２次調査における木製農工具と有茎磨製石鏃の出土は、松山市内では最も古いものとして位置付けることができ、今後の当地域での調査研究に好資料となるものです。

松山平野北部に点在する遺跡については、これまであまり多くの報告が成されていないのが現状でした。これは、包蔵地域や開発の立遅れ等が起因しておりましたが、今後公共事業等で計画されております国道196号線バイパスの建設、西部環状線などの開発行為に伴って、当地域での調査報告が急激に増えていくことが予想されます。

本遺跡が報告に至るまでには少なからぬ年月を要しましたが、その第一段ともいえる本報告書をここに刊行できますことは、埋蔵文化財の保護、継承に日々携わる者として大きな喜びであります。これも、ひとえに埋蔵文化財に対し深いご理解とご協力をたまわった民間業者をはじめとする市民の方々のたまものと心より感謝申し上げる次第であります。

本書が文化財保護、教育文化の向上、今後の調査研究の一助となれば幸いに存じます。

平成５年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田中誠一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会（松山市埋蔵文化財センター）が昭和62年11月～平成４年４月の間に松山市山越１丁目267－１、山越１丁目314－１他、山越１丁目268－１、久万ノ台785－１他、みどりヶ丘272－１他で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、担当調査員の責任のもと、愛媛大学・松山大学学生他の援助を受けた。遺構の撮影は担当調査員が行った。

3．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：ＳＢ、溝：ＳＤ、土壙：ＳＫ、自然流路：ＳＲ、棚列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：ＳＸである。

4．本書にかかる図面の作成は、梅木謙一、宮内慎一、武正良浩の責任のもと、水口あをいを中心に、持永皆子、上西真弓、生鷹千代、小坂ゆかり、山下満佐子、大西陽子、松山桂子、三木和代、渡部美美、兵頭千恵、好光明日香、他愛媛大学生の援助をえた。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位はすべて磁北である。

7．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

8．調査においては、愛媛大学法文学部下條信行先生の御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

9．本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、武正良浩、水口あをいが分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ文末にも記載した。関連資料の調査は、宮内慎一、高橋　恒が行った。浄書は、梅木謙一の指導のもと武正良浩、高橋　恒、白石公信が担当した。

10．写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。

11．本書の編集は梅木謙一、宮内慎一が行い、武正良浩、水口あをいの協力を得た。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… (梅木謙一・宮内慎一) …… 2
1　調査に至る経緯　2　調査組織　3　環　境

第2章　山越遺跡1次調査 …… (梅木謙一・武正良浩) …… 15
1　調査の経過　2　層　位　3　遺構と遺物　4　小　結

第3章　山越遺跡2次調査 …… (梅木謙一・武正良浩) …… 33
1　調査の経過　2　層　位　3　遺構と遺物　4　小　結

第4章　山越遺跡3次調査 …… (梅木謙一・武正良浩) …… 51
1　調査の経過　2　層　位　3　遺構と遺物　4　小　結

第5章　久万ノ台遺跡 …… (宮内慎一) …… 63
1　調査の経過　2　層　位　3　遺構と遺物　4　小　結

第6章　野津子山遺跡 …… (梅木謙一・宮内慎一・武正良浩) …83
1　調査の経過　2　層　位　3　遺構と遺物　4　小　結

第7章　山越遺跡（2次）出土の弥生前期土器…… (梅木謙一・水口あをい) …92

第8章　調査成果と課題 …… (梅木謙一) …… 100

挿 図 目 次

第１図　松山平野の地形分類図……5
第２図　周辺の遺跡分布図　（縮尺１／50,000）……7
第３図　山越・久万ノ台地域の遺跡分布図　（縮尺１／20,000）……9
山越遺跡１次調査地
第４図　調査地位置図　（縮尺１／2,500）……18
第５図　基本層位図　（縮尺１／20）……19
第６図　調査地測量図　（縮尺１／500）……20
第７図　遺構配置図　（縮尺１／150）……21
第８図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図　（縮尺１／60、１／３）……23
第９図　掘立柱建物測量図　（縮尺１／80）……25
第10図　ＳＤ・ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図　（縮尺１／３）……26
第11図　包含層出土遺物実測図　（縮尺１／３、１／２）……27
山越遺跡２次調査地
第12図　調査地位置図　（縮尺１／1,500）……36
第13図　調査区西壁土層図　（縮尺１／20）……37
第14図　遺構配置図　（縮尺１／150）……39
第15図　ＳＤ２測量図　（縮尺１／60、１／40）……40
第16図　ＳＤ２出土遺物実測図(1)　（縮尺１／３）……41
第17図　ＳＤ２出土遺物実測図(2)　（縮尺１／３）……42
第18図　ＳＤ２出土遺物実測図(3)　（縮尺１／３）……43
第19図　ＳＤ２出土遺物実測図(4)　（縮尺１／４、１／１）……44
第20図　ＳＤ３・包含層出土遺物実測図　（縮尺１／３、１／１）……46
山越遺跡３次調査地
第21図　調査地位置図　（縮尺１／1,000）……54
第22図　西壁土層図〔上〕・遺構配置図〔下〕　（縮尺１／50、１／150）……55
第23図　ＳＫ１・ＳＫ２出土遺物実測図　（縮尺１／４）……57
第24図　包含層出土遺物実測図　（縮尺１／３）……58
第25図　出土地点不明の遺物実測図　（縮尺１／３）……59
久万ノ台遺跡
第26図　調査地位置図　（縮尺１／5,000）……65
第27図　調査地測量図　（縮尺１／600）……66

第28図　調査地区割図　（縮尺１／250）……67
第29図　Ｂ区　南壁土層図　（縮尺１／20）……68
第30図　遺構配置図　（縮尺１／150）……69
第31図　１号掘立柱建物測量図　（縮尺１／60）……71
第32図　２号掘立柱建物測量図　（縮尺１／60）……72
第33図　第Ⅳ層出土遺物実測図　（縮尺１／４）……73
第34図　第Ⅴ層出土遺物実測図　（縮尺１／3）……74
第35図　第Ⅵ層出土遺物実測図(1)　（縮尺１／４、１／３）……75
第36図　第Ⅵ層出土遺物実測図(2)　（縮尺１／３、１／２）……76
野津子山遺跡
第37図　調査地測量図　（縮尺１／3,000）……86
第38図　遺構配置図　（縮尺１／150）……89
第39図　ＳＫ・包含層出土遺物実測図　（縮尺１／３）……90
山越遺跡（２次）出土の弥生前期土器
第40図　山越遺跡（２次）ＳＤ２出土資料　（縮尺１／４）……93
第41図　松山平野の弥生前期前半の土器(1)　（縮尺１／６）……95
第42図　松山平野の弥生前期前半の土器(2)　（縮尺１／６）……97

写真図版目次

巻頭図版　山越・久万ノ台地域の遠景（南より）
山越遺跡１次調査地
図版１．１　調査地北半部遺構検出状況（北より）
　　２　調査地南半部遺構検出状況（南より）
図版２．１　ＳＢ１（西より）　２　ＳＢ１遺物出土状況（南より）
図版３．１　掘立２（西より）　２　ＳＤ２・ＳＤ３（西より）
図版４．１　ＳＢ１出土遺物（１～４）、ＳＤ・ＳＫ・ＳＰ出土遺物（６・７・９・14・15）
図版５．１　包含層出土遺物〔上〕：外面、〔下〕：内面
山越遺跡２次調査地
図版６．１　遺構検出状況（北より）　２　ＳＤ５（南西より）
図版７．１　ＳＤ２（北東より）　２　ＳＤ２内木製平鍬、有茎石鏃出土状況（南より）
図版８．１　ＳＤ２出土遺物①〔上〕：外面、〔下〕：内面

図版9．1　ＳＤ２出土遺物②
図版10．1　ＳＤ２出土遺物(28・29)、ＳＤ３出土遺物(30)、包含層出土遺物(31～41)
山越遺跡３次調査地
図版11．1　ＳＤ１（南東より）　2　調査区西壁土層（東より）
図版12．1　ＳＤ３上層（東より）　2　作業風景（東より）
図版13．1　ＳＫ１出土遺物(1)、ＳＫ２出土遺物(2)、包含層出土遺物(5～11)
久万ノ台遺跡
図版14．1　調査前全景（東より）　2　Ｂ区　南壁土層（北より）
図版15．1　Ａ区　完掘状況（南より）　2　ＳＤ１・２・３（北より）
図版16．1　ＳＤ５（東より）　2　ＳＫ１（西より）
図版17．1　第Ⅴ層遺物出土状況（北より）　2　第Ⅵ層遺物出土状況（北より）
図版18．1　第Ⅳ層出土遺物(1～3)、第Ⅴ層出土遺物(5～8)
図版19．1　第Ⅴ層出土遺物
図版20．1　第Ⅵ層出土遺物①
図版21．1　第Ⅵ層出土遺物②
野津子山遺跡
図版22．1　調査対象地遠景（北東より）　2　調査対象地遠景（南より）
図版23．1　調査対象地遠景（南西より）　2　久万ノ台地区試掘近景（北より）
図版24．1　古三津地区本調査地遠景（南東より）
2　古三津地区本調査地近景（南東より）
図版25．1　古三津地区本調査地近景（西より）　2　古三津地区本調査地近景（北西より）
図版26．1　古三津地区本調査地近景（北西より）　2　古三津地区本調査地近景（西より）
図版27．1　出土遺物

表　目　次

表１．調査地一覧……2
表２．山越・久万ノ台地域の試掘調査一覧……11
表３．山越・久万ノ台地域の発掘調査一覧……12
山越遺跡１次調査地
表４．竪穴式住居址一覧……30
表５．掘立柱建物址一覧……30

表６．溝一覧……30
表７．土壙一覧……30
表８．ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）……31
表９．ＳＤ・ＳＫ・ＳＰ出土遺物観察表（土製品）……31
表10．包含層出土遺物観察表（土製品）……32
表11．包含層出土遺物観察表（石製品）……32
山越遺跡２次調査地
表12．溝一覧……48
表13．ＳＤ２出土遺物観察表（土製品）……48
表14．ＳＤ２出土遺物観察表（石製品）……50
表15．ＳＤ３・包含層出土遺物観察表（土製品）……50
表16．包含層出土遺物観察表（石製品）……50
山越遺跡３次調査地
表17．溝一覧……60
表18．土壙一覧……61
表19．ＳＫ１・ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）……61
表20．包含層出土遺物観察表（土製品）……61
表21．包含層出土遺物観察表（石製品）……62
表22．出土地点不明の遺物観察表（土製品）……62
久万ノ台遺跡
表23．掘立柱建物址一覧……79
表24．溝一覧……79
表25．土壙一覧……80
表26．第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）……80
表27．第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……80
表28．第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）……81
表29．第Ⅵ層出土遺物観察表（石製品）……82
野津子山遺跡
表30．土壙一覧……91
表31．ＳＫ・包含層出土遺物観察表（土製品）……91

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

昭和62～平成2年の間に、松山市山越1丁目267-1、山越1丁目314-1他、山越1丁目268-1、久万の台785-1他、みどりケ丘272-1他についての埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された地点は、松山市が指定する埋蔵文化財包含地の『160　山越遺物包含地』『167　久万の台包含地』内に当たり、周知の遺跡として知られている。

山越町内では、これまでに弥生時代前～中期の遺物が出土している。同地は、平野北部にある堀江～和気に展開する遺跡群の最南端部にあたるとともに、道後城北遺跡群とも接し、弥生時代の松山平野における集落構造研究にとり重要な地点として注目される位置にある。久万の台～みどりケ丘は、堀江～和気に展開する古墳時代集落の墓域（西部域）にあたる地域である。同地域の主体となる丘陵上には、前期～後期の古墳が多数確認されている。さらに堀江湾西部を南北にのびる丘陵上には、前方後円墳が数基確認されており松山平野における古墳研究において重要な地域として注目されてきた地点である。

文化教育課では、確認願いが申請された上記の5地点について埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、昭和62年～平成4年の間に順次試掘調査を実施した。

試掘の結果、申請の5地点では、遺物包含層及び遺構が検出され、弥生～古墳時代及び中世の集落関連遺構があることを確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生～中世の集落構造解明を主目的とし、文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、各申請者の協力のもと昭和62年～平成4年の間に実施した。

以下、各調査地の遺跡名、所在等を略記する。

表1　調査地一覧

遺　跡　名	所　　在	面積(㎡)	期　　間
山越遺跡1次	松山市山越1丁目267-1	200	平成元年3月27日～同年4月19日
〃　2次	松山市山越1丁目314-1 他	2,796	平成元年4月3日～同年4月25日
〃　3次	松山市山越1丁目268-1	367	平成元年11月20日～平成2年1月13日
久万ノ台遺跡	松山市久万ノ台785-1 他	889	昭和62年11月18日～同年11月30日
野津子山遺跡	松山市みどりヶ丘272-1 他	2,278	平成4年3月2日～同年4月30日

なお、昭和62年度～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会が主体となり調査事業を行い、平成3年10月1日以降は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが継続事業及び新規事業を実施した。

2．調査組織

〔昭和62年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
	参事	松原 重勝
	教育次長	井手 治己
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課長	伊賀 俊輔
	第二係長	戸田 浩
	主任	西尾 幸則

〔昭和63年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄
	参事	松原 重勝
	教育次長	井手 治己
	教育次長	古本 克
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課長	渡部 忠平
	第二係長	菅野 治之
	主任	西尾 幸則
	主事	重松 佳久

〔平成元年度調査組織〕

（平成元年４月１日～平成元年10月30日）

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄
	参事	井手 治己
	教育次長	古本 克
	教育次長	井上 量公
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課長	渡部 忠平
	第二係長	西 伸二
	主任	西尾 幸則
	主事	重松 佳久
	主事	栗田 正芳

（平成元年10月31日～平成２年３月31日）

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄
	参事	井手 治己
	教育次長	古本 克
	教育次長	井上 量公

調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課　長	渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター	所　長	森脇　將
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳

〔平成３年度調査組織〕

（平成３年10月１日～）

調査主体／財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	池田　秀雄
埋蔵文化財センター	所　長	和田祐三郎
	次　長	田所　延行
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳（文化教育課職員）

〔平成４年度調査組織〕

調査主体／財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	渡辺　和彦
	事務次長	鶴井　茂忠
埋蔵文化財センター	所　長	和田祐三郎
	次　長	田所　延行
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳（文化教育課職員）

3．環　境

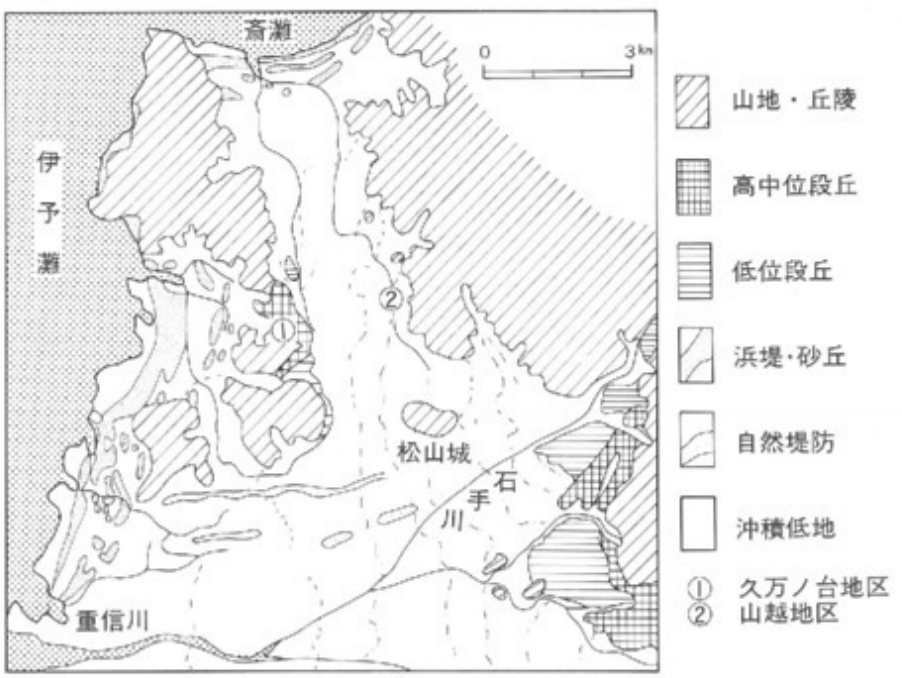
(1)　遺跡の立地

松山平野は愛媛県のほぼ中央部に位置し、西は伊予灘・斎灘に面し、南東部は石鎚山系、北部を高縄山塊に挟まれた三角状の沖積平野である。平野中央部を一級河川である重信川が東西に流れ、重信川とその支流によって形成された扇状地堆積物や氾濫原堆積物、三角州堆積物等から平野は形成されている。

山越・久万の台地域は、松山平野北西部の丘陵地と沖積低地に立地する。山越地区(註１)は高縄山塊西端部の丘陵地と低地に位置し、南東部には文京遺跡をはじめとする道後城北遺跡群が隣接している。北部及び東部の丘陵には潮見古墳群や祝谷古墳群などが分布している。

一方、久万の台地区は太山寺山塊の南麓、久万の台・衣山丘陵を中心に広がる丘陵及び低地帯である。久万の台丘陵は標高約15～20mで、台地面は起伏に富み、南北に細く延びている。同丘陵では数々の古墳が知られており、古墳は久万川の鞍部をなす所で分かれ、北部は東山町古墳群、南部は衣山古墳群と呼ばれている。また、同地区の北方及び南方には船ヶ谷古墳群、客谷古墳群などが所在する丘陵地帯が広がっている。

地質学的には、これら古墳群が所在する高縄山塊や久万の台丘陵は、その大部分を中世代の領家貫入岩類の花崗閃緑岩にって構成される花崗岩地帯である。



第１図　松山平野の地形分類図

(2) 歴史的環境

現在までに山越・久万の台地域における発掘調査は極めて少ない。本節では周辺地域における調査された遺跡を中心に歴史的環境を概説していきたい。

縄文時代

久万の台地区の北方、船ヶ谷遺跡〔阪本　1984〕において縄文晩期刻み目凸帯文に先行する時期の河川や竪穴式住居址と共に多量の土器・石器・木器類が出土している。これは縄文晩期後半には、この地に定住生活が営まれていたことを示唆する資料である。

弥生時代

ここでは山越地区、久万の台地区に分けて説明する。まず、山越地区では同地区の北東、高縄山塊西麓の緩斜面に吉藤ラドン温泉遺跡〔松山市　1986〕があり、前期末から中期初頭の遺物が集中して出土してる。出土状況から住居址に伴うものと考えられている。また、高縄山塊南西部の分岐丘陵裾部には吉藤宮ノ谷遺跡〔栗田　1989〕が所在する。遺跡からは前期末の貯蔵穴群が検出され、炭化米などが出土している。

一方、久万の台地区では同地区の南方、大峰ヶ台丘陵の東裾部、朝美澤遺跡２次調査地〔梅木・宮内　1992〕において包含層中から弥生時代前期前半（板付IIa併行期）の遺物が出土している。また、同丘陵山頂部の大峰ヶ台遺跡〔栗田　1989〕では中期中葉段階の竪穴式住居址を含む集落関連遺構と遺物が検出されている。そのほか、朝美澤遺跡１次調査地〔松村　1989〕では後期の壺棺墓や住居址等が検出されている。これらより弥生時代を通じて、大峰ヶ台丘陵を基盤とする集落が存在していたものと想定される。

古墳時代

古墳時代の集落についてはこの地域ではあまり知られていないが、古墳そのものは丘陵上に数多く分布している。

山越地区では同地区の北方、高縄山塊西面に潮見古墳群が存在する。同古墳群内の蓮華寺境内には舟形石棺の身部があり県内唯一の刳り抜き式石棺の例である。一方、久万の台地区では同地区の南方、先述した朝美澤遺跡１・２次調査地から、集落関連遺構と遺物が検出されている程度である。古墳は、衣山古墳群があり代表されるものに永塚古墳〔栗田　1987〕があげられる。墳丘長は約40mと推定され、内部主体は石室の側壁の一部が残存するだけで竪穴式か横穴式か明らかではない。くびれ部に溝をもち、溝内より円筒・朝顔型埴輪が出土している。そのほか久万の台古墳では１号墳から高坏、長頸壺などの須恵器のほかガラス玉、直刀などが出土している。東山町古墳群内では船ヶ谷向山古墳〔池田・宮崎　1989〕が所在する。墳形は定かでないが、墳丘裾部より円筒埴輪と共に鶏・馬等の形象埴輪が出土しており、古墳の造営を５世紀末に位置づけられている。また、同地区の南方、大峰ヶ台丘陵の北西斜面には前期古墳である朝日谷古墳〔松村　1991〕があり、２号墳から舶載鏡と40本を越える銅鏃・鉄鏃のほか、ガラス玉、直刀等が出土している。その他、同丘陵では後期群集墳

Ⓐ 高月山古墳　Ⓑ 大渕遺跡　Ⓒ 船ヶ谷遺跡　Ⓓ 蓮華寺(舟形石棺)
Ⓔ 松山大学構内遺跡　Ⓕ 若草町遺跡　Ⓖ 衣山瓦窯跡　Ⓗ 宮前川遺跡

(S＝1：50,000)

第２図　周辺の遺跡分布図

である客谷古墳群や御産所古墳群が分布しており、御産所権現山遺跡〔栗田　1991〕では5世紀末～7世紀前半までの数基の古墳が調査されている。

古代

古代では久万の台地区において古くから瓦窯跡の存在が知られている。衣山窯跡〔松山市1980〕は平窯であり水田中の低い崖を利用して構築されている。窯内や周辺部から複弁六弁蓮華文、重圏文軒丸瓦や唐草文軒丸瓦が出土しており8世紀中葉から9世紀初頭に存続していたものと推定されている。

［文献］

阪本　安光　1984　「船ヶ谷遺跡」愛媛県教育委員会

梅木謙一・宮内慎一　1992　「朝美澤遺跡」『松山市文化財調査報告書26』

栗山　茂敏　1989　「大峰ヶ谷遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報II』

松村　淳　1989　「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

松　山　市　1986　「松山市史料集　第2巻　考古編II」

栗田　茂敏　1989　「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

栗山　茂敏　1987　「永塚古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報I』

池田学・宮崎泰好　1989　「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

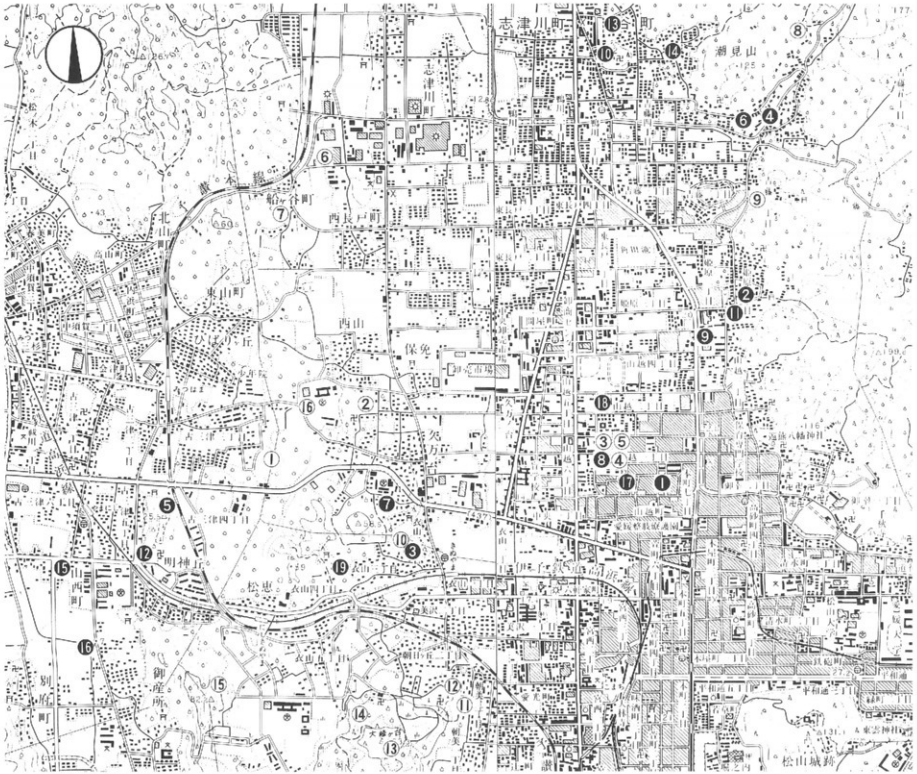
松村淳・高尾和長　1991　「朝日谷古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

栗田　茂敏　1991　「御産所権現山遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

松　山　市　1980　「松山市史料集　第1巻　考古編』

（註）

1．本稿では仮称として「山越地区」、「久万ノ台地区」と記す。「地区」という呼称は検討を要する用語であり本稿に限り用いるものとする。



（注）①～⑯は本格調査地　❶－⓯は試掘調査地

第３図　山起・久万ノ台地域の遺跡分布図（S＝1：20,000）

山越・久万の台地域の遺跡一覧（資料調査・表作成　宮内慎一・高橋　恒）

―凡例―

(1) 一覧表に使用した資料は、1990（平成２）年12月時点のものである。

(2) 試掘調査については、松山市教育委員会が実施したものに限った。

(3) 試掘調査・本格調査の面積は申請（対象）面積である。

(4) 遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。
遺構欄＝竪穴：竪穴式住居址、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴址
遺物欄＝縄：縄文土器・弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器。

(5) 実施及び期間は調査の開始時の年・月を示す。

(6) 主体欄の略記は以下である。県教委：愛媛県教育委員会、市教委：松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

(7) 番号欄のナンバーは「**第３図**山越・久万の台地域の遺跡分布図」の中のものを指す。

表２　山越・久万ノ台地域の試掘調査一覧

番号	所在地	面積(㎡)	標高(m)	包含層	遺構	遺物	実施	主体	備考
1	山越1丁目6	8,000.41					'82	市教委	
2	姫原216-1	231.40					'82. 9	〃	
3	衣山2丁目513-3 他	2,191.78					'85. 12	〃	
4	吉藤5丁目19・20	292.76					'86	〃	
5	古三津5丁目551-1 他	978.30	10.4				'88. 11	〃	
6	吉藤5丁目282-3・4・5	957.00	21.3				'88	〃	
7	久万ノ台1292-4、1317-2	1,393.00	18.6				'88. 11	〃	
8	山越1丁目267-1	1,077.00	17.7				'89. 2	〃	
9	山越3丁目15-15	4,632.00	20.1				'89. 3	〃	
10	谷町甲232-1、231-11	1,112.00	11.2	○		土師、須恵	'89. 5	〃	
11	姥原1丁目230-2	472.00	22.5			須恵	'89. 9	〃	
12	山西町159-1・2・3	529.00	6.5			土師	'89. 10	〃	
13	谷町219-6	153.00	12.5				'89. 11	〃	
14	谷町甲685-2・5 他	637.00	21.5				'90. 1	〃	
15	山西町903-1	383.00	2.3				'90. 3	〃	
16	山西町82-1・7・11・12・14	701.00	5.5				'90. 5	〃	
17	山越1丁目539-2	190.00	19.3				'90. 5	〃	
18	山越2丁目34	660(250)	16.0				'90. 7	〃	
19	衣山3丁目459-4・5	506(50)	25.5				'90. 10	〃	

表3　山越・久万ノ台地域の発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構
1	野津子山遺跡	みどりヶ丘249番	古～近	土壙
2	久万ノ台遺跡	久万ノ台785-1 他	弥～近	掘立・溝・土壙・柱
3	山越遺跡1次調査地	山越1丁目267-1	弥～中	掘立・竪穴・溝・土壙・柵・井戸・柱
4	山越遺跡2次調査地	山越1丁目314-1 他	弥～古	溝
5	山越遺跡3次調査地	山越1丁目268-1	弥～古	溝・土壙・旧河川・柱
6	船ヶ谷遺跡	安城寺町706	縄　文	竪穴・河川・杭列・柱
7	船ヶ谷向山古墳	船ヶ谷町245-6	弥～古	墳丘
8	吉藤ラドン温泉遺跡	吉藤町1005	弥　生	竪穴？
9	吉藤宮ノ谷遺跡	吉藤1丁目714-2・3	弥～中	溝・土壙・柵・柱
10	永塚古墳	衣山2丁目531-2	古　墳	石室・溝
11	朝美澤遺跡1次調査地	朝美2丁目4-30	弥～近	掘立・竪穴・溝・土壙・壺棺・柱
12	朝美澤遺跡2次調査地	朝美2丁目1141-1	弥～中	掘立・溝・土壙・柱
13	大峰ヶ台遺跡	南江戸5丁目1586-6	弥　生	掘立・竪穴・溝・柵・柱
14	朝日谷古墳（1号墳）	朝日ヶ丘1丁目	古　墳	石室
15	御産所権現山遺跡	山西町1358-3 他	古　墳	円墳・横穴式石室
16	久万ノ台古墳	久万ノ台1485-4	古　墳	横穴式石室

遺　　物	面積(㎡)	期間	調査主体	備考	番号
土・須・石鏃	600	1992. 3	市教委		1
弥・土・須・石鏃・石錘	888.52	1987. 10	〃	④	2
弥・土・須・石斧・石鏃・曲物	200	1989. 3	〃	⑤	3
弥・土・須・石鏃・平鍬	2,796	1989. 4	〃	⑥	4
弥・土・須・石庖丁・石斧	367	1989. 11	〃	⑦	5
縄・石庖丁・石鏃・砥石・木器・土偶	430	1975	県教委	①・②・③・⑧	6
弥・土・須・鉄鏃・臼玉・円筒埴輪・形象埴輪	4,135	1988. 6	市教委	⑨	7
弥		1963	〃	①・②・③	8
弥・土・須	200	1987. 12	〃	⑩	9
須・埴輪	580	1985. 1	〃	①・②・③・⑪	10
弥・土・須・勾玉	500	1988. 8	〃	⑫	11
弥・土・須	1,330.95	1991. 3	〃	⑬	12
弥・分銅形土製品・管玉・勾玉・石鏃・石斧	1,500	1987. 11	〃	①・②・③・⑭	13
須・鉄製武器・馬具・農工具・玉類	1,300	1989. 4	〃	③・⑮	14
須・土・直刀・鉄鏃・刀子・馬具	87,700	1989. 8	〃	⑯	15
須・土・直刀・ガラス玉・小玉		1976. 11	〃	①・⑰	16

［参考文献］

① 松山市　1980　『松山市史料集　第1巻　考古編』松山市史料編集委員会

② 松山市　1986　『松山市史料集　第2巻　考古編II』松山市史料編集委員会

③ 松山市　1992　『松山市史料集　第1巻　自然　原始　古代　中世』松山市史料編集委員会

④ 宮崎泰好　1992　「久万ノ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑤ 武正良浩　1991　「山越遺跡1次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

⑥ 山本健一　1991　「山越遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

⑦ 上田真　1991　「山越遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

⑧ 阪本安光　1984　「船ヶ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑨ 池田学・宮崎泰好　1992　「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑩ 栗田茂敏　1989　「古藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑪ 栗田茂敏　1987　「永塚古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報I』

⑫ 梅木謙一・宮内慎一　1992　「朝美澤遺跡」『松山市文化財調査報告書29』

⑬ 松村淳　1989　「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑭ 栗田茂敏　1989　「大峰ケ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

⑮ 松村淳・高尾和長　1992　「朝日谷古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

⑯ 栗田茂敏　1991　「御産所権現山遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報III』

⑰ 森光晴　1976　「久万ノ台古墳」『松山市文化財調査報告書9』

第２章

山越（ヤマゴエ）遺跡

－１次調査－

第2章　山越遺跡―1次調査―

1．調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1988（昭和63）年12月、株式会社　杉住宅より松山市山越1丁目267番地の1における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『160　山越遺物包含地』内にある。本調査地北東2.5kmには潮見遺跡（弥生前期後半～中期）、北東1.8kmには宮ノ谷遺跡（弥生中期中葉～後期）がある。

これらのことにより、当該地における埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1989（平成元）年2月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と溝状遺構・ピットを検出し、当該地に弥生時代から中世に至る遺構が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課と㈱杉住宅二者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺跡について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世の当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、㈱杉住宅の協力のもと、1989（平成元）年3月27日開始した。

(2)　調査組織

調 査 地　松山市山越1丁目267番地の1

遺 跡 名　山越遺跡1次調査地

調査期間　野外調査1989（平成元）年3月27日～同年4月19日

調査面積　200㎡

調査委託　株式会社 杉住宅

調査担当　調 査 員　宮崎　泰好

調査補助員　石丸　直樹、水本　完児、武正　良浩

調査作業員　朝日　徳和、岩本　　憲、大廻　　誠、久保　浩二、佐藤　直孝、塚原　竜一
沼田　崇宏、羽田野修三、肌野　祐治、菱川　敏夫、副田　昌宏、藤畠　宏明
松岡　　明、村田　和洋、盛山　　守、山邊　進也、横井　満夫、吉浦　正浩
西尾　文子、西川　千秋

（註）　執筆は、遺構遺物は梅木謙一（弥生土器他）と宮内慎一（須恵器）、遺物を除く層位・遺構等は武正良浩が担当した。

第４図　調査地位置図（S＝1：2,500）

2．層　位（第５図）

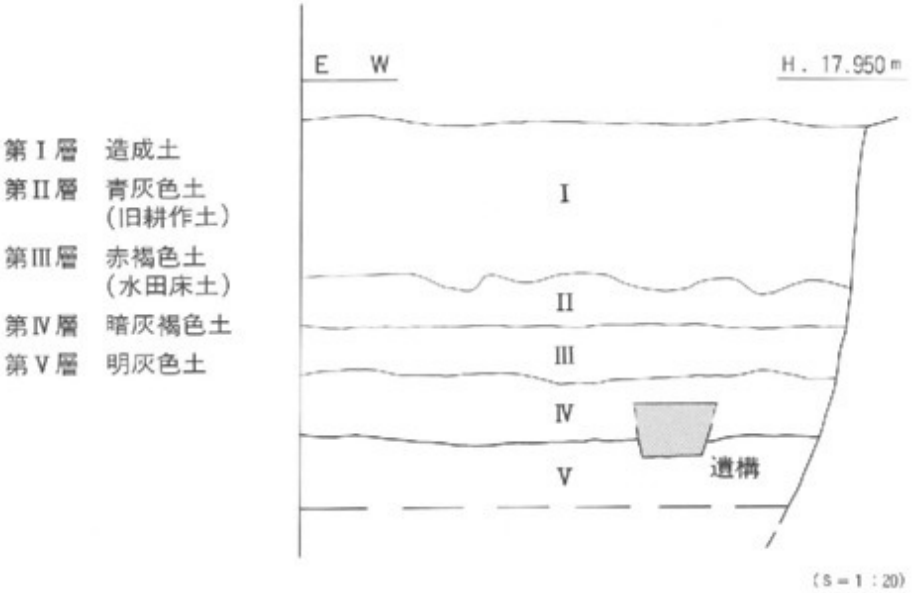
本遺跡は、高縄山系と太山寺山塊に挟まれた石手川旧流路右岸の沖積低地上、標高17mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（造成土）、第Ⅱ層青灰色土（旧耕作土）、第Ⅲ層赤褐色土（旧水田床土）、第Ⅳ層暗灰褐色土、第Ⅴ層明灰色土である。第Ⅰ～Ⅲ層は、約70cmの厚さで堆積する。第Ⅳ層暗灰褐色土は遺物包含層であり、調査地中央部から北側へ緩傾斜堆積をなす。厚さは20～25cmを測り、弥生土器・土師器・須恵器・石器等を包含する。第Ⅴ層明灰色土は無遺物層で、地山と呼ばれるものである。

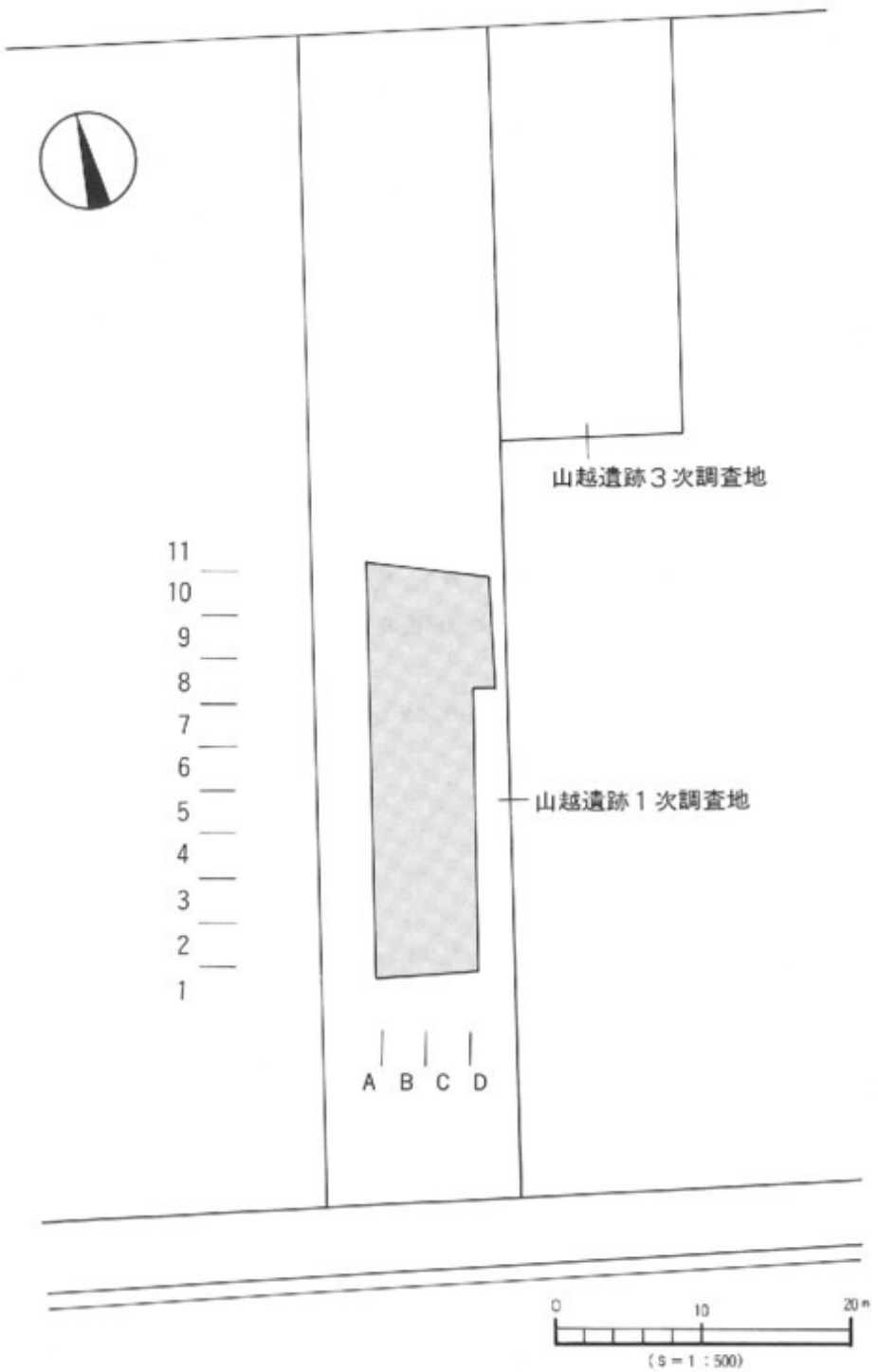
遺構は、第Ⅴ層上面での検出である。竪穴式住居址１陳（ＳＢ１）、掘立柱建物３棟、溝状遺構３条、土壙７基、棚状遺構２条、柱穴68基（掘立柱建物柱穴を含む）、井戸１基他である。ただし、第Ⅴ層上面での検出遺構は、遺構の深さなどから判断すると、本来は第Ⅳ層以上から掘りこまれた可能性が高いものである。

遺物は、第Ⅳ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器（前期～後期）、土師器、須恵器、石器（石斧２点、石鏃１点）、フレーク（大分県姫島産黒曜石１点）等がある。また、井戸（中世）内から曲物が出土している。

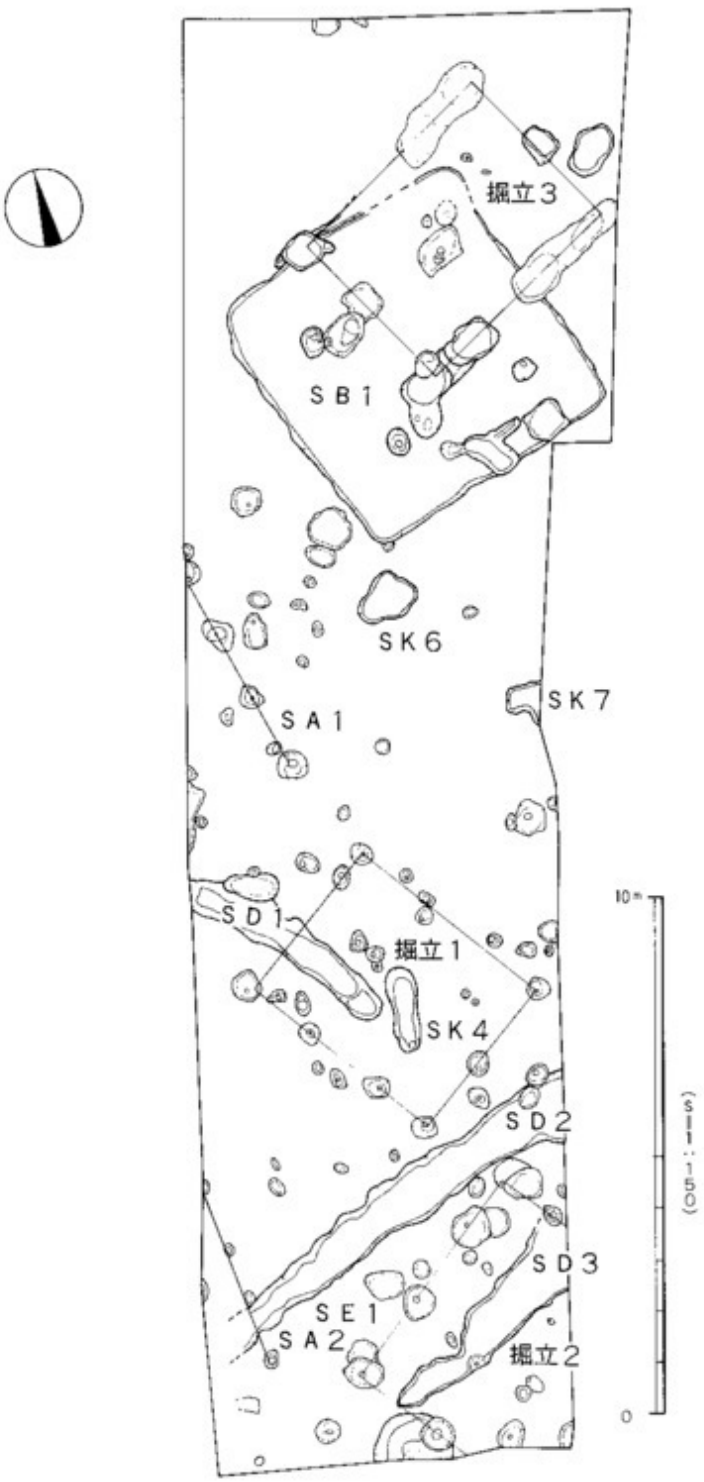
なお、調査にあたり調査区内を３m四方のグリットに分けた（第６図）。　　（武正）



第５図　基本層位図



第６図　調査地測量図



第7図　遺構配置図

3．遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址

本調査において確認された住居址は1棟である。第Ⅴ層上面にてＳＢ１を検出した。

ＳＢ１号住居址（第８図）

ＳＢ１は、調査区北東にて検出された。本住居址と掘立柱建物址３号は重複関係にあり、掘立柱建物址３号が後出する。平面形は、ほぼ方形で東西5.5m×南北5.3mである。壁高は、1.5～7.4cmを測り、後世の削平を受けているものと思われる。床面は硬質で平坦である。本住居址に伴う主柱穴は３基を確認しているが、柱穴の検出状況から北隅に主柱穴があったものと考えられ（後世の掘立柱建物址に切られ消滅か）主柱穴は４基であった可能性が高い。柱穴は円～楕円形で径40～50cm、深さ15～20cm、柱穴間は2.6～2.8mを測る。カマドは住居址南壁中央部にある。削平が著しく、天井部・煙路部は未検出である。平面形は馬蹄形を呈するものと思われる。カマド内部より土師器の高坏形土器の坏部が出土している。

出土遺物（第８図）

１は、カマド出土の高坏形土器である。カマドの中央で、口縁部が上向きとなり出土した。脚部は検出されなかった。坏部は、屈曲部に稜をもち、外傾して立ち上がる。口縁部はやや内湾するものとなる。口縁端部は丸くおさめる。磨滅のため調整は判断しがたいが、内面に一部ヘラ磨きが看取される。２～４は、住居址の埋土より出土したものである。２は鉢形土器、３は台付きの鉢、４は甕形土器である。いずれも叩き痕が看取される。

時期：本住居址は、カマド出土の遺物より古墳時代前半期に時期比定される。

(2) 掘立柱建物址（第９図）

本調査において確認された掘立柱建物址は３棟である。いずれも第Ⅴ層上面にての検出である。建物の柱穴からは、時期を特定するような資料の出土はない。

１号掘立柱建物址（第９図）　調査区中央に位置する。規模は３×２間で、桁行4.30m、梁間3.45mを測る。出土遺物はない。時期不明。

２号掘立柱建物址（第９図）　調査区南側東に位置する。規模は３×（１＋α）間で、桁行4.80m、梁間2.60m（検出長）を測る。時期不明。

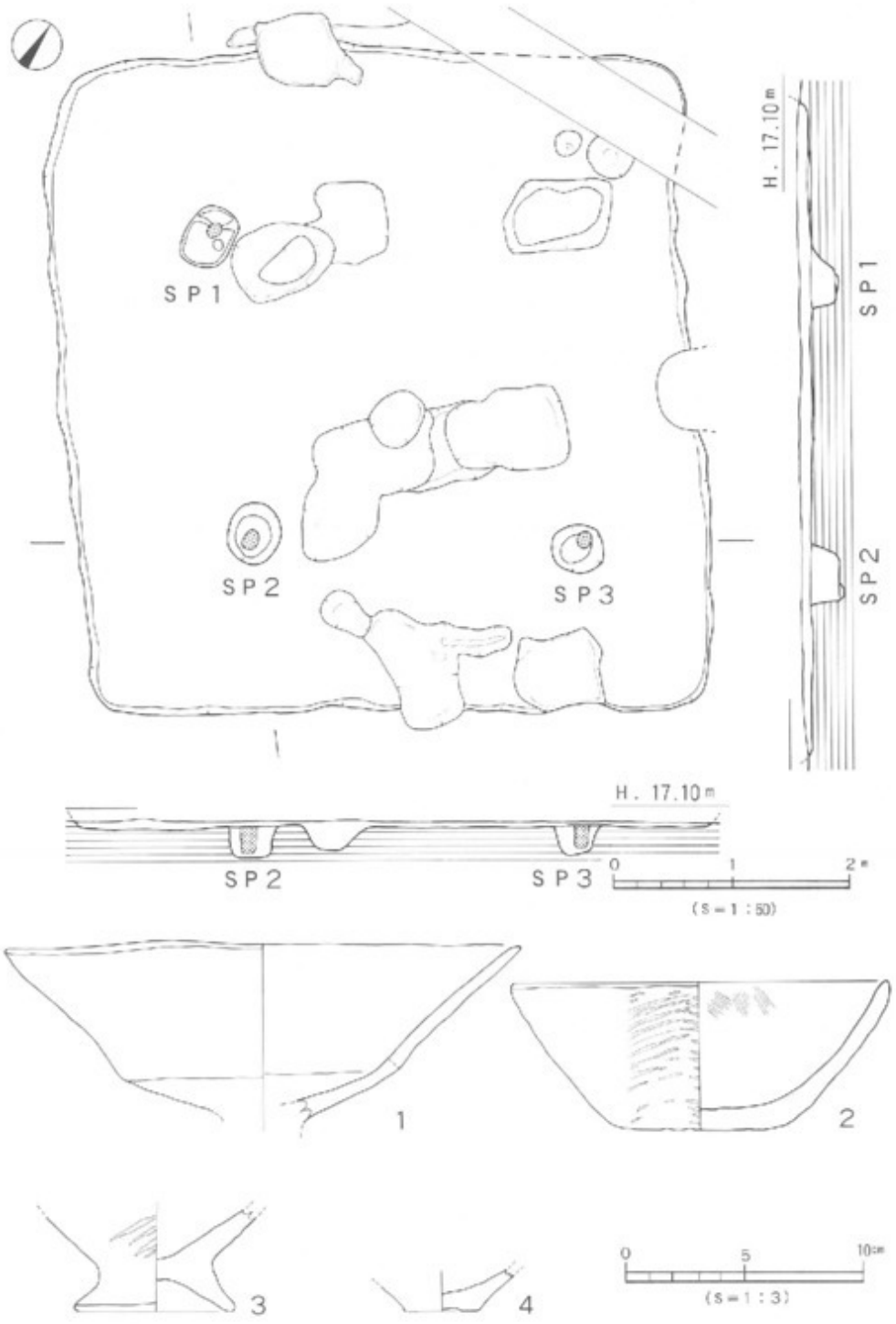
３号掘立柱建物址（第９図）　調査区北側に位置する。規模は３×２間で、桁行4.56m、梁間3.50mを測る。本建物址とＳＢ１号竪穴式住居址は重複関係にあり、ＳＢ１が先行する。時期は、古墳時代前半期以降。

(3) 溝状遺構（第７図）

本調査において確認された溝状遺構は３条である。いずれも第Ⅴ層上面での検出である。

ＳＤ１は、調査区南側中央部から北西方向に流れ、ＳＫ１に切られ調査区西壁にかかる。

ＳＤ２、ＳＤ３は平行しながら調査区南側を東西に流れる。



第8図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図

各溝状遺構に関する詳細は表６に記す。

ＳＤ出土遺物（第10図５・６）　５はＳＤ１出土品で弥生時代前期の壺形土器である。短く外反する口縁部をもち、内外面ともヘラ磨きされる。６は弥生時代後期後半の底部片である。小さく突出する平底は、中央部が凹む。７はＳＤ出土品（ＳＤ番号不明）で、小型の器台形土器もしくは二重口縁壺の口縁部と考えられるものである。上面には細かい櫛描き波状文、端面には極小の竹管文、外面には大きめの竹管文が施される。

(4)　土　壙（第７図）

本調査において確認された土壙は７基である。いずれも第Ⅴ層上面での検出である。特筆すべき土壙はＳＫ４・６・７で、弥生前期の土器片を出土しており、弥生時代前期の遺構と考えられるものである。

ＳＫ４　調査区南側中央部Ｃ４に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長径1.6m、短径0.45m、深さ17cmを測る。断面形は皿状を呈している。床面は硬く、ほぼ平坦である。覆土は暗褐色土一層である。遺物は、床面直上ないし床面付近で出土したものである。

出土遺物（第10図８）　８は鉢形土器と考えられる。短く外反する口縁部をもつ。

ＳＫ６　調査区やや北側中央部Ｂ７・Ｃ７に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ5cmを測る。断面形は皿状を呈している。床面は硬く、平坦である。覆土は暗灰色土である。

出土遺物（第10図９・10）　９は甕形土器である。口縁下端部に刻み目をもつ。10は壺形土器である。口縁端部に２条以上のヘラ描き沈線文をもつ。

ＳＫ７　調査区東側中央部Ｃ６に位置する。東半部は調査区東壁にかかる。平面形は不整の楕円形を呈するものと思われる。規模は検出長で長軸1m、短軸0.73m、深さ12cmを測る。断面形は皿状を呈している。覆土は黒褐色土である。

出土遺物（第10図11）　11は壺形土器である。ヘラ描き沈線文を３条以上施す。

(5)　柵状遺構（第７図）

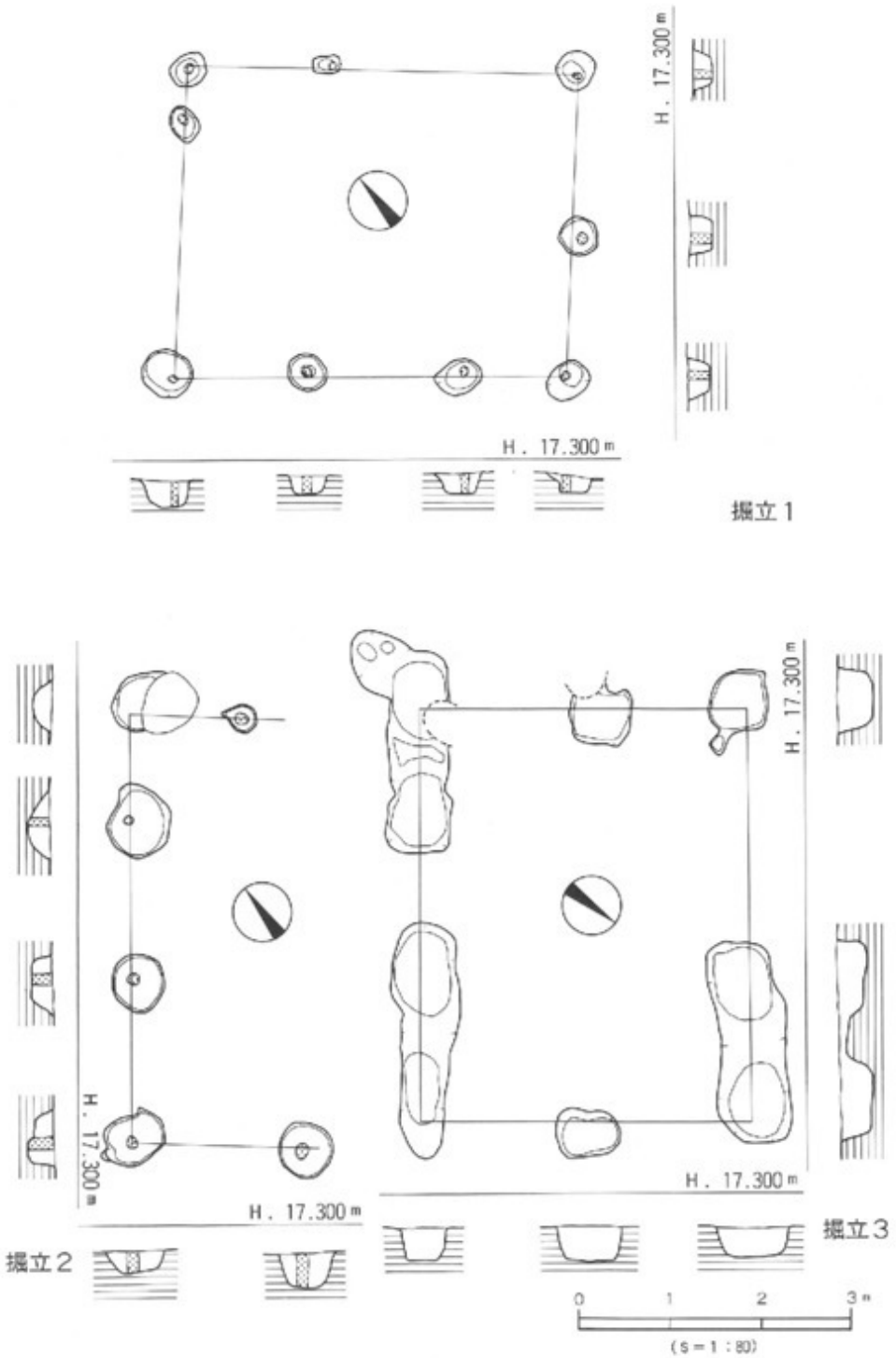
本調査において確認された柵状遺構は２条である。遺構の柱穴からは、時期を特定するような資料の出土はない。ともに第Ⅴ層上面での検出である。

ＳＡ１　調査区北西部にて検出された。北北西―南南東の方位を示す。柱穴間距離約１mの四連の柱穴からなり、検出長は4.6mを測る。

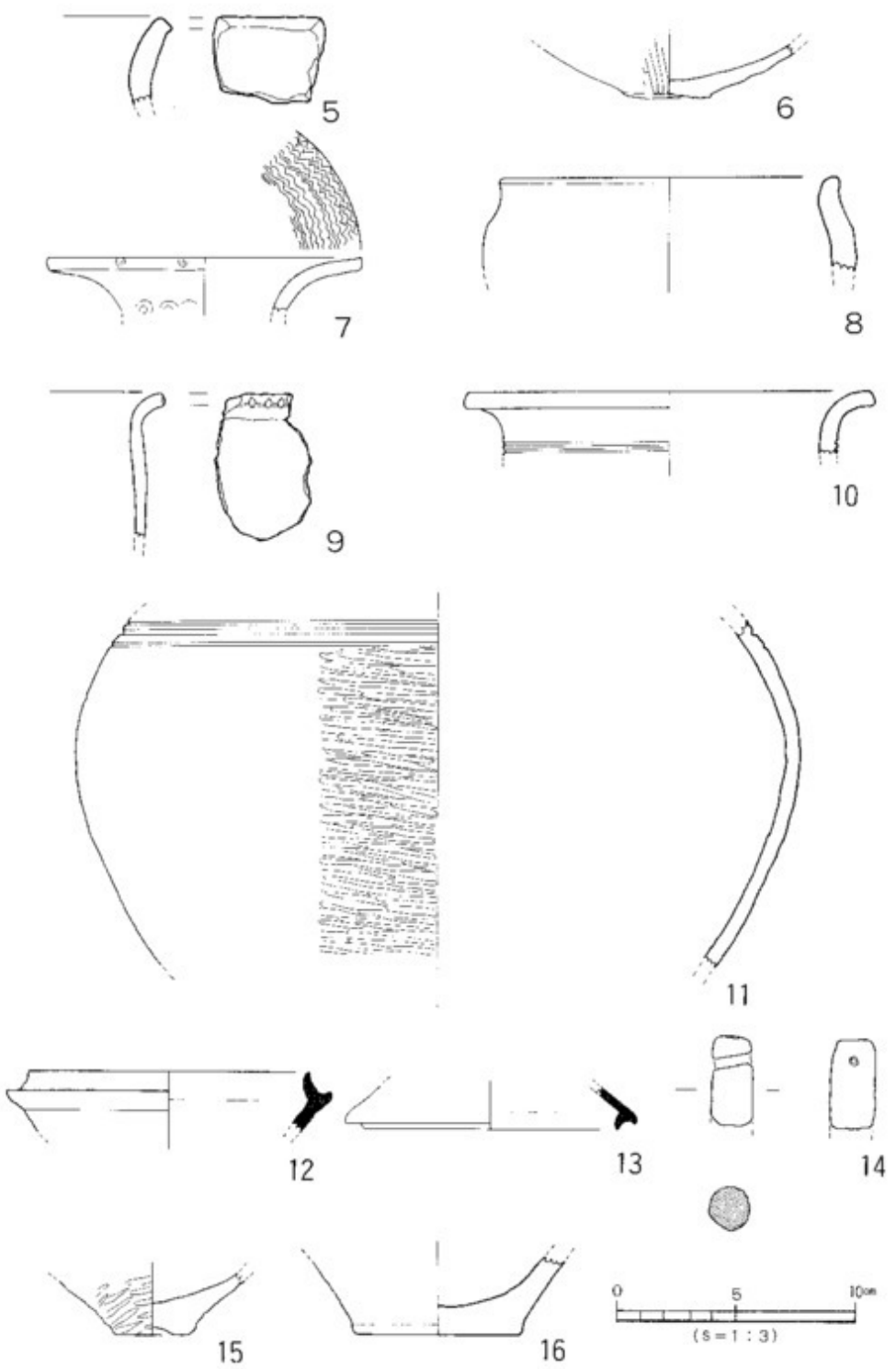
ＳＡ２　調査区南西部にて検出された。方位、柱穴間距離共に、柱穴間距離共に、ＳＡ１と同様である。ただし、柱穴の規模はやや小さいものである。

(6)　井　戸（第７図）

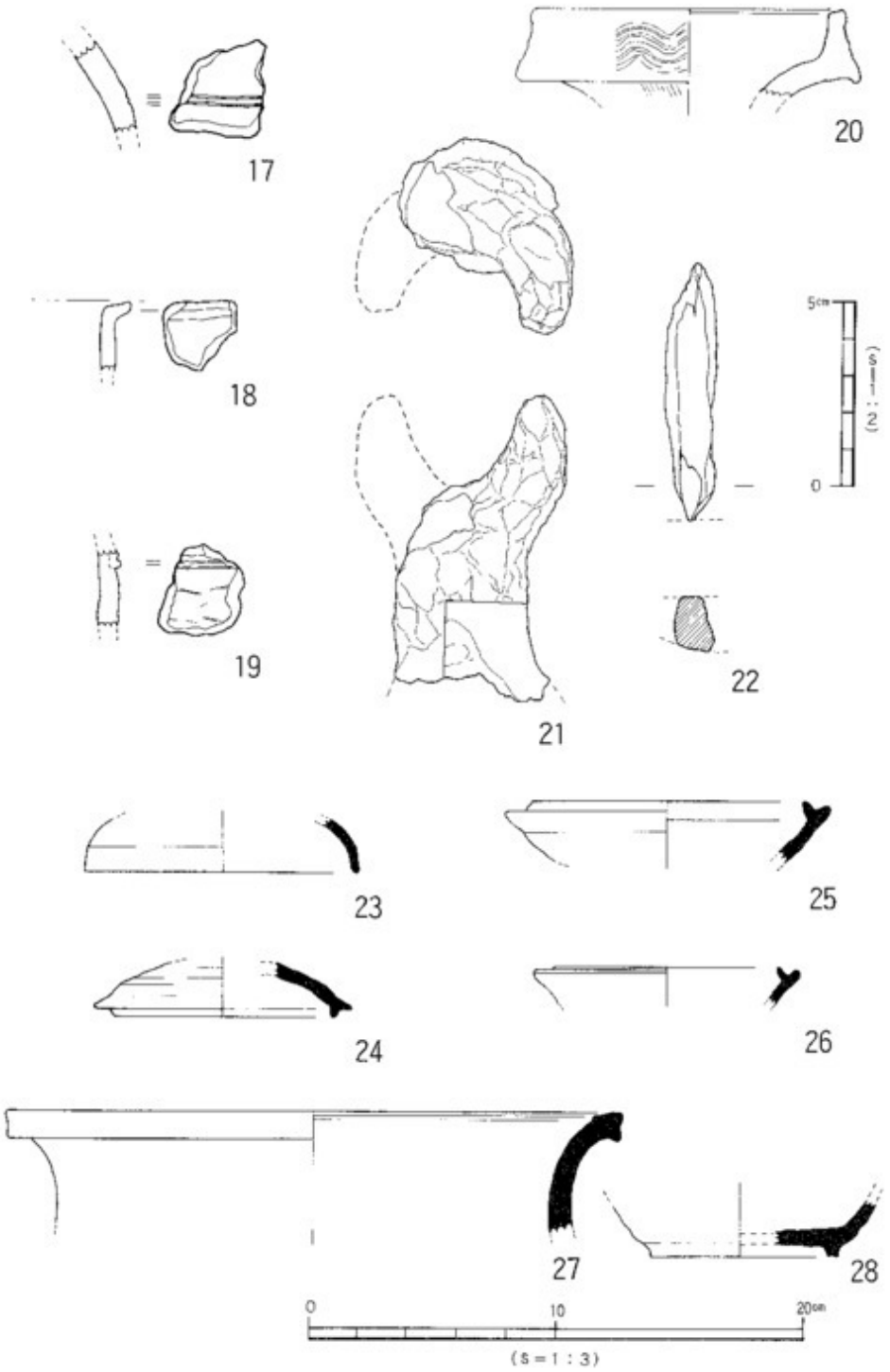
ＳＥ１　本調査において確認された井戸は１基である。調査区南側Ｂ２～Ｃ３で検出された。規模は長さ62cm×幅50cmである。深さ15cmのところで曲物の上部を検出した。曲物は上下二段（幅30cm）で構成されていた。



第9図　掘立柱建物測量図



第10図　ＳＤ・ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図



第11図　包含層出土遺物実測図

(7) 柱　穴

柱穴は68基を検出する。第Ⅴ層上層で検出する。第Ⅳ層中及び第Ⅳ層を含む上部からの掘り込みであると考えられるものが多数である。柱穴からの遺物の出土は少なく、ＳＰ43、ＳＰ44、ＳＰ64、ＳＰ92出土の遺物は図化が可能であった。

ＳＰ43出土遺物（第10図12）　12は坏身の小片である。たちあがりは内傾した後直立し、口縁端部は丸くおさめる。

ＳＰ44出土遺物（第10図13・14）　13はかえりを有する坏蓋の小片である。かえりは口縁端部より下方向に下がり、かえりは端部を尖り気味に丸くおさめている。７Ｃ。14は土錘である。直径1.8cmで存在部長は3.7cmである。直径５㎜の焼成前穿孔を１ヶ持つ。穿孔は、斜めに施される。

ＳＰ64出土遺物（第10図15）　15は弥生時代後期後半の甕形土器の底部片である。小さく突出する底部は、外面中央部が凹む。

ＳＰ92出土遺物（第10図16）　16は弥生時代前期の壺形土器の底部片である。わずかにたちあがりをもつ、大きな平底である。

(8) 包含層（第Ⅳ層）出土遺物

包含層である第Ⅳ層からは弥生時代～古代にいたる遺物が出土した。

弥生時代（第11図17～22）

17～19は前期と考えられるものである。17は壺形土器で、ヘラ描き沈線文を２条施す。18は甕形土器である。折り曲げ口縁で、口縁部は短く、端部は先細りする。19は甕形土器を考えられるものである。細い凸帯を２条貼りつける。類例が少ない。20～21は後期末を考えられるものである。20は複合口縁壺である。複合口縁接合部に擬口縁がみられる。櫛描き沈線文（５条）を施す。22は柱状片刃石斧である。欠損部が多く刃部の一部が残るにすぎない。

古墳時代～古代（第11図23～28）

坏蓋　23は天井部と口縁部との境界は弱い稜をなす。口縁部は垂下し、口縁端部は丸くおさめている。内外面共に回転ナデ調整を施している。24は身受けのかえりを有する坏蓋。天井部は笠形を呈し、かえり端部は尖り気味に丸くおさめている。天井部外面１／２程度に回転ヘラ削り調整、他は内外面共に回転ナデ調整を施している。

坏身　25・26は坏身小片。たちあがりは短く内傾し、端部は両者共に尖り気味に丸くおさめている。28は高台の付く坏。体部と底部の境界はわずかに稜をなす。高台は境界付近に付き、外端面で接地している。高台端面には沈線状の凹みが認められる。底部内面はナデ調整他は内外面共に回転ナデ調整を施している。

甕　27は口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は下方に肥厚している。口縁部内面は段をなしている。内外ともに回転ナデ調整を施している。

以上の須恵器は23～26が６世紀末～７世紀初頭、27・28は８世紀中葉に時期比定される。

4．小　結

本調査では、弥生時代～中世以降の生活関連遺構と弥生時代前期～中世の遺物を確認した。

(1)　**弥生時代**　弥生時代と特定できる遺構はない。しかしながら、ＳＫ４・６・７から弥生前期の遺物が出土していることにより、その可能性は否めない。また、近接地の山越遺跡２次調査地において同時期の溝状遺構が検出されていることを考えると、当地周辺に同時期の生活関連遺構が存在していたことは十分考えられる。

(2)　**古墳時代**　本調査にて生活址であるＳＢ１を検出した。山越周辺地域における竪穴式住居址の検出例は少なく、貴重な資料と言える。ＳＢ１は、削平が著しく残存状況は決して良好とは言えないが、カマドの位置や住居の軸線等、前半期の住居研究の基礎資料となるものである。

以上、簡単に調査の報告を行った。周囲にある山越遺跡２次調査地、山越遺跡３次調査地との関係は第８章にて行うが、本調査地周辺に共通することは、弥生時代の遺構や遺物が共に検出量が僅かであるということである。しかしながら、周辺地域に生活址が存在している可能性は十分に考えられる。本調査地では、時期や性格を特定する遺構が僅かであったが、当地域の集落経営を考える上では一つの資料となるものであり、今後、周辺地域の慎重な調査が望まれる。

遺構・遺物一覧（遺構一覧：武正良浩、遺物観察表：梅木謙一・宮内慎一・山下満佐子）

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略記について

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3)　遺物観察表の各記載について

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称の略記について

例）口→口縁部、体→体部、天→天井部、底→底部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位

胎土・焼成欄　胎土欄の略記について、

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～２）→「１～２㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について　例）◎→良好、○→良、△→不良

表4　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	柱穴(本)	内部施設 高床	土壙	炉	カマド	周壁溝	備　考
1	古墳前半期	隅丸方形	5.5×5.3×0.67	3(4)				○	○	

表5　掘立柱建物址一覧

掘立	規　模(間)	方位	桁下 実長(尺)	桁下 柱間寸法(尺)	梁行 実長(尺)	梁行 柱間寸法(尺)	床面積(㎡)	時　期	備　考
1	3×2		430	4.8×5.6×3.9	345	5×6.5	14.84	時期不明	
2	3×(1+α)		480	4.4×5.8×5.8	260	6.2×2.4		時期不明	1部未検出
3	3×2		456	3.7×5.8×5.7	350	6.7×5	15.96	古墳前半以降	

表6　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	A5～B4	皿　状	4.3×0.6×0.25	明灰色砂	弥生		弥生時代
2	B2～C4	皿　状	7.6×1.0×0.12	黒灰色シルト			時期不明
3	C2～C3	皿　状	4.2×0.9×0.09	暗褐色土			時期不明

表7　土壙一覧

土壙(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	B5	楕　円	皿　状	1.05×0.5×0.07				時期不明
2	C4	長方形	皿　状	1.16×0.7×0.07				時期不明
3	B,C4	不　円	舟底状	1.62×1.32×0.2				時期不明
4	C4	不整楕円	皿　状	1.6×0.45×0.17	暗褐色土	弥生		弥生前期
5	C2,D1	不　円	レンズ状	1.5×(0.9−α)×0.27				時期不明
6	B,C7	不整形	皿　状	1.1×0.8×0.05	暗灰色土	弥生		弥生前期
7	C6	不整楕円形	皿　状	1.0×0.73×0.12	黒褐色土	弥生		弥生前期

表8　SB1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	高坏	口径 21.7 残高 7.4	坏屈曲部には稜をもつ。口縁部はわずかに内湾して立ちあがる。	磨滅	磨滅（ミガキか）	乳黄色 乳黄色	石・長 (1~3)多 ○		4
2	鉢	口径(16.0) 器高 6.2 底径(6.7)	叩き技法。丸みのある平底。口縁端部は丸みをもつ。	①ナデ ⑩タタキ ⑪ナデ	⑨ハケ→ナデ ⑪ナデ	乳黄色 乳茶色	石・長(1) ◎		4
3	台付鉢	底径(6.7) 残高 4.2	台付鉢。叩き技法。組み合せによる台の接合。	⑨タタキ ⑫ヨコナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~3) ◎	黒斑	4
4	甕	底径 3.2 残高 1.7	平底、底外面中央部はわずかに凹む。叩き技法。	⑪ナデ	ナデ	乳黄色 暗灰茶色	石・長(1~5) ◎	黒斑	4

表9　SD・SK・SP　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	壺	残高 3.6	短かく外反する口縁。口縁端部は丸みのある「コ」字状をなす。	⑪⑫ヨコナデ (ヨコ方向の工具痕)	ヨコ方向のヘラミガキ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~4) ◎	SD 1	
6	壺	底径 3.6 残高 2.3	わずかに突出する平底。底部外面中央部は凹む。	ヘラミガキ(タテ)	ナデ(工具痕有)	暗灰色 灰黄色	石・長(1~5) ◎	黒斑 SD 1	4
7	器台	口径(13.3) 残高 2.3	内面に櫛描波状文。4~6を単位に2~3段。外面に竹管文。	ナデ	①マメツ ⑧ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~6) ◎	SD	4
8	鉢	口径(14.0) 残高 3.9	短かい外反口縁。口縁下はなで肩む。	①ヨコナデ ③磨滅	磨滅	黄茶色 黄灰色	石・長(1~4) ◎	SK 4	
9	甕	残高 6.2	如意形口縁。口縁下端に刻み目。	①ヨコナデ ⑧ナデ	磨滅	灰褐色 黒褐色	石・長(1~2) ◎	SK 6	4
10	壺	口径(16.7) 残高 2.6	口縁下に2条のヘラ描き沈線文。	①ヨコナデ ⑨ヨコハケ・ハケかミガキ(ヨコ方向)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎	SK 6	
11	壺	胴径(30.2) 残高14.8	胴部の張り強し。ヘラ描き沈線文3条以上。	ヘラミガキ(ヨコ)	磨滅	灰褐色 黄灰色	石(1~2)多 長・金 ◎	SK 7	
12	坏身	口径(10.5) 残高 2.5	立ち上がりは内傾した後、直立し端部は丸い。受部はやや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP43	
13	坏蓋	口径(10.6) 残高 1.9	かえりは口縁端部より下方にとがり、かえり端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP44	
14	土錘	径1.8 残高 3.7	径5mmの焼成前穿孔。	ナデ(一部磨滅)		乳黄茶色	石・長(1~2) ○	SP44	4

SD・SK・SP 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	甕	底径 3.2 残高 2.6	突出する平底。底外面中央は凹む。叩き技法。	⑧タタキ ㉟ナデ	磨滅	灰黄色 灰黄色	石・長(1~4) ◎	SP64	4
16	壺	底径(7.0) 残高 3.4	大きく厚みのある平底。	磨滅	磨滅	乳灰色 乳灰色	石・長(1~2) ◎	SP92	

表10 包含層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	壺	残高 3.8	肩部にヘラ描き沈線文2条	磨滅	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		
18	壺	残高 2.7	折り曲げ口縁。無文。	磨滅	磨滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		
19	壺	残高 3.2	貼り付け凸帯文2条	条痕	磨滅(一部剥離)	黒灰色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ◎		5
20	壺	口径(12.4) 残高 3.5	複合口縁。櫛描き波状文5条。	⑪ヨコナデ→施文 ㉞ハケ→ナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1~2) ○		
21	支脚	残高12.5	受部突起は2ヶ。柱下半部は中空。	ナデ調整	ナデ	暗褐色 褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	5
23	坏蓋	口径(11.2) 残高 2.2	天井部と口縁部の境界は弱い稜をなす。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
24	坏蓋	口径 8.9 残高 2.2	天井部は笠形を呈し、かえり端部は尖り気味に丸くおさめる。	㉔½回転ヘラ削り ⑪回転ナデ	回転ナデ	明灰色 明灰色	石・長(1~2) ◎		
25	坏身	口径(10.8) 残高 2.5	立ち上がりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部はやや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色 明灰色	石・長(1~2) ◎		
26	坏身	口径(9.2) 残高 1.5	小片。立ち上がりは薄く短く内傾。受部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
27	壺	口径(24.7) 残高 5.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚。端部内面に段あり。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	石・長(1) ○		5
28	坏	底径(7.5) 残高 2.3	高台坏。体部と底部の境界にわずかに稜あり。外端面で接地。	回転ナデ	⑭回転ナデ ㉟ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		5

表11 包含層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
22	石斧	½	不明	7.0	1.4	1.4	31.75		5

第３章

山越（ヤマゴエ）遺跡

－２次調査－

第3章　山越遺跡—2次調査—

1．調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1989（平成元）年12月、隅岡嘉代子・野本昇の両氏より松山市山越1丁目314番地-1他における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『160　山越遺物包含地』内にある。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1989（平成元）年4月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生～古墳時代の遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化教育課・隅岡嘉代子・野本昇三者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、文化教育課が主体となり、隅岡嘉代子・野本昇・松木事務所の協力のもと1989（平成元）年4月3日開始した。

(2)　調査組織

調査地　松山市山越1丁目314番地-1他

遺跡名　山越遺跡2次調査地

調査期間　野外調査　1989（平成元）年4月3日～同年4月25日

調査面積　2,796㎡

調査委託　隅岡嘉代子　野本　昇

調査担当　調査員　宮崎　泰好

調査補助員　木下　公一　山本　健一

調査協力　松木事務所

調査作業員　笠松　誠悟、平川　美徳、宮本　理

手島　俊廣、菱川　敏夫、沼田　崇宏

朝日　徳和、安永　浩二、岡田　浩明

森永　純司、西尾　文子、西川　千秋

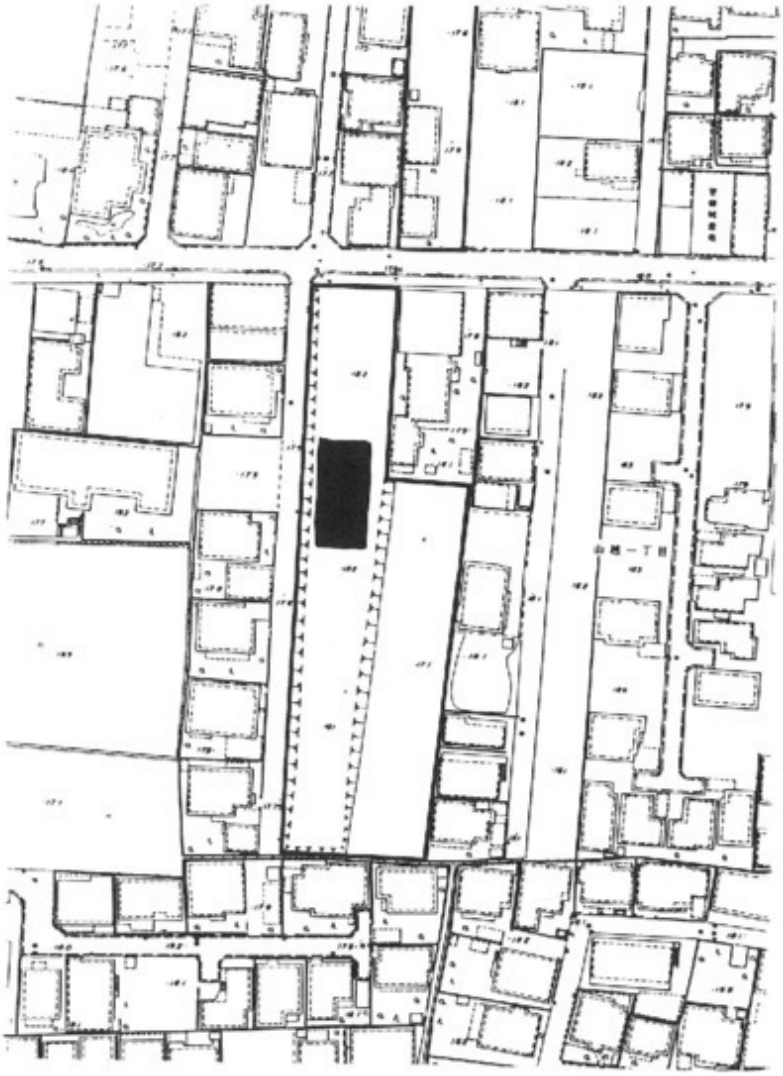
(3)　調査の工程

調査の工程を以下に略記する。

平成元年4月3日　重機にて表土の除去を行う（～5日まで）。調査用具の運搬。

4～6日　3mグリットを設置し、包含層の掘り下げを行う。

7～12日　遺構の検出を行い、溝状遺構を5条確認する。



（S＝1：1,500）

第12図　調査地位置図

13～15日　溝状遺構を掘り下げる。14日にＳＤ２より磨製石鏃と木製鍬（弥生前期）を検出する。

17～18日　測量と遺物の取り上げを行う。

19～22日　記録写真の撮影と測量の補足を行う。

24～28日　出土遺物・記録図面等の整理を行う。　（武正・梅木）

2．層　位（第13図）

本遺跡は、高縄山系と太山寺山塊に挟まれた石手川旧流路右岸の海抜18mの沖積低地に立地する。

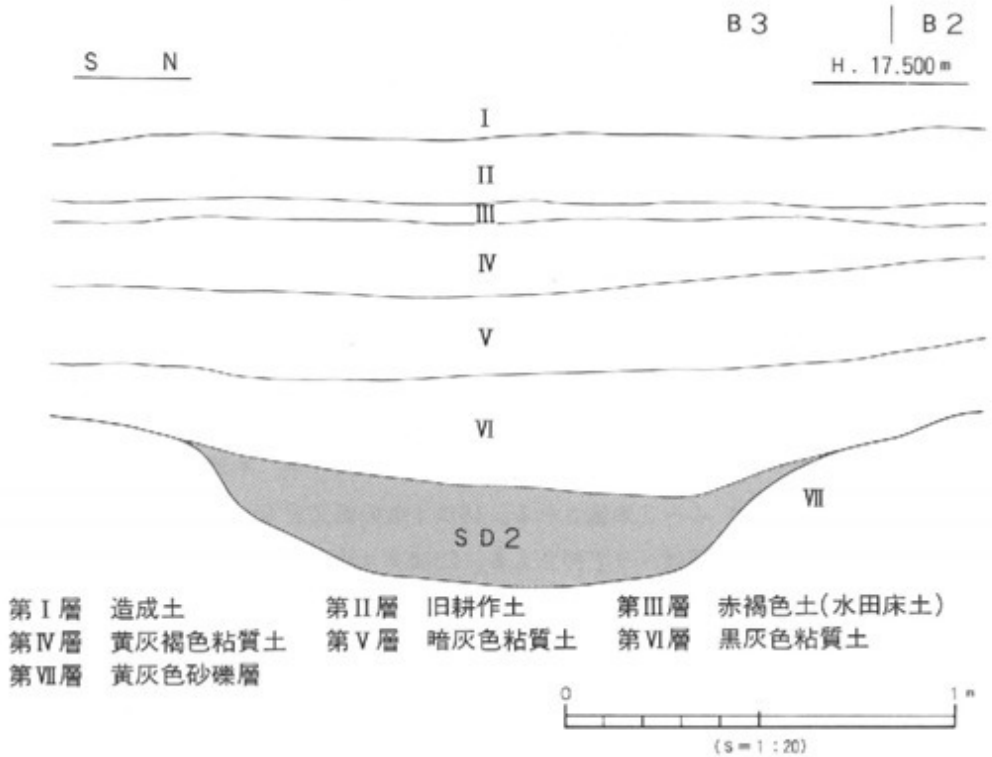
基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層赤褐色土（水田床土）、第Ⅳ層黄灰褐色粘質土、第Ⅴ層暗灰色粘質土、第Ⅵ層黒灰色粘質土、第Ⅶ層黄灰色砂礫層である。

第Ⅰ層及び第Ⅱ・Ⅲ層は5～30cm、第Ⅳ層黄灰褐色粘質土は30cmの堆積を測る。第Ⅴ層暗灰色粘質土及び第Ⅵ層黒灰色粘質土は遺物包含層である。第Ⅴ層は厚さ5～20cmを測り、弥生土器・須恵器を包含し、第Ⅵ層は厚さ10～30cmを測り、弥生土器を包含する。

遺構は、第Ⅵ層上面で溝状遺構5条を検出した。検出遺構は、遺構の深さなどから判断すると、本来は第Ⅴ層以上から掘り込まれた可能性が高い。

遺物は、第Ⅴ層、第Ⅵ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器、須恵器、石器（有茎磨製石鏃）、木製鍬等がある。

なお調査にあたり、調査区内を3m四方のグリットに分けた（第14図）。　　（武正）



第13図　調査区西壁土層図

３．遺構と遺物

(1) 溝状遺構

本調査にて検出された遺構は溝状遺構５条であった。北から順に溝ＳＤ１～５である。

ＳＤ２（第15図・図版７）

ＳＤ２は、調査区中央やや北にて検出した溝である。北東から南西に主軸をもち、検出長は長さ11.6m、幅３m、深さ50cmを測り、断面形はレンズ状を呈している。溝の東・西端は調査区外にいたる。時期は、出土遺物より弥生時代前半に比定される。

出土遺物（第16～19図１～29・図版８～10）

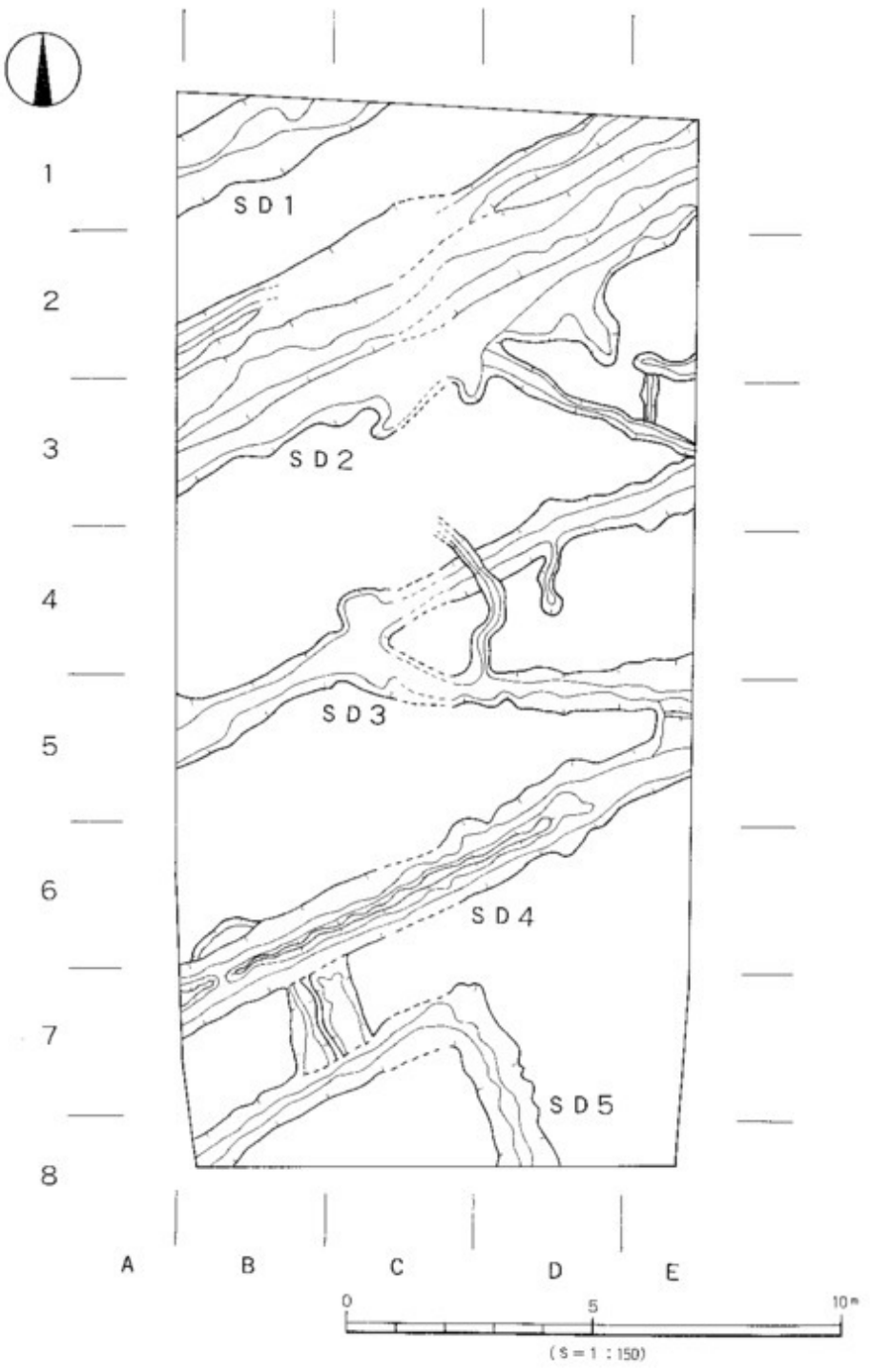
甕形土器（１～10）　１～７は如意形口縁をもつ甕形土器である。１は口縁端面下半に大きめの刻み目をもつ。内外面とも刷毛目調整痕が顕著に看取される。２は口縁端面の刻み目は全面におよぶ。ヘラ描き沈線文を１条もつ。３は口縁部を欠き胴部にヘラ描き沈線文を１条もつ。４は口縁端面下半に刻み目をもつ。刻み目の間隔は狭い。ヘラ描き沈線文を２条もつ。５は小片であり、口径はやや小さくなる可能性がある。口縁端面下半に刻み目をもつ。ヘラ描き沈線文を２条もつ。６は口縁部の小片である。口縁端面は狭く、刻み目は全面におよぶ(本来は下半にしたものか)。７は口縁部を欠く。屈曲部以下の破片で、ヘラ描きのヨコ方向の沈線文間に小さい竹管文を１列もつ。８は小片である。縄文晩期凸帯文土器の系譜上にあるものである。口縁端部には小さい刻み目をもつ。口縁下には細くて薄い凸帯をもち、凸帯上には小さい刻み目をもつ。９は底部片である。平底であるが、わずかに凹みをもつ。内外面に煤が付着する。10は底部片である。平底であるが、わずかに凹みをもつ。壺形土器の底部片である可能性もある。

壺形土器（11～25）　11は外反する短い口縁部をもつ。口頸部境にヘラ描き沈線文を２条もつ。ヘラ描きを丁寧に行う。12は口縁部の小片である。13は口頸部境にヘラ描き沈線文を１条以上もつ。15は胴部片で、ヘラ磨きされ、ヘラ描き沈線文を３条もつ。16はヘラ描き沈線文を上部２条以上、下部３条以上をもつ。17はヘラ描きによる加飾性が強い。上部よりヨコ沈線文１条以上、やや弧状を呈する斜線文７条、ヨコ沈線文３条、木葉文と思われるものが向きを異にし（ハの字状）４～５条施される。18は４条の弧文をもつ。19は段、20・21は段と沈線文をもつ。なお、段部はヘラで押さえる。22はヨコ沈線文間に刺突文を施す。23は焼成後に赤色顔料による彩文が施される。24・25は底部で、大きめの平底となる。

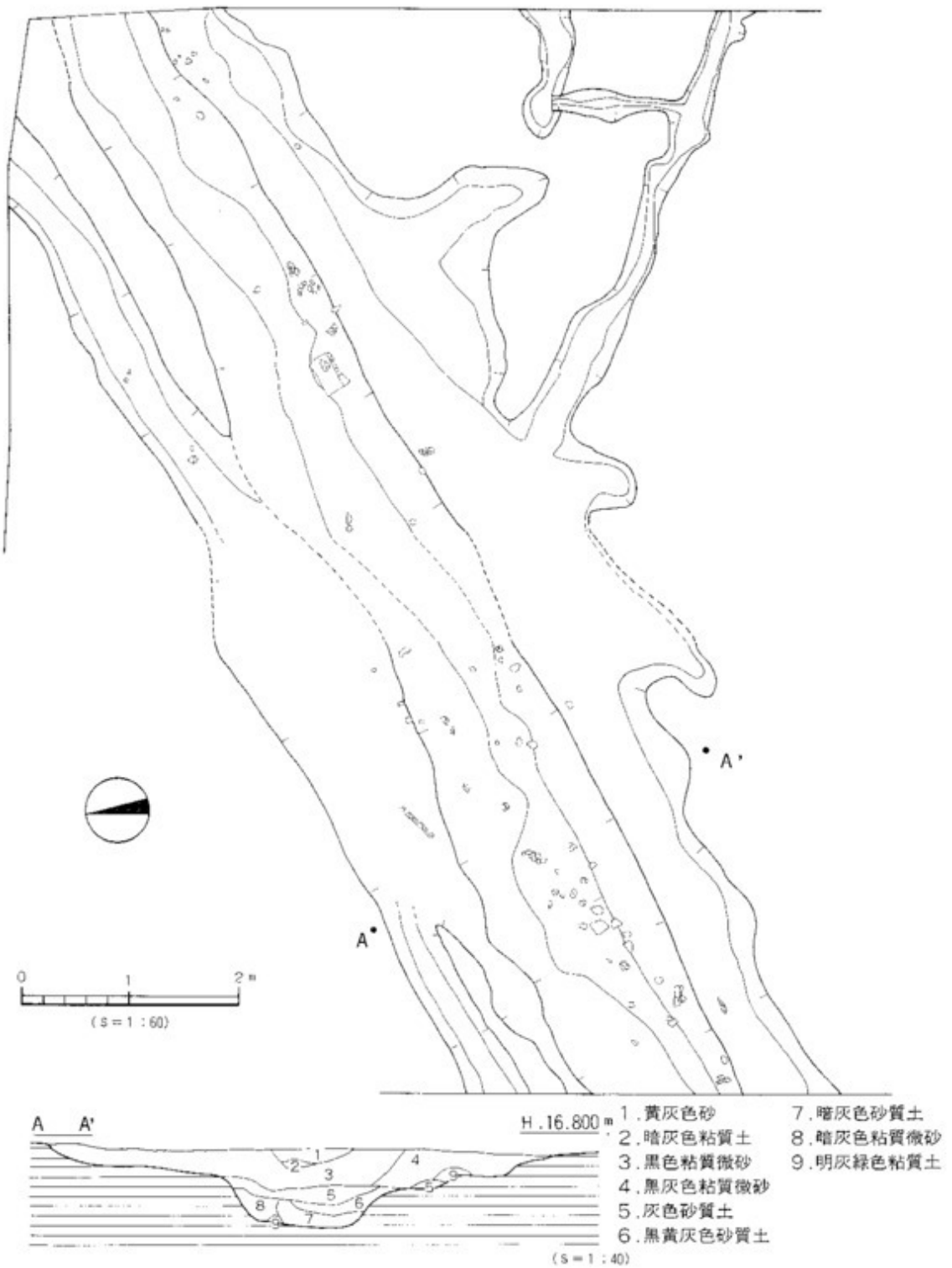
鉢形土器(26)　26は直口口縁をもつ鉢形土器である。口径は、小片からの推定値である。口縁端部は丸みのある「コ」の字状となる。

蓋形土器（27）　27は小片で、角度や煤の付着（内面の端部周囲）より蓋形土器の一部と考える。端部は器壁が厚く、わずかに外反する。

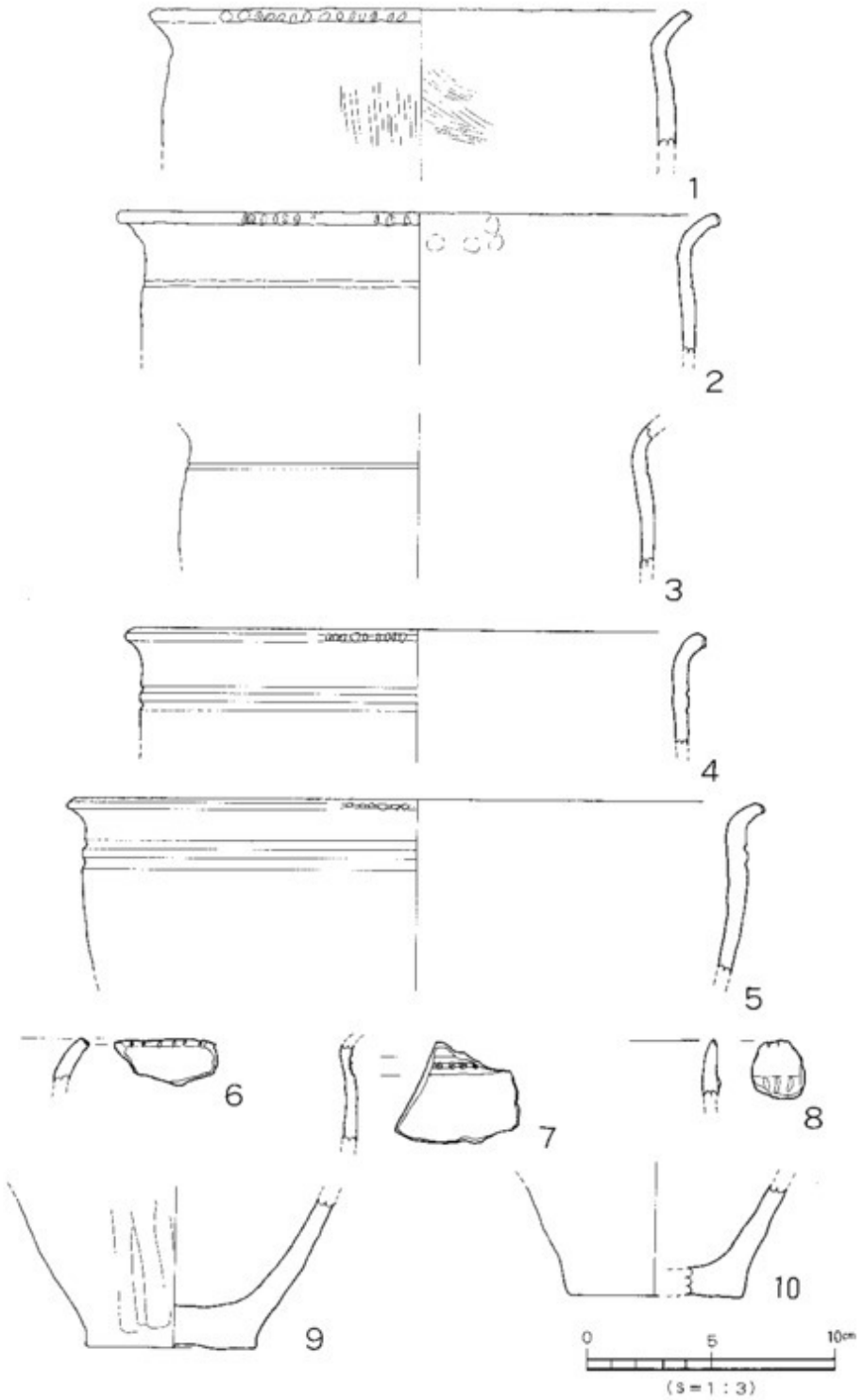
木製鍬（28）　28は木製鍬である。長さ37.1cm、刃部幅22.0cm、柄孔側部幅21.1cm厚さ0.



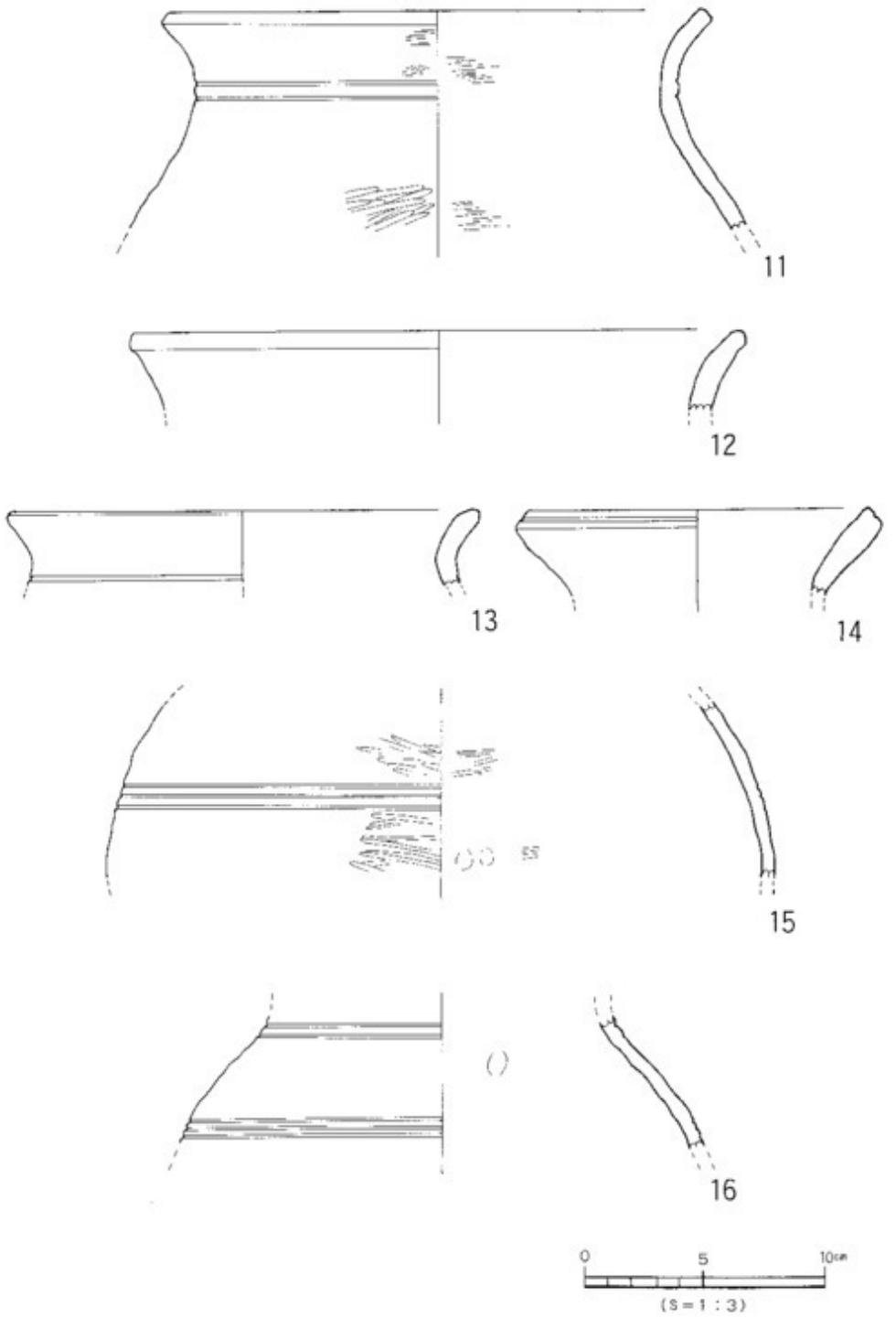
第14図　遺構配置図


A'
A
0
1
2m
(S=1:60)
A A'
H.16.800m
1.黄灰色砂
2.暗灰色粘質土
3.黒色粘質微砂
4.黒灰色粘質微砂
5.灰色砂質土
6.黒黄灰色砂質土
7.暗灰色砂質土
8.暗灰色粘質微砂
9.明灰緑色粘質土
(S=1:40)

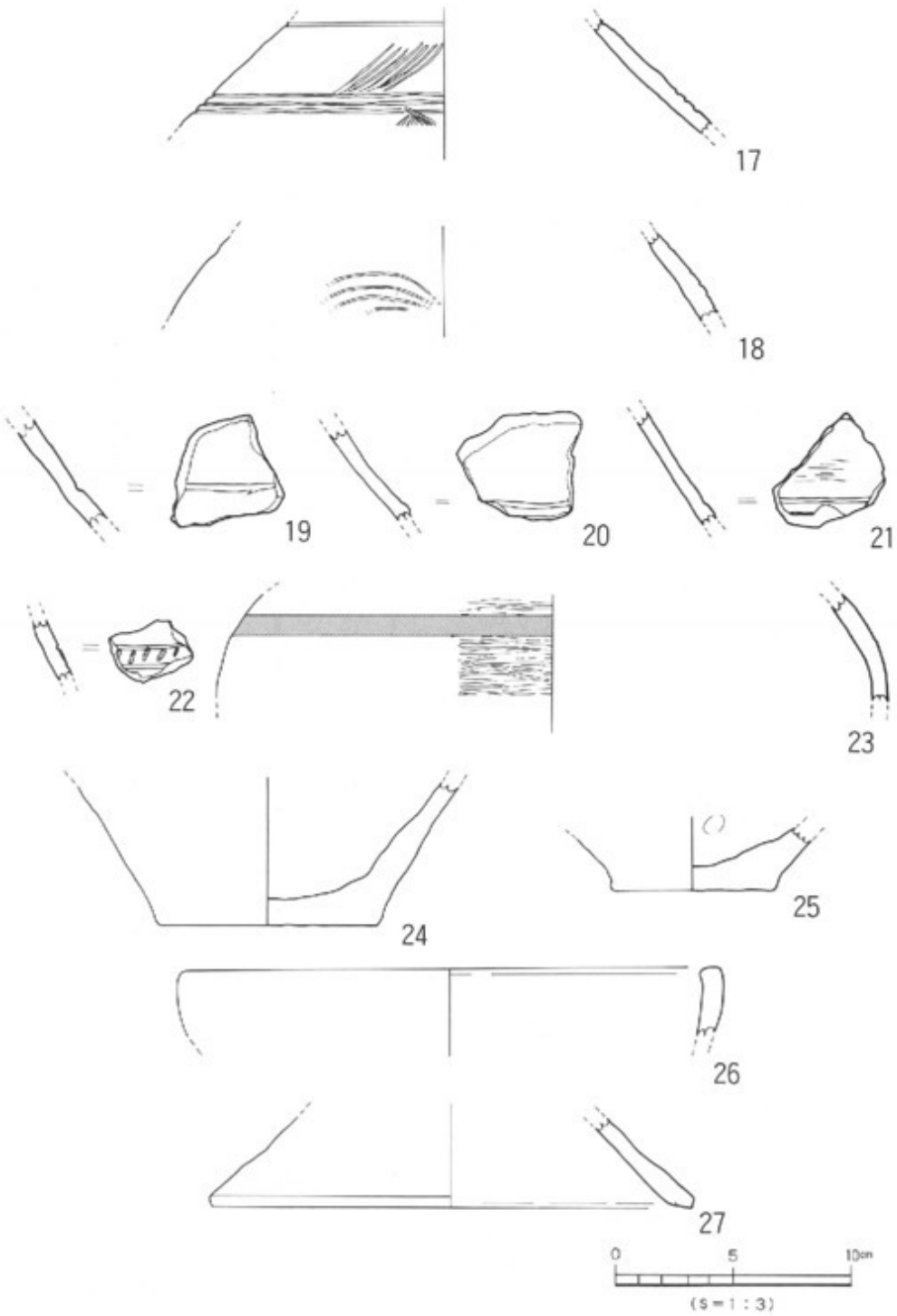
第15図　ＳＤ２測量図



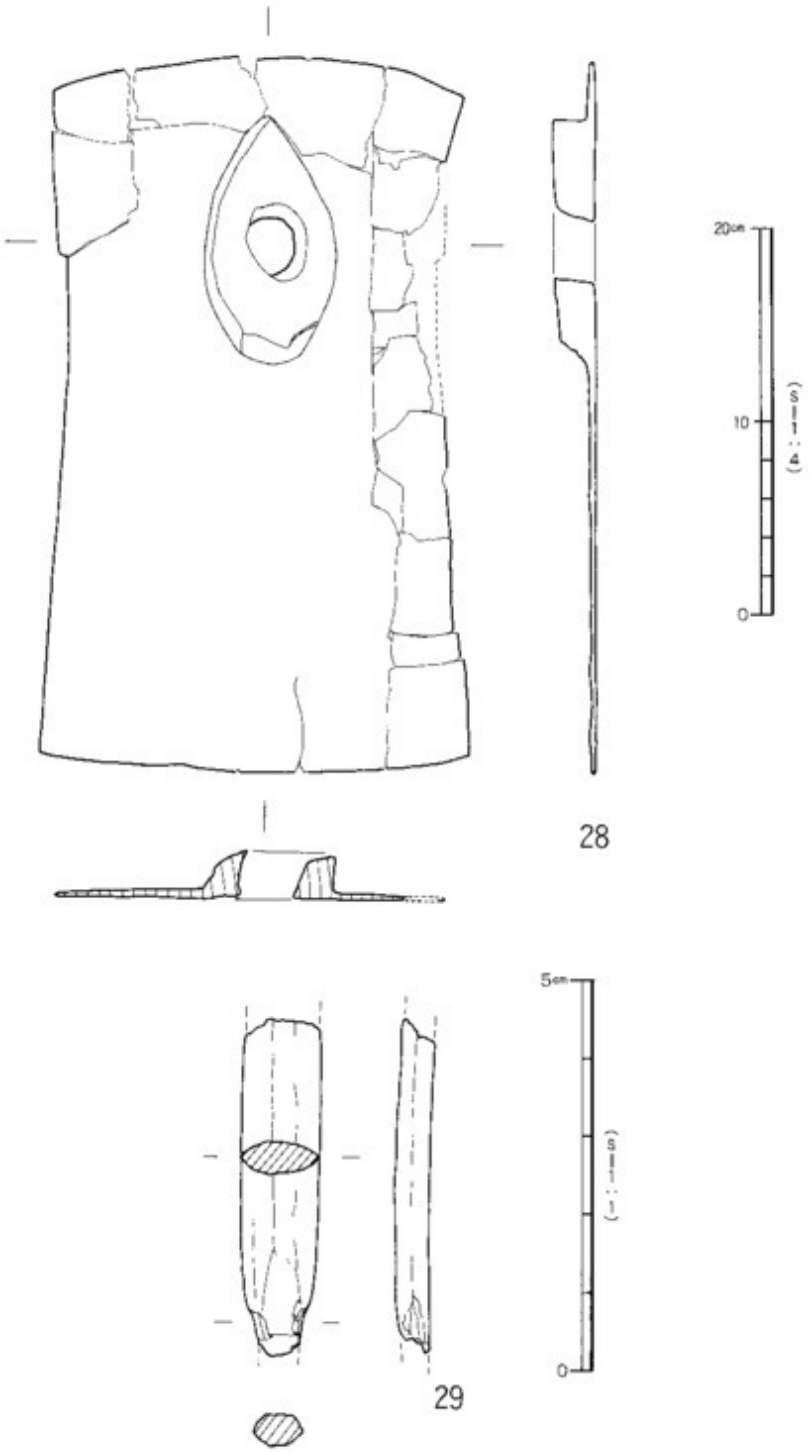
第16図　ＳＤ２出土遺物実測図　(1)



第17図　ＳＤ２出土遺物実測図　(2)



第18図　ＳＤ２出土遺物実測図　(3)



第19図　ＳＤ２出土遺物実測図　(4)

5cmを計る。形態は、長方形を呈するが刃部がやや広く、側縁は中ほどやや狭くなる。また、側縁の柄孔側(柄孔の円子と同じ位置)に小さい段をもつ。柄孔は舟形を呈し、長さ13.1cm、幅6.7cm、厚さ（身を含む）2.2cmを計る。円孔は斜めに穿たれ、直径3.2×3.7cmを計る。本例は形態的特徴より、山口譲治氏の分類によると平鍬ＢＣ型に比定される。樹種はカシで木取りは柾目となる（註１）。

磨製石鏃(29)　29は有茎磨製式石鏃である。鋒先と茎を欠く。長さ4.3cmで、身の断面は偏平で不明瞭な六角形を呈する。茎断面は六角形を基本とするが、片面は一部磨きにより小さい面を両側に１面ずつもつ。

ＳＤ１　ＳＤ１は、調査区北西隅で検出した溝である。検出長で長さ4.9m、幅1.8m、深さ５cmを計り、断面形は皿状を呈している。埋土は、黒灰色砂である。

ＳＤ３　ＳＤ３は調査区中央部で検出した溝である。やや西側で二つに分かれる。検出長で長さ11.4m、幅0.9m、深さ７cmを測り、断面形は皿状を呈している。埋土は、黒灰色砂である。出土遺物(第20図30)：30は縄文晩期刻み目凸帯文系の深鉢片である。凸帯は小さく薄いものである。口縁端面と凸帯上に小さく細い刻み目をもつ。

ＳＤ４　ＳＤ４は、ＳＤ３とＳＤ５との間で検出された。検出長さ11.4m、幅1.1m、深さ13cmを測る。断面形は皿状を呈している。埋土は、暗灰色砂である。

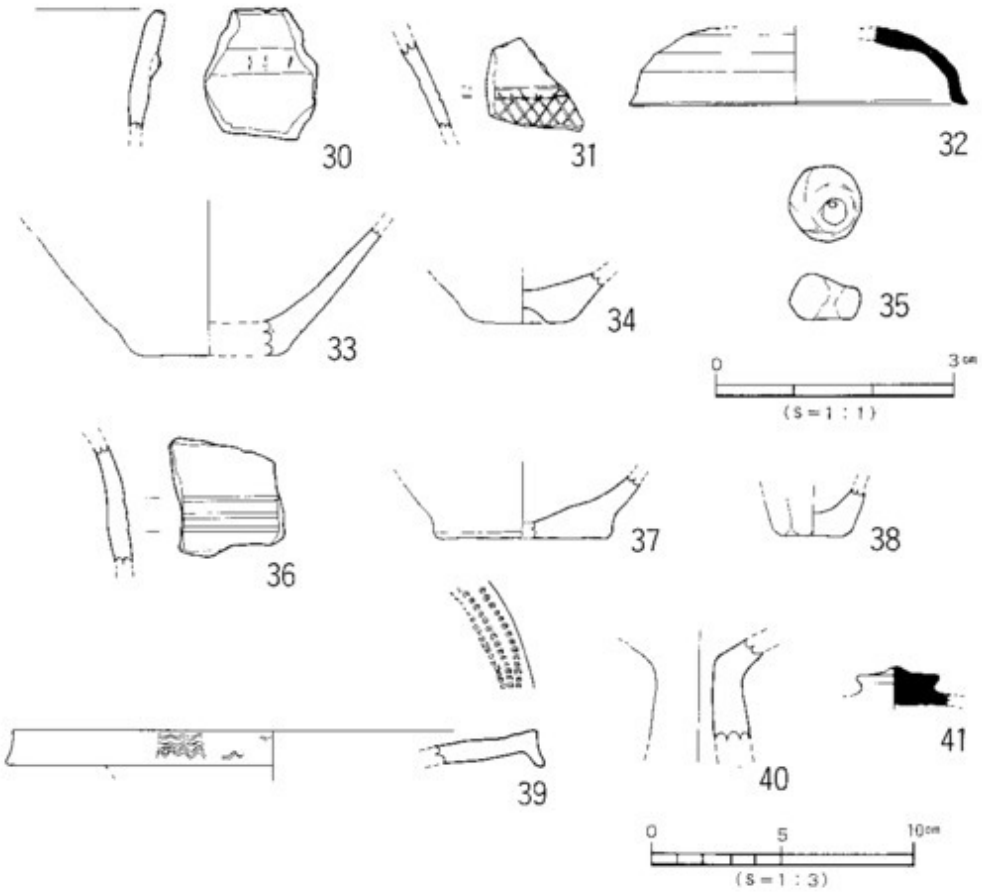
ＳＤ５　ＳＤ５は、調査区南端で検出した。調査区南西隅から北東へ伸び、5.5mのところで南東方向へ直角に曲がる。幅9.1cm、深さ34cmを測り、断面形は、レンズ状を呈している。

(2)　包含層出土遺物（第20図31～41）

第Ⅴ層出土遺物（31・32）　31は壺形土器の小片である。ヘラ描きのヨコ沈線文２条と斜格子目文をもつ。弥生時代前期。32は短頸壺の蓋である。口唇部をやや内側に向けて面取り、口唇端部は外方に突出している。天井部外面１/２程度に回転ヘラ削り調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。６Ｃ。

第Ⅵ層出土遺物（33～35）　33は壺形土器の底部片である。丸みのある厚い底部は、やや突出する。弥生時代後期か。34は甕形土器の底部片である。丸みのある平底の底部は、外面中央が凹む。弥生時代後期。35は石製の小玉である。直径0.95cm、両側より穿孔する。

出土地点不明遺物（39～41）　39は器台形土器の受部片である。上面に極小の竹管文が４列、受部端面に櫛描き波状文４条以上を施す。弥生時代後期後半。40は高坏形土器の脚部片である。充塡部が欠損する。柱部の内面は丁寧に仕上げる。時期は不明。41は中央部が突出する蓋のつまみである。８Ｃ。



第20図　ＳＤ３・包含層出土遺物実測図

４．小　結

本調査では、遺物包含層２層と弥生～古墳時代の溝状遺構を確認した。注目されるのは、ＳＤ２である。

ＳＤ２は、弥生時代前期の溝状遺構であり、弥生前期の土器と木製鍬、磨製石鏃が出土した。弥生前期土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器を器種構成にもち、今回の地点からは高坏形土器の資料は得ることができなかった。器形は甕形土器は如意形口縁でヘラ描きを施すものがみられ、壺形土器は口頸部境の区画は沈線文によりなされている。この特徴は、平野では前期後半の所謂「阿方、片山式」に先行するものとなる。これ等一群の土器は、平野では久米高畑遺跡５次ＳＫ２、（註２）同９次ＳＫ７、（註３）文京遺跡４次ＳＢ１・２（註４）、樽味遺跡ＳＤ４（註５）でみられる（第７章）。木製鍬は、現時点では本例が松山平野で最も古いものといえる。松山平野では、弥生時代の木製品の出土例が少ないこ

ともあり、貴重な資料といえる。なお、本例と同形態を呈する資料には、島根県タテチョウ遺跡、西川津遺跡に類例が認められる(註6)。磨製石鏃は、平野出土で時期が確定可能な資料としては最も古いものである。石材は、平野南部の砥部川流域に分布する結晶片岩であることや、形状は本来の形態がやや簡略化された点がみられ、平野内での製作品である可能性が強い。磨製石鏃は、平野内では中期中葉の祝谷六丁場遺跡1点が時期特定できる（註7）他、樽味高木遺跡2次（註8）等で少数の出土事例がある。

今回の調査では、時期が不明なものがあるが5条の溝状遺構を確認した。いずれも、徴及び粗砂層を埋土としてもち、流路の機能を考えることができるものである。また、流路方向が同一であることや、『L』字状に屈折するものもあり、水田経営との関係が注目される。これ等のことより、調査地周辺の集落様相を推定すると、調査地よりも北は微高地となっているため居住区とし、以南は低地となり生産地の可能性を考えることができる。くわえて1・3次調査（第2・4章）では、本調査検出のSD2出土品と同時期の資料が少量ながら、出土し、1次調査地では3基の土壙が検出されていることより、調査地以北が居住区であった可能性は高いものと考える。

以上、山越遺跡2次調査の報告を略記した。山越遺跡2次調査は、弥生時代の松山平野北部に展開する和気遺跡群及び道後城北遺跡群の境界地にあり重要な地点である。さらに、弥生時代前期の集落様相が一部明らかになった点は注目されるものである。また、平野においても、貴重な資料が多数得られ、くわえて瀬戸内地方の弥生時代前期の文化様相がうかがえるものとして注目される調査資料でもある。（梅木）

（註）

1　山口譲治氏（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）の御教示による。

山口譲治　1988　「福岡における弥生木製農具」『考古学ジャーナル　292」

〃　1989　「第6章結章　2、出土木器について」「板付周辺遺跡調査報告書」福岡市教育委員会

2　宮崎泰好　1989　「久米高畑遺跡（5次）」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

3　池田　学　1991　「久米高畑遺跡9次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

4　栗田茂敏　1992　「文京遺跡―4次調査」「道後城北遺跡群』㈱松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

5　宮本一夫　1989　「樽味遺跡の調査」「鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

6　山口譲治氏（福岡市埋蔵文化財課）の御教示による。

7　宮崎泰好　1991　「祝谷六丁場遺跡―調査報告1」松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

8　栗田正芳　1992　「樽味高木遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報IV』㈱松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

表12　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	A1～C1	皿状	4.9×1.8×0.05	黒灰色砂			弥生以降
2	B1～E2	レンズ状	11.6×3.0×0.5	明灰色砂	弥生・平瓶・石鏃		弥生前半
3	D3～E5	皿状	11.4×0.9×0.07	黒灰色砂			弥生以降
4	B7～E5	皿状	11.4×1.1×0.13	暗灰色砂			弥生以降
5	B7～D8	レンズ状	6.6×1.1×0.34	黒灰色粘質土			弥生以降

表13　ＳＤ２　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(21.2) 残高 5.7	如意形口縁。口縁下端部に大きい刻み目。無文	①ヨコナデ ⑭ハケ(タテ)	①ヨコナデ ⑭ハケ(ナナメ)	黒灰色 暗褐色	石・長(1～3) 金 ○	煤	8
2	甕	口径(24.1) 残高 5.7	如意形口縁。口縁端部全面に刻み目。ヘラ描き沈線文、1条。	①ヨコナデ ⑭ナデ	①ヨコナデ ⑭ナデ	茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4) 金 ◎	煤	8
3	甕	残高 5.0	如意形口縁。口縁部端部を欠く。ヘラ描き沈線文、1条。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ◎		8
4	甕	口径(23.0) 残高 4.6	如意形口縁。口縁下端部に刻み目。ヘラ描き沈線文、2条。	①ヨコナデ ⑭ナデ	①ヨコナデ ⑭ナデ	黒色 暗褐色	石・長(1～2) ◎	煤	8
5	甕	口径(27.6) 残高 7.0	如意形口縁。口縁下端部に刻み目。ヘラ描き沈線文、2条。	①ヨコナデ	①ヨコナデ ⑭ナデ	黒色 黄褐色	砂 ◎	煤	8
6	甕	残高 1.9	如意形口縁。口縁端部全面に刻み目。小片。	ナデ	磨滅	暗茶褐色 黄褐色	石・長(1) ○		8
7	甕	残高 4.0	如意形口縁。ヘラ描き沈線文2条とその間に竹管文1列。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎	煤	8
8	甕	残高 2.3	刻み目凸帯文。口縁端部に刻み目。	磨滅	磨滅	灰黄褐色 灰黄褐色	長(1) ○		8
9	甕	底径 6.8 残高 6.0	大きく、厚い平底。わずかに凹みをもつ。	横ナデ	不明	黒褐色 黒色	石・長(1～4) ◎	煤	8
10	甕	底径(7.0) 残高 4.6	大きく、厚い平底。わずかに凹みをもつ。	ハケ→ナデ	ナデ	黄褐色 黒灰色	石・長(1～3) ◎		8

（註）　遺構・遺物一覧の凡例はＰ29を参照。

ＳＤ２ 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	壺	口径(22.0) 残高 9.3	短かく外反する口縁。 口縁下にヘラ描き沈線文、2条。	①ヨコナデ ⑥ヘラミガキ(ヨコ)	①ヨコナデ ⑥摩滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) 金 ◎	黒斑	9
12	壺	口径(25.2) 残高 3.5	短かく外反する口縁。 丸みのある口縁端部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	9
13	壺	口径(19.4) 残高 3.1	短かく外反する口縁。 口縁下にヘラ描き沈線文、1条以上。	摩滅	摩滅	黄灰褐色 黄灰褐色	石・長(1~2) ○		9
14	壺	口径(14.2) 残高 3.7	厚みのある器壁。 口縁端面にヘラ描き沈線文、1条。	ヨコナデ	ヘラミガキ(ヨコ)	暗褐色 褐色	石・長(1~3) ◎		9
15	壺	残高 7.4	ヘラ描き沈線文、3条。	ヘラミガキ(ヨコ)	ハケ→ナデ	暗茶褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ◎	黒斑	9
16	壺	残高 5.5	上部：ヘラ描き沈線文、2条以上。 下部：ヘラ描き沈線文、3条。	摩滅	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		9
17	壺	残高 6.7	ヘラ描き文。上部より、横1条以上。 斜線7、横3、木葉がある。	ヘラミガキ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1) ◎		9
18	壺	残高 4.8	ヘラ描き沈文4条。	摩滅	摩滅	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	9
19	壺	残高 4.8	頸胴部境に段。ヘラで押さえる。	ヘラミガキ(ヨコ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		9
20	壺	残高 4.5	頸胴部境に段、及び沈線文をもつ。	ヘラミガキ	ナデ	黒色 褐色	石・長(1~4) ◎		9
21	壺	残高 4.9	頸胴部境に段、及び沈線文をもつ。	ヘラミガキ(ヨコ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		9
22	壺	残高 2.5	ヘラ描き沈線文2条とその間に刺突文1列。	摩滅	摩滅	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ○		9
23	壺	残高 4.5	彩文。 焼成後に赤色顔料を施す。	ヘラミガキ(ヨコ)	ナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎	赤色顔料	
24	壺	底径(9.3) 残高 6.0	大きく、厚い平底。 わずかに突出する。	ミガキの可能性あり。	ナデ	黄灰褐色 黄褐色	石・長(1~5) ◎	黒斑	
25	壺	底径 6.9 残高 2.6	大きい平底。 わずかに突出する。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗黄褐色	石・長(1~4) ◎		
26	鉢	口径(22.8) 残高 3.0	内湾する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。	摩滅	摩滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) 金 ○		9
27	鉢	口径(20.3) 残高 3.8	端部はわずかに外反する。	ナデ	ナデ	暗茶褐色 暗褐色	石・長(1~2) 金(金) ◎	煤	9

表14　SD2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
29	有茎磨製石鏃	½	結晶片岩	4.3	1.0	0.4	3.4		10

表15　SD3・包含層　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	深鉢	残高 4.5	外傾口縁。粘土紐の違い肌み目凸帯文。	磨滅	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) ◎	SD-3	10
31	壺	残高 3.5	ヘラ描き沈線文。横2条と斜格子目文。	磨滅	磨滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ◎	5層	10
32	蓋	口径(12.8) 残高 3.0	短頸壺の蓋。口縁部を内側に面取り。口縁端部は外方に突出する。	㋐ヘラ回転ヘラ削り ㋑回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	石・長(1~2) ◎	5層	10
33	壺	底径(5.6) 残高 4.9	小さい、丸みのある平底。	磨滅	磨滅	暗灰色 暗灰色	石・長(1~3) ○	6層	10
34	壺	底径(4.2) 残高 2.0	小さい平底。底外面中央部は凹む。	磨滅	磨滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ○	6層	10
36	壺	残高 4.4	ヘラ描き沈線文、3条。	ヘラミガキ(ナナメ)	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		10
37	壺	底径(5.4) 残高 2.5	突出する平底。外面は工具及び指頭により凸凹が著しい。	磨滅	磨滅	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ○		10
38	ミニチュア	底径 2.5 残高 1.9	手捏ね品。丸みのある平底。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1~3) ○		10
39	器台	口径(19.8) 残高 1.3	上面に竹管文4条。端面に櫛描き波状文4条以上。	磨滅	ハケ	淡黄色 灰黄色	石・長(1~3) ○		10
40	高杯	残高 4.2	充填部が欠損する。	磨滅	ナデ	黄褐色 灰黄色	石・長(1~3) ○		10
41	蓋	つまみ径3.0 残高 1.5	中央部が突出するつまみ。	ナデ	ナデ	灰　色	長(1~3) ◎		10

表16　包含層　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
35	丸玉	完形	不明	0.6	0.95	0.6	0.85	6層	10

第4章

山越（ヤマゴエ）遺跡

－3次調査－

第4章　山越遺跡―3次調査―

1．調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1989（平成元）年4月、㈱ミツワ都市開発より松山市山越1丁目268番地の1における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『160　山越遺物包含地』内にある。また当地の西接地は、平成元年3月に調査され、弥生～古墳時代の包含層と遺構を確認している（1次調査・第2章）。特に、当調査地の西側約5mの地点からは、古墳時代前半の竪穴式住居址が検出され、当地が同時代に住居区であったことが確認された。

これ等のことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1989（平成元）年4月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地にも遺跡が展開していることが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課と㈱ミツワ都市開発の二者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、西接地である山越遺跡1次調査地検出の弥生～古墳時代の生活関連遺構が本調査地にても同様な展開を示すかを重要課題とし、当地の同時代の集落構造を明らかにすることを目的として、文化教育課が主体となり、㈱ミツワ都市開発の協力のもと、1989（平成元）年11月20日に調査を開始した。

(2)　調査組織

調 査 地　松山市山越1丁目268番地の1

遺 跡 名　山越遺跡3次調査地

調査期間　野外調査　1989（平成元）年11月20～1990（平成2）年1月13日

調査面積　367㎡

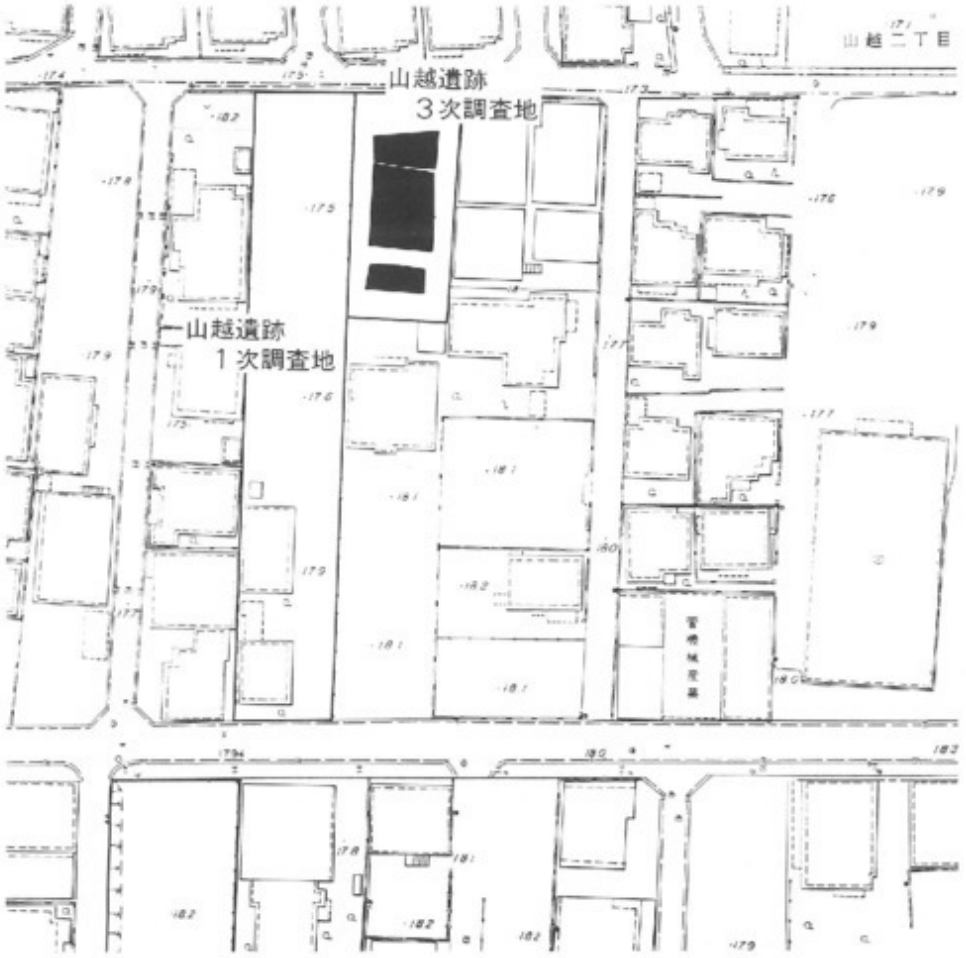
調査委託　㈱ミツワ都市開発

調査担当　調 査 員　上田　真

〔註〕

1）本調査については、概報として『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』で一部を報告した。その後の整理及び検討により、遺構数や見解において修正された点が幾つかある。

2）本調査の整理と執筆は、調査担当者である上田　真氏（平成3年退職）との協議により、梅木謙一が行うものである。



（S＝1：1,000）

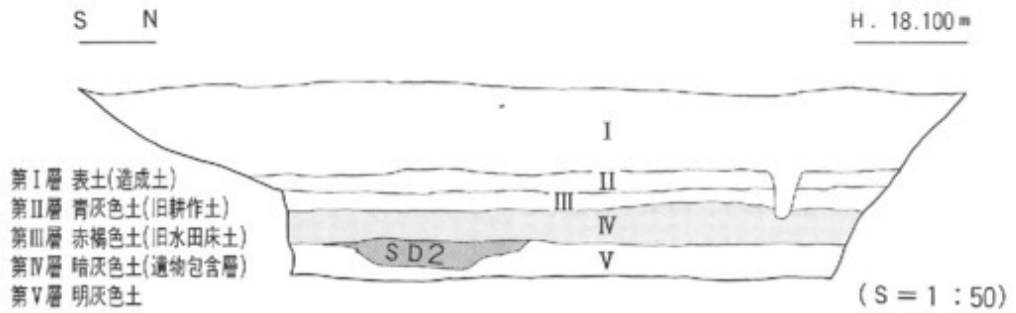
第21図　調査地位置図

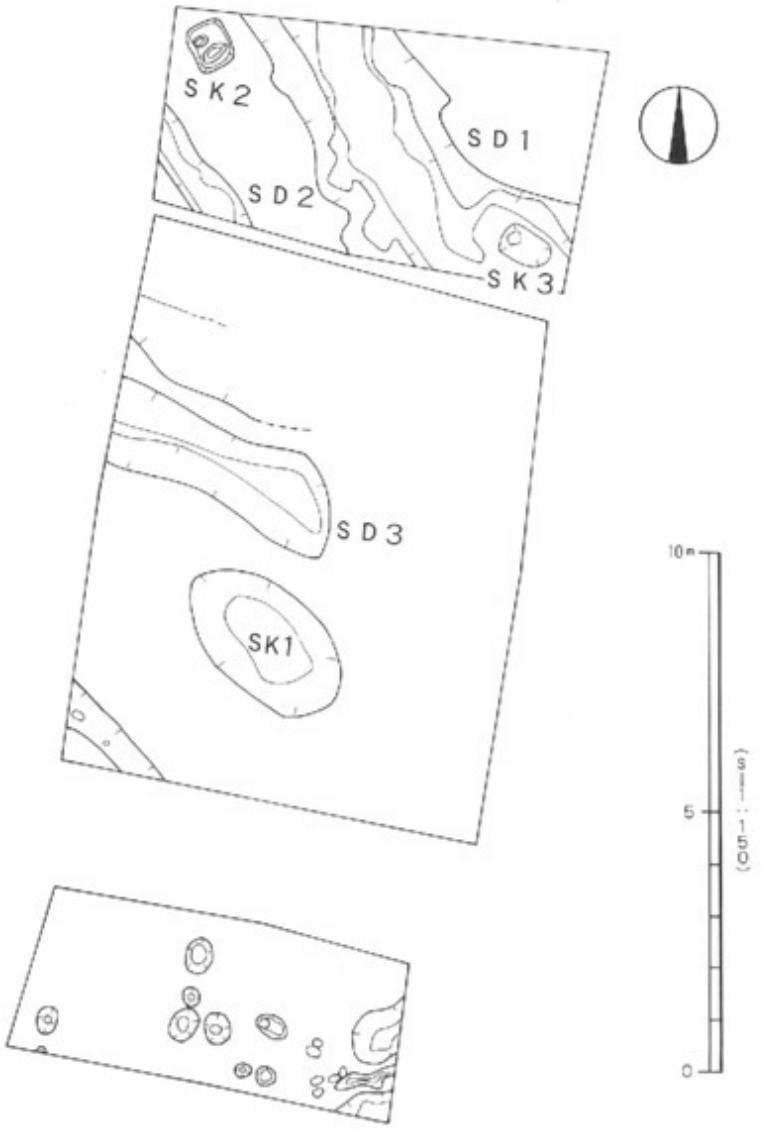
2．層　位

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土（造成土）、第Ⅱ層青灰色土（旧耕作土）、第Ⅲ層赤褐色土(旧水田床土)、第Ⅳ層暗灰色土、第Ⅴ層明灰色土である。第Ⅰ～Ⅲ層は、70～80cmの厚さとなる。第Ⅳ層は、遺物包含層で弥生時代～古代の遺物を含む。第Ⅴ層は無遺物層である。

遺構は、第Ⅴ層上面での検出である。土壙３基、溝状遺構３条と柱穴を検出した。遺構は、上層壁の観察より第Ⅳ層中ないし第Ⅳ層以上から掘りこまれている。さらに、検出の遺構は、その深さが浅いことや上層壁にて削平があったことを確認されるものがあることより、削平を受けた可能性が高いと考えられる。遺構は、ＳＫ１・２は弥生時代、他は時期が特定できない。

なお、調査にあたり調査区内を３ｍ四方のグリットにわけた。呼名称は、第22図に示す。





第22図　西壁土層図(上)・遺構配置図(下)

３．遺構と遺物

調査は、排土置き場確保の必要から、調査区を北・中央・南地区の三区に分け実施した。

遺構は第Ⅴ層上面にて検出し、北地区で溝状遺構２条（ＳＤ1・2）と土壙２基（ＳＫ２・３）、中央地区で溝状遺構１条（SD３）と土壙１基（ＳＫ１）、南地区で柱穴を確認した。遺構は、出土遺物が少量であり、時期を特定できるものは少ない。

また、第Ⅲ層直下で調査地Ｂ～Ｃ区に渡り、東北一南西方向に走る帯状の白色砂層を検出した（幅0.8～1m、厚さ約10cm）。土器片も出土したが、後世（近現代）の造成によるものと考える。

(1) 溝状遺構（第22図）

ＳＤ１　北地区に位置する。北西一南東に方位をとる。ＳＫ３に切られる。幅2.5m、深さ54cm、検出長6.8mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色シルトである。時期決定に有効な資料の出土はない。時期：不明。

ＳＤ２　北地区南西隅に位置する。北西一南東に方位をとる。幅0.8m、深さ35cm、検出長2.8mを測る。断面は「U」字状を呈する。時期決定に有効な資料の出土はない。時期：不明。

ＳＤ３　中央地区中央西側に位置する。幅1.6m、深さ42cm、検出長4.9mを測る。遺構の東端はゆるやかにたちあがる。断面形は『U』字状を呈する。埋土は黒色シルトである。時期決定に有効な資料の出土はない。時期：不明。

(2) 土　壙（第22図）

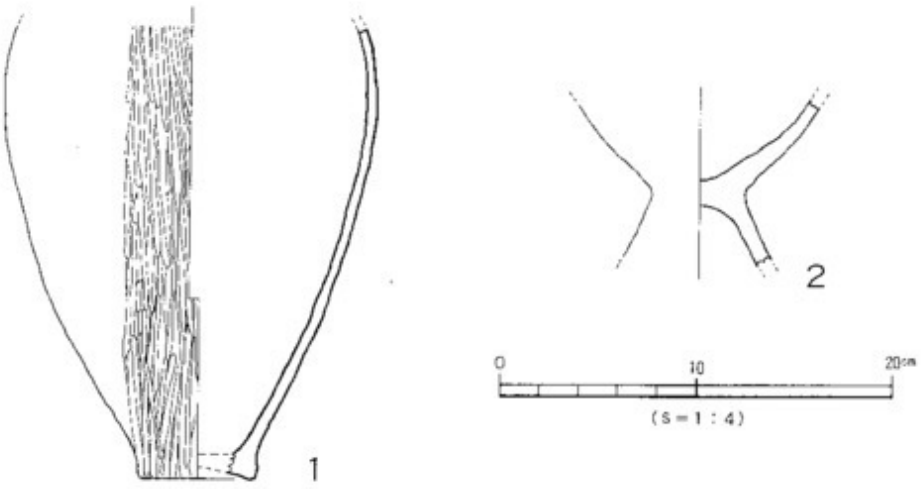
ＳＫ１　中央地区中央やや南に位置する。平面形は楕円形で、径3.6×2.0m、深さ15cmを測る。断面形はレンズ状と呈する。出土遺物は、第23図１で、弥生時代中期中葉の甕形土器片である。小さい上げ底で、外側はヘラ磨きである。外面にススが付着する。時期：弥生時代中期中葉。

ＳＫ２　北地区北東部に位置する。平面形は方形で、0.9×0.8m、深さ７cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。床面に小ピットが二基検出された。出土遺物は、第23図２の弥生土器である。時期：弥生時代。

ＳＫ３　北地区南東隅に位置する。ＳＤ１を切る。平面形は長方形で、1.06×0.62m、深さ９cmを測る。断面形は、皿状を呈する。床面に小ピットが１基検出された。出土遺物はない。時期：不明

(3) 包含層出土遺物（第24図３～13）

３～７は甕形土器片である。３は如意形口縁で、口縁端部下端に刻み目を施す。４は如意形口縁をもつものであろう。胴部にヘラ描き沈線文を２条もつ。５は口縁部下に細くて薄い凸帯をもつ。口縁端部外面と凸帯文に小さい刻み目をもつ。６はわずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は、粘土紐の貼り付けにより口縁端部を形成する。口縁端部下半には、大き



第23図　SK1・SK2出土遺物実測図

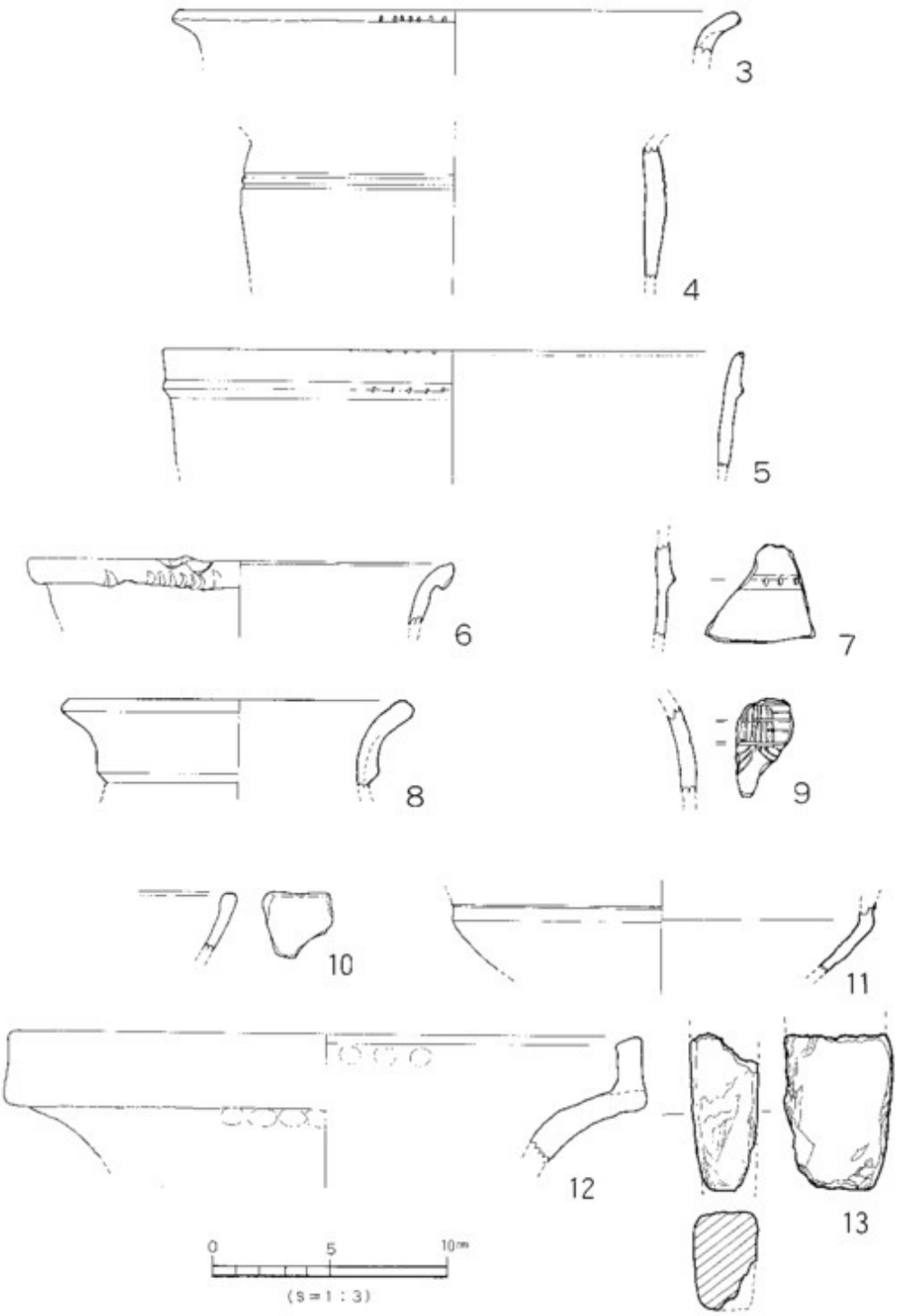
く粗雑な刻み目（爪か）が施される。口縁端部及び口縁部外面直下は、凹凸が著しい。7は胴部片と考える。有段で段部には刻み目が施される。8・9は壺形土器である。8は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、口頸部境に段をもつ。9は胴部片である。ヘラ描きによる複数の文様が組み合う。タテ方向の沈線文は6条（現存で）で1組となり、次にヨコ方向の沈線文3条を直交させる。次にタテ方向の沈線文帯を避けるように（交差しないように）ヨコ方向の沈線文を施す。10・11は鉢形土器である。10は直口口縁で、口縁端部はやや厚く丸みをもつ。11は胴部片で、胴部が屈折する形状を呈する。屈折部の上部に沈線文を1条以上もつ。12は複合口縁壺である。無文で、やや短い複合口縁部をもつ。13は柱状片刃石斧の基部片である。石材は結晶片岩である。

3・4・7・8・9は弥生前期前半の土器群であり、5・10・11は弥生前期前半にまで存在する可能性が高い、縄文晩期凸帯文系の土器群である。12は弥生時代後期後半のものである。13については時期の特定はできない。

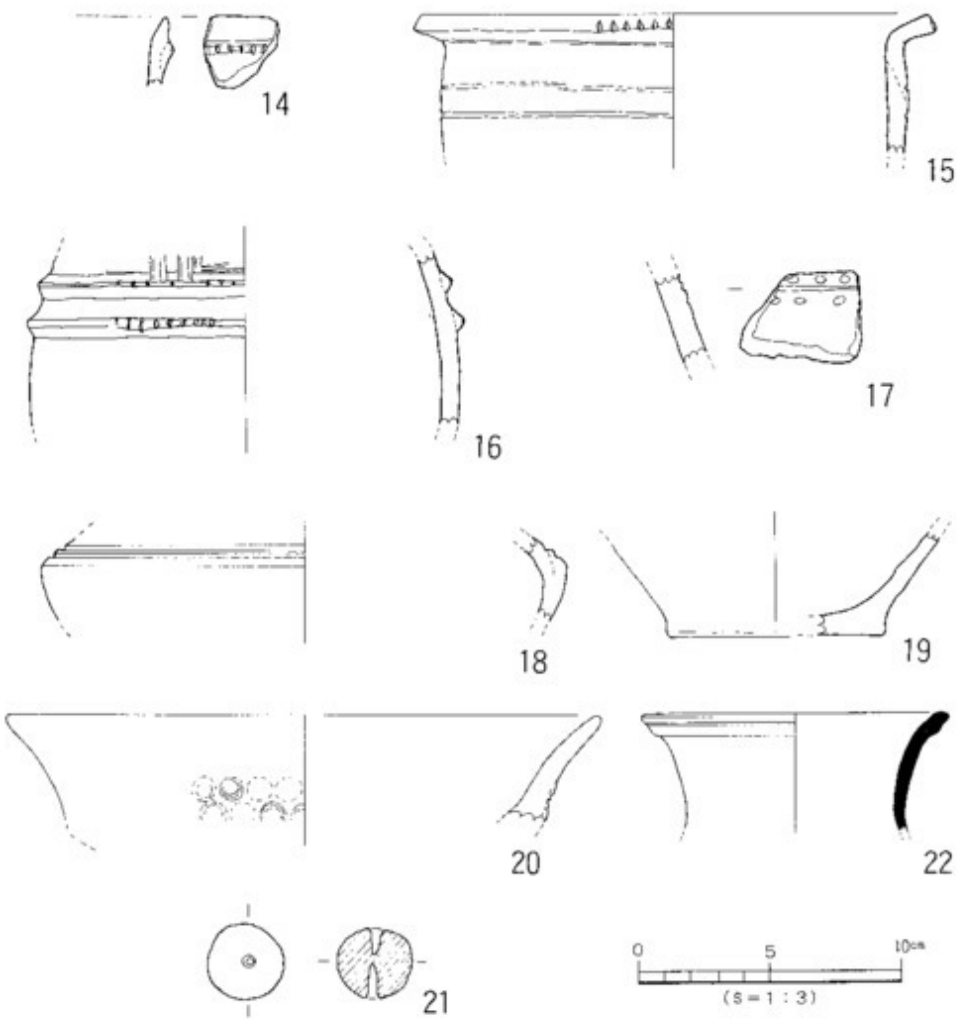
(4)　出土地点不明の遺物（第25図14～22）

調査中及び整理中に、包含層名や出土地点が特定できなくなった遺物である。その多くは、第IV層及びIII層直下の砂層からの出土品である。

15は口縁部下に2条のヘラ描き沈線文をもつ。口縁屈接部にヘラによる沈線文状の線がある。16は異形品で、凸帯を縦横に施し、この文様帯に接するようにヘラ描き沈線文が2条1組施される。20は二重口縁壺で、円形浮文（竹管あり）が2段で5ケ以上施される。22は須恵器で広口壺の口縁部片である。21は土製品で焼成前穿孔は貫通しない。



第24図　包含層出土遺物実測図



第25図　出土地点不明の遺物実測図

4．小　結

本調査は、主に西接する１次調査地で確認された古墳時代の生活関連遺構の東への展開を明らかにすることを目的として実施した。

調査の結果、時期特定は難しいものの、弥生時代の土壙２基（ＳＫ１・２）と時期不明の土壙１基及び溝状遺構３条を確認した。

本調査検出の溝状遺構は北西一南東の方位をとり、１次調査検出の溝状遺構が北東一南西を示すことと異なる。時期が不明であるため、一概に比較できないが、注意したい遺構配置である。また、層位では、１次調査と同じ層位関係を示し、第Ⅳ層暗灰色土の遺物包含層も

弥生～古墳時代の資料が出土し同じ様相を示す。

出土遺物では、弥生前期前半の資料は、1・2次調査資料と同様な形態を示す。この他、出土状況等に問題があるが、16・20が注目される。16は、器形や施文手法において、当平野の土器では一般的でないものである。施文は横・縦の貼り付け凸帯文により区画し、特にタテ方向の貼り付け凸帯文が主体的に用られる点において異なる。くわえて、色調においてもやや異なるものである。20は古墳時代前期の二重口縁壺の口縁部片であるが、この形状をもつ資料は、平野内でも出土例が極めて少なく貴重な資料といえる。

以上、山越遺跡3次調査の報告を行った。山越遺跡には、弥生時代前期前半～古墳時代前半期に集落経営が行われていたことや、その詳細が検討可能であることが明らかとなってきた。本調査は、集落形態を検討する一つの資料となるものであるとして評価されよう。

遺構・遺物一覧（遺構一覧：武正良浩、遺物観察表：梅木謙一・兵頭千恵）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略記について

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の各記載について

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称の略記について

例）口→口縁部、体→体部、天→天井部、底→底部、胴上→胴部上位

胎土・焼成欄　胎土欄の略記について

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について　例）◎→良好、○→良、△→不良

表17　溝　一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	C3～D4	皿　状	6.8×2.5×0.54	黒色シルト			不明
2	B3，B4	U字状	2.8×0.8×0.35				不明
3	C5～D6	U字状	4.9×1.6×0.42	黒　色　土			不明

表18　土壙　一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	C6～D7	楕円形	レンズ状	3.6×2.0×0.15		弥生		弥生中期
2	B2･3	長方形	逆台形状	0.9×0.8×0.07		弥生		弥生時代
3	D4	長方形	皿状	1.06×0.62×0.09				不明

表19　SK1・SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	底径(6.0) 残高 25.5	小さい平底は、わずかに上げ底となる。	㊀ヘラミガキ(タテ) ㊁ナデ	ナデ	灰色･灰褐色 黒色･灰茶色	石･長(1～5) ◎	SK1 煤	13
2	台付鉢	残高 8.3	大きい脚台をもつ。	磨滅	磨滅	乳灰黄褐色 乳灰黄褐色	石･長(1～4) ○	SK2	13

表20　包含層 出土遺物観察表 土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
3	壺	口径(23.4) 残高 1.8	如意形口縁。口縁下端に刻み目。小片。	ヨコナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石･長(1～2) ○		
4	壺	残高 5.5	如意形口縁。ヘラ描き沈線文、2条。	ハケ→ナデ消し	ナデ	淡灰褐色 黄灰色	石･長(1～3) ◎		
5	壺	口径(24.6) 残高 5.0	薄く細い刻み目凸帯。口縁端部に刻み目。	磨滅	ナデ	黄灰色 黄灰色	石･長(1～2) 金 ◎		13
6	壺	口径(18.0) 残高 2.6	幅広の凸帯を貼り付ける。刻み目大きい。端面は一部大きく凹む。	ナデ	磨滅	黄灰色 黄灰色	石･長(1～2) ◎		13
7	壺	残高 4.2	薄い凸帯を貼り付ける。凸帯上に刻み目。	磨滅	磨滅	黒褐色 褐 色	石･長(1～2) ◎	煤	13
8	壺	口径(14.8) 残高 3.8	短かく外反する口縁部。口頸部境に段をもつ。	ナデ	磨滅(ヨコミガキか)	黄灰色 黄灰色	石･長(1～3) ◎		13
9	壺	残高 4.1	ヘラ描き文、横・縦・弧文の組み合せ。	ナデかミガキ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石･長(1～4) ◎		13

包含層 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	鉢	残高 2.5	直口口縁。頸部はやや厚く丸い。	磨滅	磨滅	黒灰色 黒灰色	石・長(1~2) ○		
11	浅鉢	残高 3.1	屈曲部は二段となる。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		13
12	壺	口径(26.9) 残高 5.4	複合口縁壺。	①磨滅 ⑯ナデ	ナデ(磨滅)	黄褐色 乳黄褐灰色	石・長(1~5) ○		

表21 包含層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 深さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
13	石斧	½	結晶片岩	6.7	4.5	2.7	137		

表22 出土地点不明の遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
14	壺	残高 2.7	浅く細い凸帯を貼り付ける。凸帯上は刻み目。	ナデ	磨滅	黄灰色 黄茶色	石・長(1~2) ◎		13
15	壺	口径(19.4) 残高 5.5	如意形口縁。屈曲やや強い。端部下半に刻み目。ヘラ描沈線文2条。	①ヨコナデ ⑯ナデ	①ヨコナデ ⑯磨滅	黒褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	堀	13
16	壺	残高 6.7	貼り付け凸帯2、縦2本。横凸帯は刻み目。ヘラ描き文あり。	別F ケズリか(ヨコ)	ヘラミガキ(ヨコ)	黄褐色 黒色	石・長(1) ◎	堀	13
17	壺	残高 3.0	ヘラ描き沈線文と刺突文2列。	磨滅	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		13
18	壺	残高 3.1	沈線文、2条。	磨滅	磨滅	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ◎		13
19	壺	底径(8.4) 残高 4.0	大きい平底。直立し立ち上がる。	磨滅(ハケ→ナデか)	ナデ	黒灰色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		
20	壺	口径(23.0) 残高 4.1	二重口縁壺。円形浮文2段で、5ケ以上。	ナデ	ナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	石・長(1~3) ◎		13
21	土玉	直径(2.7)	直径2.7~3.1cmの円球。焼成前の円孔(内側より、表貫通)。	ナデ		乳茶灰色 乳茶灰色	石・長(1) ◎		13
22	壺	口径(11.7) 残高 4.5	ゆるやかに外反する口縁部端部外面に凹線1条あり口縁部は丸い。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		

第5章

久万ノ台（クマノダイ）遺跡

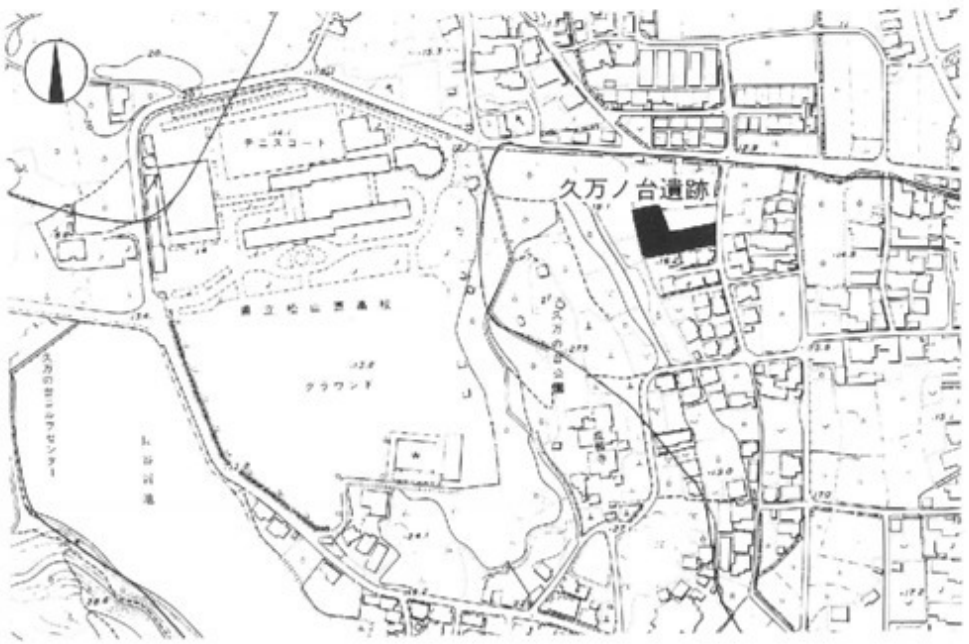
第5章　久万ノ台遺跡

1．調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1987（昭和62）年10月、吉岡タマノ・吉岡久美子両氏により、松山市久万ノ台785－1、798地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

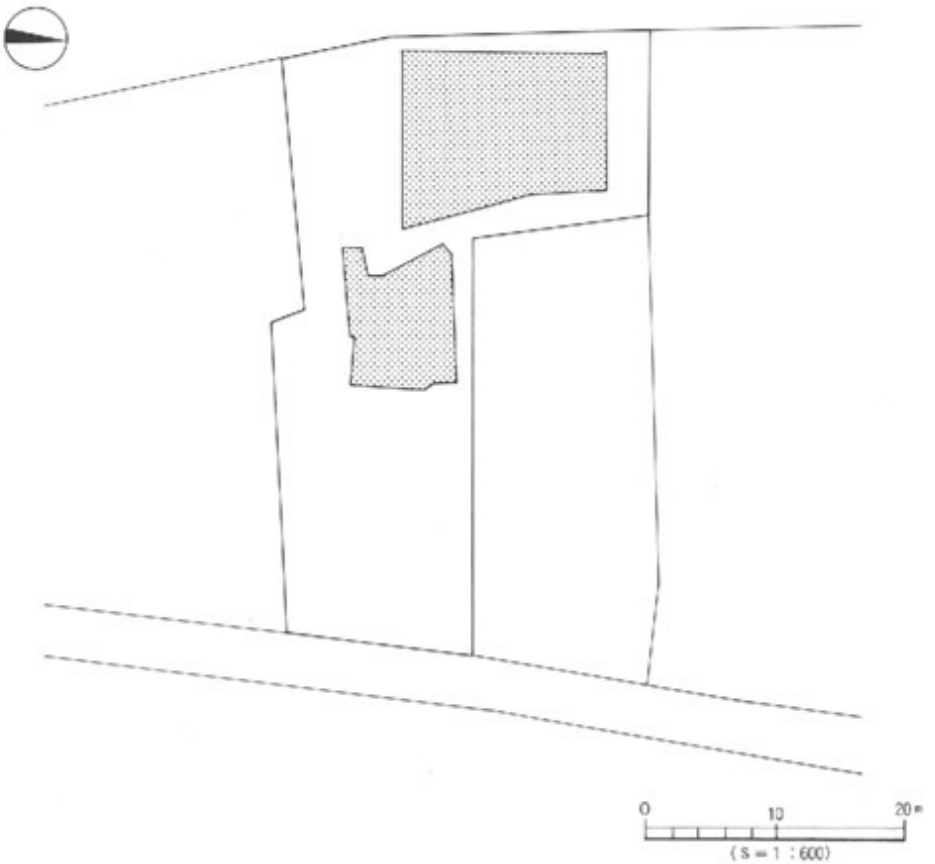
当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『167　久万ノ台包含地』内にあたる。当地周辺には久万ノ台古墳群や衣山古墳群など数多くの古墳が知られている。しかしながら同包含地内では久万ノ台古墳の調査しか行われておらず、様相が余り知られていない地域である。そこで、文化教育課は、当該地における埋蔵文化財の有無を確認するために1987（昭和62）年11月6日に試掘調査を実施した。試掘の結果、柱穴数基と弥生土器、土師器、須恵器を含む遺物包含層2層を確認した。この結果を受け、文化教育課と申請者との間で遺跡の取扱いについて協議が行われ、宅地開発によって失われる遺構、遺物に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は当地域の弥生時代～中世における集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、申請者の協力のもと、1987（昭和62）年11月18日より調査を開始した。



第26図　調査地位置図　　（S＝1：5,000）

調査地は、調査前は耕地整備された水田であった。耕作時の造成により上下２面の水田面があり、西側の高い面をＡ区、東側の低い水田面をＢ区とし、分区して調査を行った。調査対象面積は889㎡余りであるが、民家などが隣接していたため最終の発掘調査面積はＡ、Ｂ両区あわせて258㎡余りとなった。以下、調査の工程を略記する。

1987（昭和62）年11月18日、重機による表土剥ぎ取りを開始した。11月20日より作業員を増員し本格的な調査を開始する。Ａ区調査開始。まず、調査区内を３ｍ四方のグリットに分けた(第28図)。その後、各遺物包含層の掘り下げを行い、11月24日遺構の測量を終了する。11月25日よりＢ区の調査開始。Ａ区同様包含層の掘り下げを行い11月26日遺構検出をする。溝状遺構、柱穴を数基検出し、11月28日遺構の測量を終了する。11月30日、Ａ・Ｂ両区の完掘写真を撮影し、出土遺物や調査用具を撤去する（野外調査終了）。



第27図　調査地測量図

(2) 調査組織

調 査 地　松山市久万ノ台785－1、798

遺 跡 名　久万ノ台遺跡

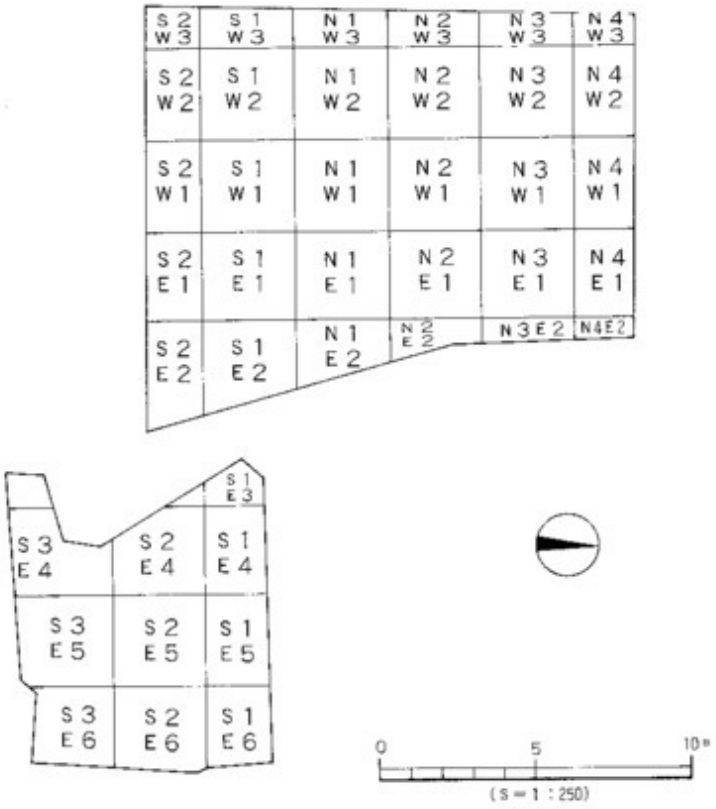
調査期間　1987（昭和62）年11月18日～同年11月30日

調査面積　888.52㎡

調査委託　吉岡タマノ・吉岡久美子

調査担当　宮崎泰好（現　砥部町教育委員会）
宮内慎一（現　埋蔵文化財センター調査員）

調査作業員　高尾和長、山本健一、相原浩二、河野史知（以上、現　埋蔵文化財センター調査員）、木下公一、山本富明、谷久宏之

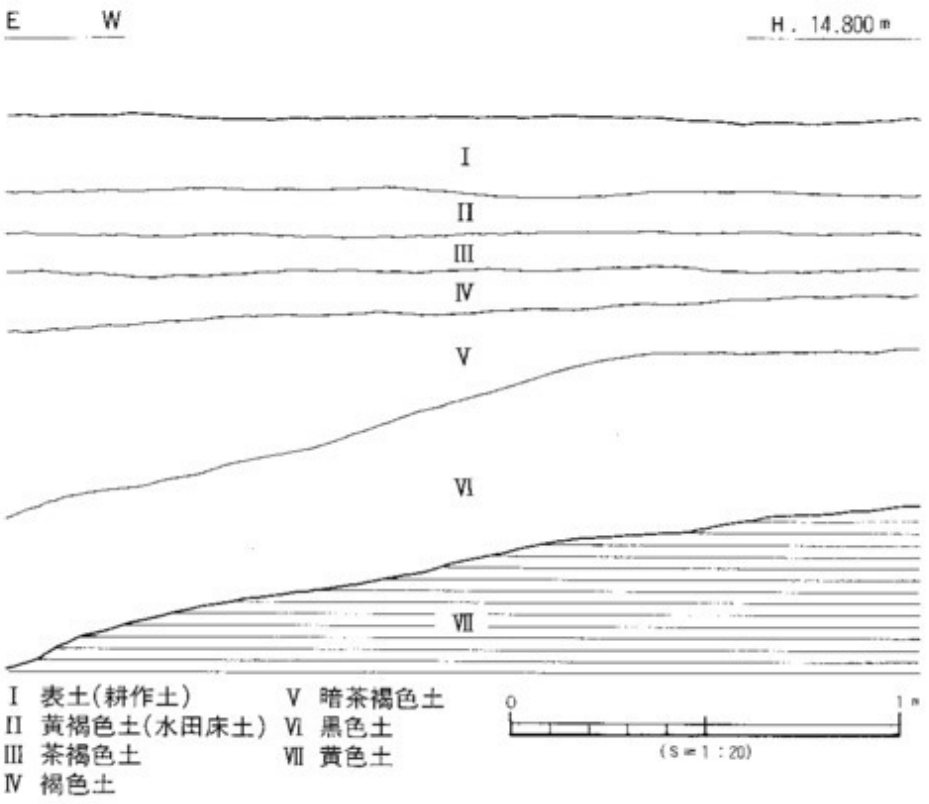


第28図　調査地区割図

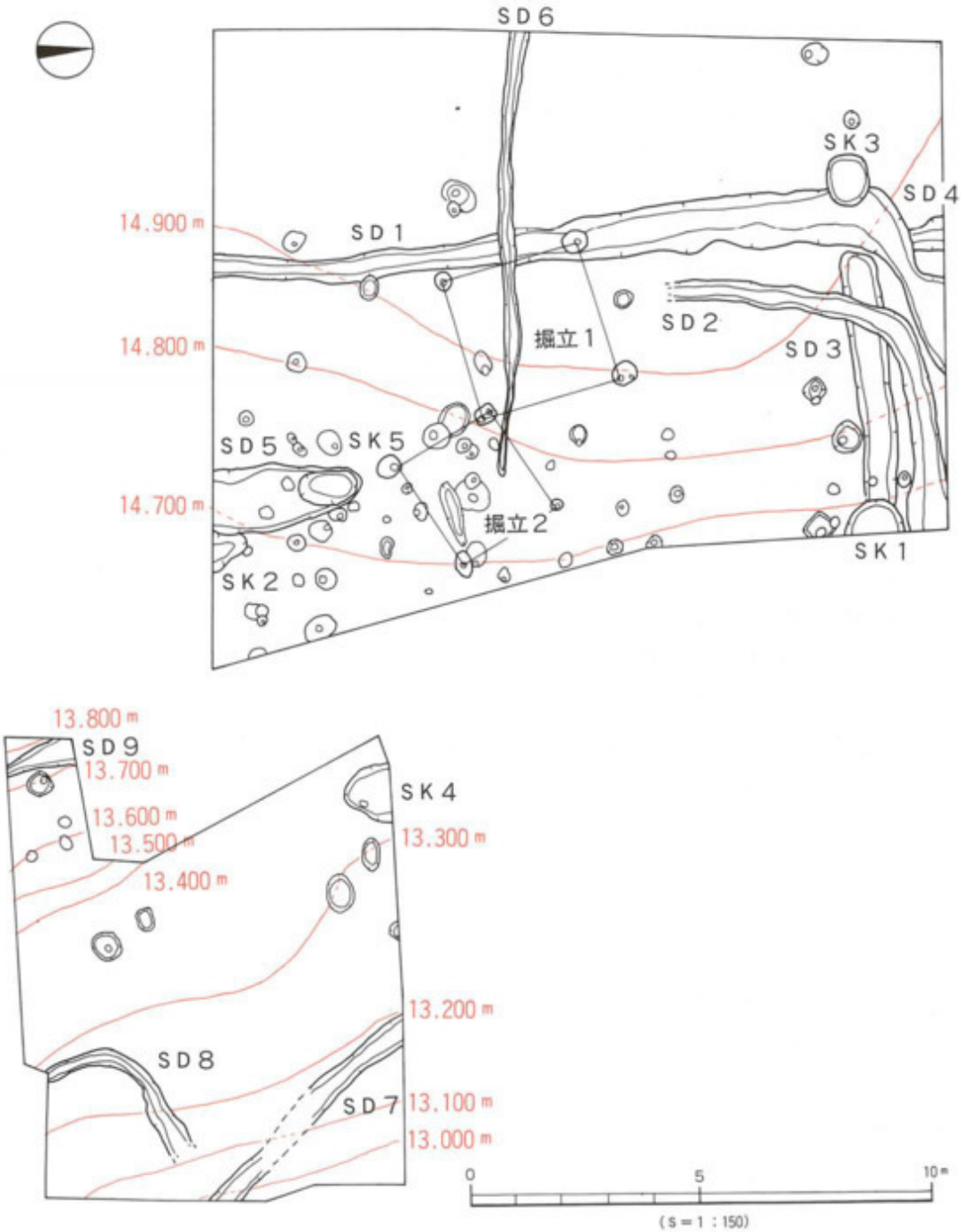
2．層　位（第29図、図版14-2）

本調査地の基本層位は第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅲ層茶褐色土、第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層暗茶褐色土、第Ⅵ層黒色土、第Ⅶ層黄色土である。第Ⅰ、Ⅱ層は水田耕作に伴う耕土で地表下30～40cmまで開発が行われている。第Ⅲ、Ⅳ層はA区西半部を除くほぼ全域でみられ、厚さ10～15cmの堆積で土師器、須恵器を混在して包含する。A区西半部は近現代の削平等のため第Ⅱ層下に第Ⅶ層が検出された。第Ⅴ層はB区西端から急な傾斜堆積をなし厚さ20～40cmを測り、土師器、須恵器を包含する。第Ⅵ層もまた第Ⅴ層と同様の状況をなし厚さ10～40cmの堆積で弥生土器、土師器を包含する。第Ⅶ層は無遺物層である。

遺構はすべて第Ⅶ層上面での検出である（第30図）。A区では掘立柱建物址2棟、溝状遺構6条、土壙状遺構4基、柱穴85基（掘立柱建物柱穴を含む）を、B区では溝状遺構3条、土壙状遺構1基、柱穴9基を検出した。ただし遺構の深さなどから考えると、本来は第Ⅶ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。



第29図　B区　南壁土層図


SD6
SK3
SD4
14.900m
SD1
SD2
掘立1
14.800m
SD3
SD5
SK5
14.700m
掘立2
SK1
SK2
13.800m
SD9
13.700m
SK4
13.600m
13.500m
13.300m
13.400m
13.200m
SD8
SD7
13.100m
13.000m
0
5
10m
(S=1:150)

第30図　遺構配置図

遺物は、包含層中からの出土がほとんどであり、弥生土器、土師器、須恵器のほか石器類では石錘１点、石鏃２点（うち１点は姫島産黒曜石）が出土している。

これ等のことより各層は出土遺物等から判断すると、第Ⅳ層は中世、第Ⅴ層は古墳時代～古代、第Ⅵ層は古墳時代までに堆積したものと判断される。

第Ⅶ層上面の標高を測量すると、調査地の西から東に向けて傾斜をなしており比高差は約２ｍを測る。

尚、調査にあたり調査区内を３ｍ四方のグリットに分けた。呼称名は第28図に記す。

３．遺構と遺物

今回の調査において確認した遺構は、掘立柱建物址２棟、溝状遺構９条、土壙状遺構５基、柱穴94基（掘立柱建物柱穴を含む）他である。

（１）掘立柱建物址

本調査において確認した掘立柱建物址は２棟である。両者ともＡ区の第Ⅶ層上面での検出である。

１号掘立柱建物址（第31図）

Ａ区ほぼ中央部Ｎ１Ｗ１～Ｎ２Ｅ１区に位置する。１×１間の建物址で主軸をＮ15°Ｗに置いている。規模は桁行長3.1m、梁行長3.1mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、径40～60cm、深さ６～12cm(検出面下)、柱痕径は10～12cm、深さ15～20cmを測る。柱穴埋土は暗茶褐色土である。柱穴内からは土師器、須恵器小片などが数点出土している。

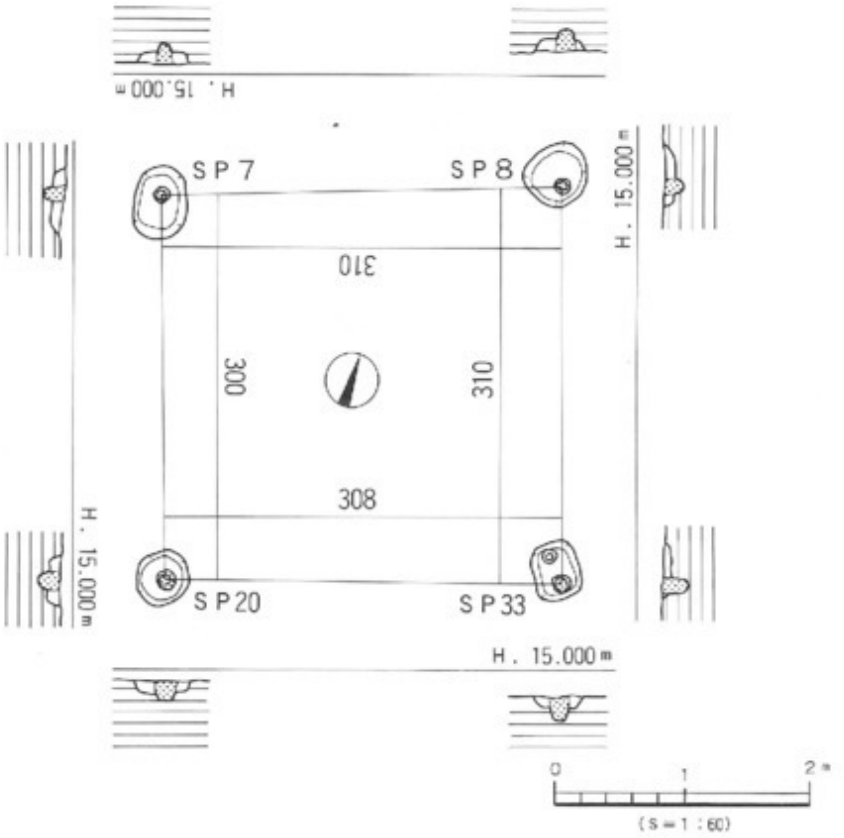
２号掘立柱建物址（第32図）

Ａ区中央部やや東寄りＮ１Ｅ２～Ｓ１Ｅ１区に位置する。１号掘立柱建物址と一部柱穴が重複している。１×１間の建物址で主軸をＮ18°Ｗに置いている。規模は桁行長2.5m、梁行長2.3mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、径20～60cm、深さ６～18cm（検出面下)、柱痕径は８～16cm、深さ15～20cmを測る。柱穴埋土は暗茶褐色土である。

時期：これら２棟の掘立柱建物址は造営時期に大きな差はないものと思われる。しかしながら柱穴内からの遺物が僅かであるため詳細な年代付けは難しい。１号掘立柱建物柱穴（ＳＰ７）が溝ＳＤ１（古代）の床面にて検出されたことなどから、両者とも古代までに造営されたものと考える。

（２）溝状遺構

本調査において検出した溝状遺構は９条である。内訳はＡ区にて６条(ＳＤ１～６)、Ｂ区にて３条（ＳＤ７～９）である。いずれも出土遺物が僅少であるため明確な時期決定は難しいが、掘り方・切り合い等から遺構の時期を判断した。



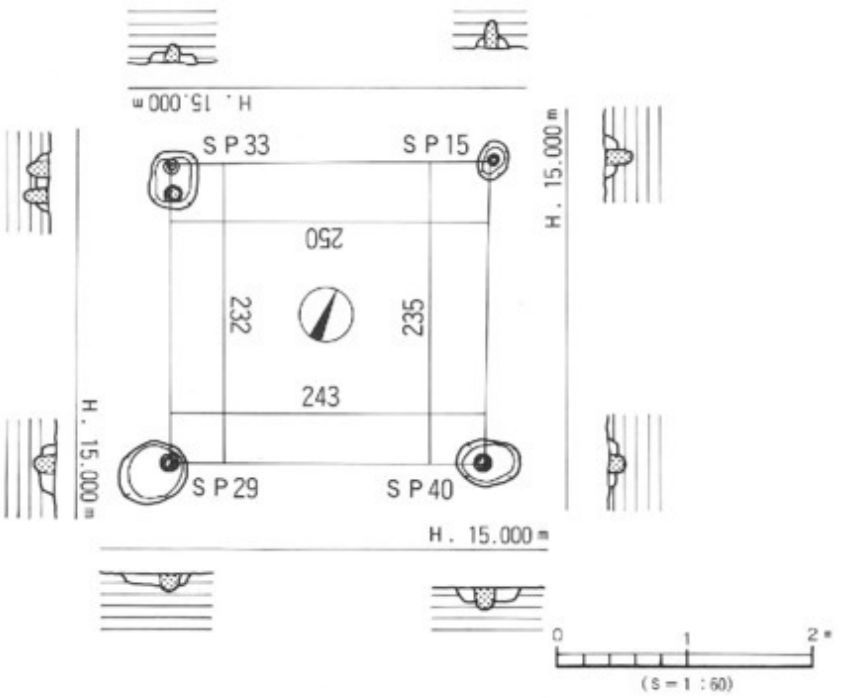
第31図　1号掘立柱建物測量図

A区にて注目されるものにＳＤ１とＳＤ２がある。多少の規模に違いはあるものの、両者とも調査区北壁付近で東側に向けてカーブを描きながら屈曲している。埋土はＳＤ１が第Ⅴ層と同様の暗茶褐色土、ＳＤ２は第Ⅳ層と同様の褐色土である。埋土中に砂や礫などがみられず流路状の遺構とは考えにくく、水利に伴うものというよりは境界を示す溝としてその役割を果たしていたものと考えられる。遺物は土師器・須恵器小片が数点出土しているのみである(図示せず)。土層観察によりＳＤ１は第Ⅴ層中、ＳＤ２は第Ⅳ層中から掘り込まれていることから、ＳＤ１は古代、ＳＤ２は中世までに埋没したものと考えられる。

他の溝については性格はわからない。時期については切り合い等からＳＤ３が中世以前、ＳＤ４が古代以前、ＳＤ６が古代以降に埋没したものと考える。ＳＤ５は時期不明。

B区では第Ⅶ層上面にて３条の溝を検出した。溝内からの遺物の出土はない。溝の性格はわからないが、時期は第Ⅵ層が覆うことなどから、すべて古墳時代までに埋没したものと考える。

各溝状遺構に関する詳細は一覧表に記す（表24)。



第32図　２号掘立柱建物測量図

（３）土壙状遺構

本調査において検出した土壙状遺構は５基である。すべて第Ⅶ層上面での検出であるが、遺構の深さなどから考えると、本来は第Ⅵ層以上の層から掘り込まれた可能性の高いものばかりである。A区においては４基（ＳＫ１～３、５）、B区では１基（ＳＫ４）を検出した。遺物の出土はなく、わずかにＳＫ１から土師器、須恵器小片が数点出土しているのみである（図示せず）。平面形はいずれも楕円形プランを呈しており、埋土はＳＫ３が灰色土、その他は第Ⅴ層と同様の暗茶褐色土である。遺構の性格はわからないが、切り合い等から時期はＳＫ３が古代以降（ＳＤ１を切る）、ＳＫ１は第Ⅴ層中から掘り込まれていることから古代の遺構と考える。

各土壙状遺構に関する詳細は一覧表に記す（表25）。

（４）その他の遺構と遺物

本調査において検出した柱穴は94基（掘立柱建物柱穴含む）である。すべて第Ⅶ層上面での検出であるが、他の遺構と同様に本来は第Ⅵ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。柱穴埋土は黒色土、暗茶褐色土、褐色土の３種類がある。各々の柱穴の造営に時期差がうかがえるが、柱穴内からの遺物の出土が僅かであり明確には判断しえない。

（5）包含層出土遺物

遺物を包含しているのは主に第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層暗茶褐色土、第Ⅵ層黒色土で、調査区ほぼ全域に10～40cmの堆積をなす。包含される遺物は第Ⅳ層が中世、第Ⅴ層が古墳時代～古代、第Ⅵ層が弥生時代のものを主体としている。

第Ⅳ層出土遺物（第33図、図版18）

土師器

坏（1）　平底の底部。口縁部は内湾気味に立ち上がり、体部外面は2段撫で手法がとられている。底部の切り離しは糸切りによる。内外面ともにヨコナデ調整を施す。

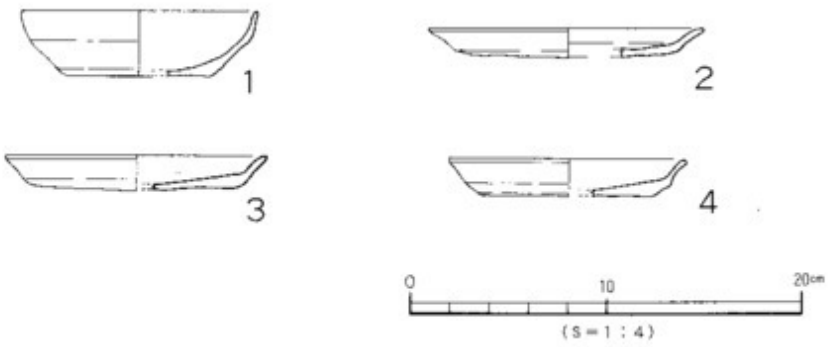
皿（2～4）　平坦な底部からやや外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部はすべて丸く仕上げられている。2は口縁端内面に1条の凹線が巡る。底部の切り離しはすべてヘラ切りによる。

第Ⅴ層出土遺物（第34図、図版18・19）

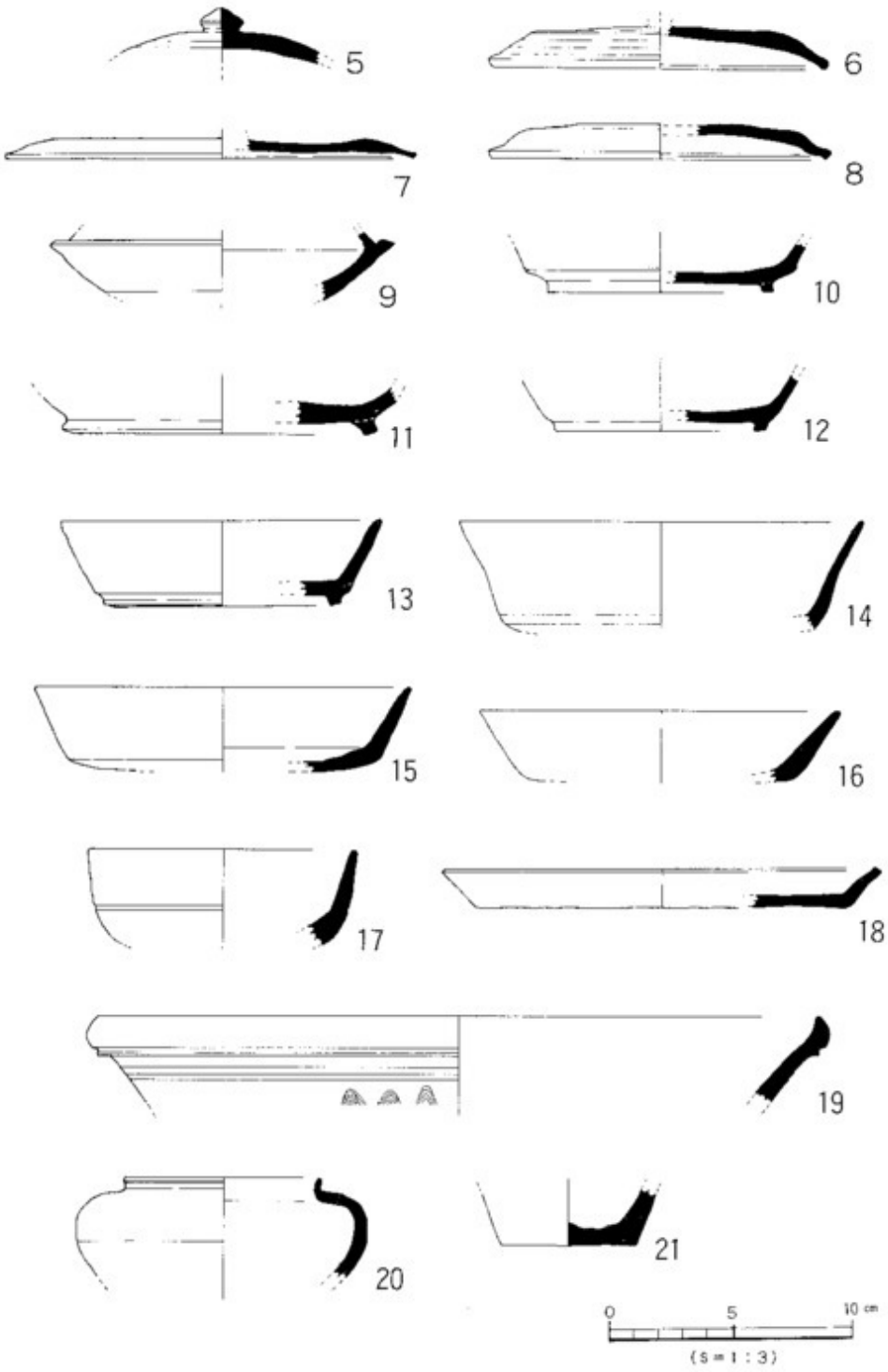
須恵器

坏蓋（5～8）　5は宝珠様つまみの付く蓋。6～8は身受けのかえりをもたない蓋である。天井部は笠形を呈するもの（5・6・8）と平坦なもの（7）があり、口縁端部は丸く仕上げられている。天井部はすべて回転ヘラ削り調整の後、回転ナデ調整を施す。6・8は天井部外面に不定方向のナデを施す。

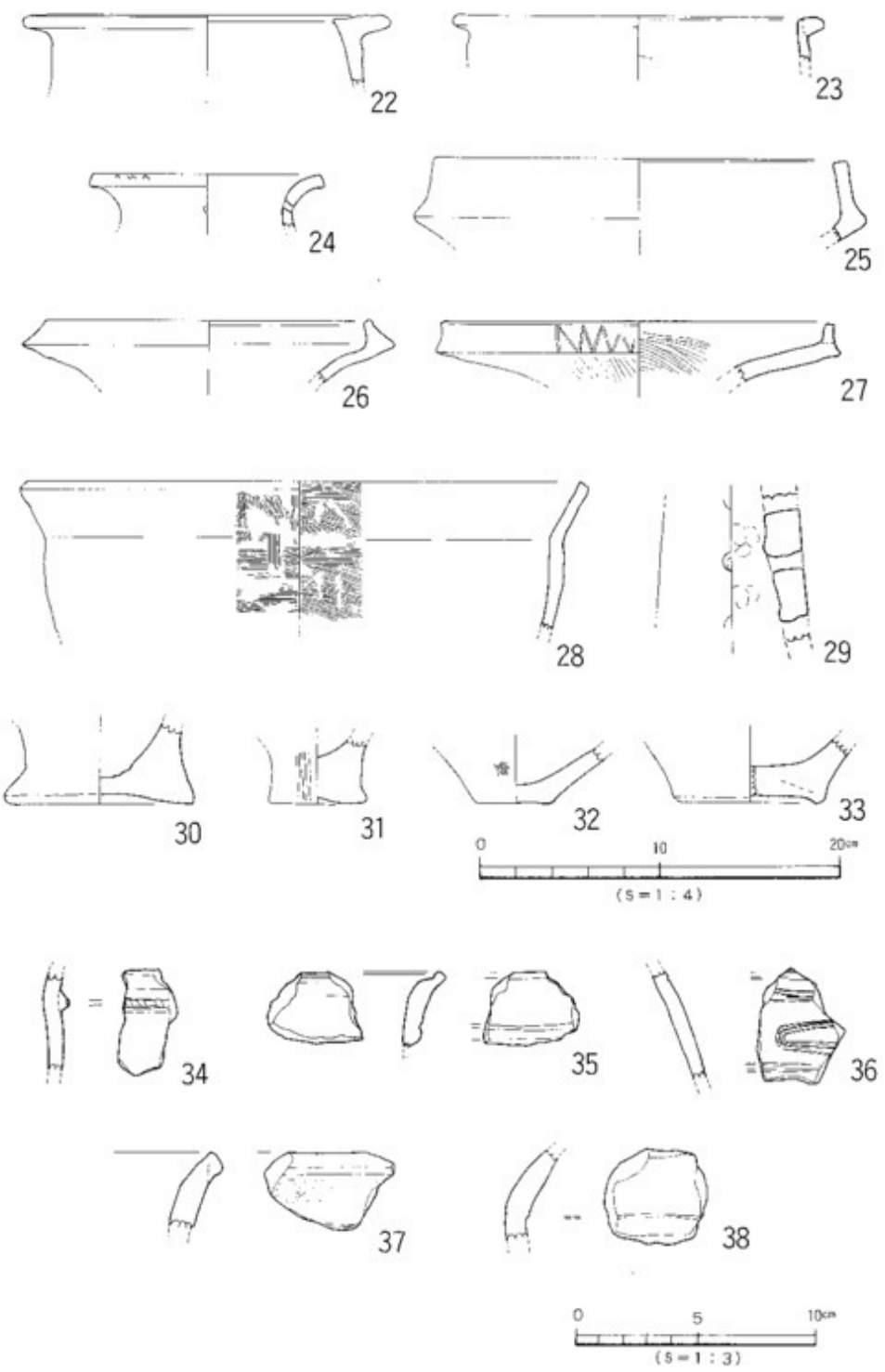
坏（9～16）　9は受身をもつ坏身。10～13は有台坏、14～16は高台の付かない無台坏である。高台は底部と体部の境界付近に付くもの（12・13）と、境界から内側に入ったところに付くもの（10・11）がある。底部と体部の境界は丸みをもつもの（11・12）、境界で強く屈曲するもの（13）、体部下半で屈曲して口縁部に向かって立ち上がるもの（10）がある。底部の調整は回転ナデ調整を施すもの（11～13）、回転ヘラ削り調整を施すもの（10）がある。無台坏はいずれも口縁部がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。15・16の底部には不定方向のナデ調整を施している。



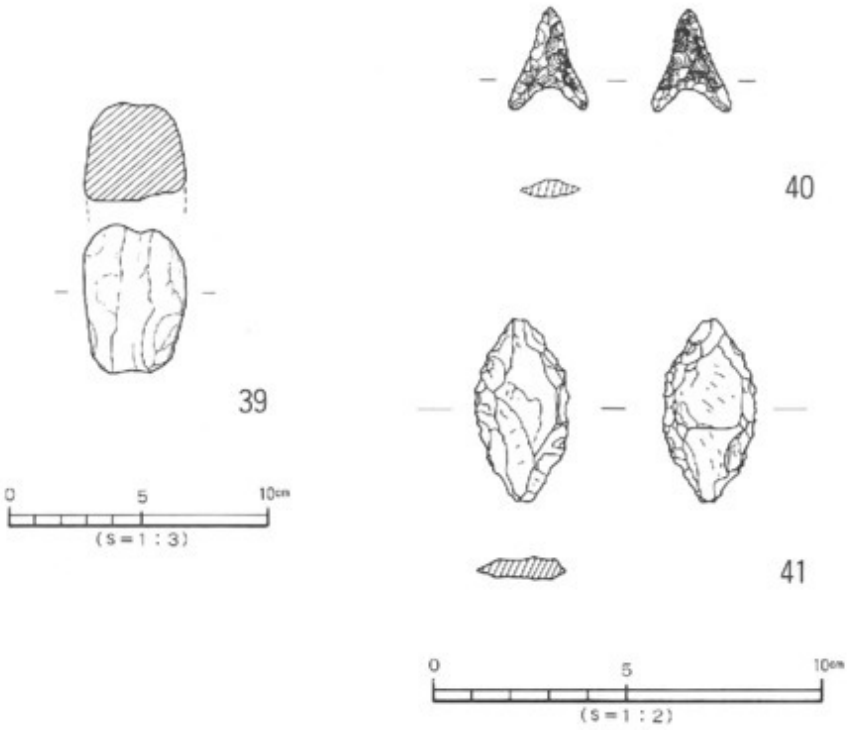
第33図　第Ⅳ層出土遺物実測図



第34図　第Ⅴ層出土遺物実測図



第35図　第Ⅵ層出土遺物実測図　(1)



第36図　第Ⅵ層出土遺物実測図　(2)

塊（17）　深さのある坏であるが、ここでは塊と呼称する。体部はやや内湾気味に立ち上がり、体部下半に1条の沈線文を施す。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げられている。

皿（18）　平坦な底部と斜め上方に外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側に折り曲げられ、稜をなしている。内外面共にナデ調整を施す。

甕（19）　口縁部はやや肥厚し、端部は内方へ屈曲する。頸部外面に断面三角形の2条の凸線と数条の波状文を施す。

短頸壺（20）　所謂「薬壺」形の壺である。口縁部は短く直立し、端部は丸く仕上げられている。胴部下半は回転ヘラ削り調整を施す。

瓶（21）　小片ではあるが瓶類の底部と思われる。

以上の須恵器は6世紀後半～8世紀後半に時期比定されよう。

第Ⅵ層出土遺物（第35・36図、図版20・21）

弥生土器

甕形土器（22・23）　逆「L」字状口縁を呈する甕形土器。口縁部内面に明瞭な稜をもつ。23の内面は横方向の磨き調整を施す。

壺形土器(24～27)　24は外反する口縁部をもつ壺形土器。頸部に径４㎜大の円孔を穿つ。25～27は複合口縁壺。27は口縁拡張部が直立気味に立ち上がり、拡張部外面に山形文を施す。25・27の内面は刷毛目調整を施す。

鉢形土器（28）　口縁部は「く」字状でなだらかに外反する。胴部の張りは弱い。外面は口縁部が縦、体部が横方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。

器台形土器（29）　器台形土器の脚部片と思われる。３個の円孔が縦に並ぶ。

ジョッキ形土器（30）　ジョッキ形土器の底部片。突出部をもち、やや上げ底を呈する。31は甕形土器、32・33は壺形土器の底部片である。

以上の出土遺物は22～24、30が弥生時代中期中葉、その他は後期のものである。

34～38は弥生前期の遺物である。34は貼り付けによる凸帯が巡り、凸帯上に刻み目を施す甕形土器である。内外両面にナデ調整を施す。35は縄文晩期の凸帯文系の系譜をひく浅鉢であり、口縁端部内面に１条の沈線文が巡る。内面はわずかにヘラ磨き調整が看取される。36～38は壺形土器である。36は頸部片で、３条の細沈線による流水文の上下に２条以上の沈線文を施す。内外面共にナデ調整を施す。37は口縁部が緩やかに外反し、口縁下に不明瞭な段をもつ。口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁端部はヨコナデ、口縁部はヘラ磨き調整を施す。38は口頸部片で、口縁部は緩やかに外反し、口縁下に段をもつ。内外面共に磨滅のため調整は不明である。

石　器

石錘　39は隅丸方柱状に成形し、長軸方向に幅広で浅い溝を巡らす。重量102.2ｇを量る。

石鏃　40は姫島産黒曜石を素材とした凹基鏃。41はサヌカイトを素材とした打製の凸基有茎鏃である。重量はそれぞれ、1.2ｇ、7.3ｇを量る。

4．小　結

本調査において古墳時代以降の生活関連遺構と、弥生時代前期から中世の遺物を検出することができた。

(1)　**弥生時代**　弥生時代と特定できる遺構は検出されなかった。しかしながら、第Ⅵ層黒色土内より前期、中期中葉、後期後半の遺物が出土している。これらの資料は当地周辺に同時期の生活関連遺構が存在していたことを示唆するものである。

(2)　**古墳時代**　A区東端で検出された溝状遺構ＳＤ４は切り合い関係から古墳時代の遺構と考えられた。出土遺物は少量ではあるが、第Ⅴ層暗茶褐色土内より６世紀代に比定される須恵器片が出土している。

(3) **古代～中世**　古代に比定できる遺構は掘立柱建物址や溝状遺構ＳＤ１・６、土壙状遺構ＳＫ１・３があげられる。また第Ⅴ層中より７～８世紀を中心とする須恵器が出土している。中世では溝状遺構ＳＤ２・３が検出され、第Ⅳ層中より12～13世紀代に比定される土師器が出土している。

特筆すべき遺構は溝状遺構ＳＤ１・２があげられる。両者は時代を異にするが、斜面に直行して南北に流れており、人工的に掘られた溝と考えられる。溝の性格は、水利に伴うものというよりは集落等の境界としての役割を果たしていたものであろう。

こういった遺構・遺物の検出は当地を含む周辺地域に古墳時代～中世にかけて集落が存在し、かつ継続して営まれていたことを物語っている。

以上、簡単に調査の報告を行った。これまで久万ノ台・衣山丘陵における生活関連遺構の検出はきわめて例が少ない。今回の調査により久万ノ台丘陵上の古墳群が所属するであろう生活址の一部が確認できた意義は非常に大きい。今後、周辺部での調査が進めば、より一層久万ノ台古墳群の成立時や弥生時代～中世にかけての当地の様相が明らかになるであろう。今後の調査に注目していきたい。

〔参考文献〕

宮崎　泰好　1989　「久万ノ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

宮本　一夫　1989　『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

中野　良一　1988　『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会

田辺　昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園『研究論集』第10号

田辺　昭三　1981　『須恵器大成』角川書店

佐藤　浩司　1987　「奈良時代の須恵器と土師器」『東アジアの考古と歴史下』岡崎敬先生退官記念論集

上田　真　1991　「南江戸鑵目遺跡」『松山市文化財調査報告書22』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

松山市　1986　『松山市史料集　第Ⅱ巻　考古編Ⅱ』松山市史料編集委員会

1992　『松山市史　第１巻　自然・原始・古代・中世』松山市史編集委員会

愛媛県　1982　『愛媛県史　原始古代Ⅰ』愛媛県教育委員会

遺構・遺物一覧（遺構一覧：宮内慎一、遺物観察表：宮内慎一）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略記について

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の各記載について

法量欄　　（ ）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称の略記について

例）口→口縁部、体→体部、天→天井部、底→底部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位

胎土・焼成欄　胎土欄の略記について

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

（ ）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～2）→「1～2㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について　例）◎→良好、○→良、△→不良

表23　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方位	桁行		梁行		床面積（㎡）	時期	備考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	1×1	東西	310(9.4)	9.4	308(9.3)	9.3	9.55	古代	
2	1×1	東西	250(7.6)	7.6	235(7.1)	7.1	5.87	古代	

表24　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	S2～N4W1	皿状	18.30×1.10×0.05	暗茶褐色土	弥生・土師・須恵	SD4を切り、SD6、SK3に切られる。	古代
2	N2W1～N4E2	皿状	9.15×0.40×0.09	褐色土	土師・須恵	SD3を切る。	中世
3	N3W1～N4E1	U字状	5.40×0.80×0.22	褐色土	土師・須恵	SD2、SK1に切られる。	中世以前
4	N4W1～2	U字状	0.80×0.90×0.06	暗茶褐色土		SD1に切られる。	古代以前
5	S1･2E1	皿状	3.15×1.45×0.15	暗茶褐色土	弥生・土師・須恵		不明
6	N1E1～W3	皿状	9.60×0.38×0.03	暗茶褐色土		SD1を切る	古代以降
7	S1E5～S2E6	皿状	5.80×0.60×0.05	青灰褐色土			弥生
8	S2E6～S3E5	皿状	3.60×0.35×0.05	青灰褐色土			弥生
9	S3E3	U字状	1.30×0.40×0.10	青灰褐色土			弥生

表25　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N4E2	U字状	円	1.20×0.70×0.15	暗茶褐色土	土師・須恵	SD3を切る。	古代
2	S2E2	U字状	不整楕円	1.00×0.85×0.10	暗茶褐色土			不明
3	N3･4W2	皿状	楕円	1.10×0.90×0.20	灰色土		SD1を切る。	古代以降
4	S1E3･4	皿状	楕円	1.60×1.30×0.08	暗茶褐色土			不明
5	S1E1	皿状	楕円	1.25×0.70×0.10	暗茶褐色土		SD3床面検出	不明

表26　第IV層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏	口径(12.2) 底径(7.4) 器高 3.4	半球の底部。体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面は2段階で手法。	①ヨコナデ ⑧回転糸切り	ヨコナデ	乳褐色	石･長(1~2) ○		18
2	皿	口径(14.0) 底径(11.6) 器高 1.5	平底風の底部。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁内面に1条の凹線が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色	密 ◎		
3	皿	口径(13.5) 底径(10.3) 器高 1.8	平底風の底部。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	密 ◎		18
4	皿	口径(12.1) 底部(9.0) 器高 1.9	平底の底部。体部下半で段をもち、口縁部は外反する。	ナデ	磨滅の為不明	淡褐色 乳褐色	密 ◎		18

表27　第V層 出土遺物観察表 土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	坏蓋	つまみ径 1.7 つまみ高 1.0 残高 2.3	宝珠擬宝の付く坏蓋。	(つまみ)ナデ ㈦回転ヘラ削り	ナデ	青灰色	密 ◎		18
6	坏蓋	口径(14.0) 残高 1.7	平坦な天井部から口縁部に向かって屈曲し、端部はさらに下方へ屈曲。	㈦回転ヘラ削り ①回転ナデ	㈦ナデ ①回転ナデ	灰色	密 ◎		18
7	坏蓋	口径(16.8) 残高 1.8	平坦な天井部から口縁部に向かって屈曲し、端部はわずかに下方へ屈曲。	㈦回転ヘラ削り ①回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		18
8	坏蓋	口径(13.6) 残高 1.5	口縁部付近で段をなして屈曲し、口縁端部は下内方へ屈曲する。	㈦回転ヘラ削り ①回転ナデ	㈦ナデ ①回転ナデ	灰色	密 ◎		18
9	坏身	受部径(14.2) 残高 2.4	たちあがりは内傾し、受部は太く、水平に延び、受部端に沈線が巡る。	①回転ナデ ⑨回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
10	坏	底径(11.8) 高台径(12.8) 残高 2.0	高台は底部端よりやや内側につき、内端面で接地。端部に沈線上の凹みあり。	⑭回転ナデ ⑨回転ヘラ削り	⑪回転ナデ ⑭ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		19
11	坏	底径(8.2) 高台径(9.2) 残高 2.0	底部と体部の境に稜をもつ。高台は平坦面で接地。器壁は薄い。	⑭回転ナデ ⑨回転ヘラ切り→回転ナデ	⑭回転ナデ ⑭ナデ	灰色	密 ◎		19

第Ⅴ層 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
12	坏	底径(7.6) 口径(8.6) 残高 2.3	高台は底部端につき、ほぼ平坦面で接地。	⑧⑨回転ナデ ⑩回転ナデ	⑧⑨回転ナデ ⑩ナデ	灰白色	密 ◎		19
13	坏	口径(13.0) 底径(9.0) 残高 3.6	体部は斜め上方にたちあがり口縁端部は丸い。体部と底部の境に陵あり。	①回転ナデ ②回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ◎		
14	坏	口径(17.6) 残高4.1	体部は斜め上方にたちあがり口縁部に至ってゆるやかに外反する。	①回転ナデ ②回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 灰 色	密 ◎		
15	坏	口径(17.8) 底径(15.2) 器高 3.3	体部は斜め上方にたちあがり口縁端部は尖る。底部はやや丸味をもつ。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰白色 乳白色	密 ○		
16	坏	口径(14.8) 底径(10.6) 器高 2.9	斜め上方にたちあがる体部。口縁端部は丸くおさめる。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	青灰色 灰 色	密 ◎		
17	壺	口径(10.8) 残高 3.9	体部はやや内湾気味にたちあがり、体部外面に1条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰 色	密 ◎		
18	皿	口径(18.2) 底径(15.2) 器高 1.6	平底。口縁部は外反気味にたちあがり、口縁端部は、内方へ折り曲げている。	①回転ナデ ②ナデ	①回転ナデ ②ナデ	乳白色	密 ○		19
19	甕	口径(29.6) 残高 3.6	口頸部外面に2条の凸線、頸部外面に波状文を施す。口縁端部は内側へ屈曲。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 青灰色	密 ◎	自然釉	19
20	短頸壺	口径(8.0) 残高 4.1	口縁部はやや上外方にのび頸部は丸い。胴部の張りは強い。器壁厚し。	①回転ナデ (頸上)回転ナデ (頸下)回転ヘラ削り	回転ナデ	灰 色	密 ◎		19
21	瓶	底径(5.4) 残高 2.4	平底の底部。体部は斜め上方に直線的にたちあがる。	①ナデ ②回転糸切り	ナデ	青灰色	密 ◎		19

表28 第Ⅵ層 出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
22	甕	口径(20.4) 残高 3.9	逆「L」字状口縁の甕。口縁内面に明瞭な陵をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色	石・長(1~2) ◎		20
23	甕	口径(20.5) 残高 2.6	粘付による逆「L」字状口縁を呈する甕。	ヨコナデ	①ヨコナデ (11.F)ミガキ	灰白色 灰黄色	石・長(1~5) ◎		
24	壺	口径(12.4) 残高 2.9	口縁部は外反し、口縁端部にわずかに施文の痕跡あり。径4mm大の円孔1個穿取。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄褐色	石・長(1~2) ○		
25	壺	口径(23.0) 残高 4.6	複合口縁壺。口縁拡張部は内傾し、端部は面取りを施す。	磨滅の為不明	ハケ	淡黄色	石・長(1~4) 金 ◎		20
26	壺	口径(29.7) 残高 3.5	複合口縁壺。口縁拡張部は内傾し、端部は丸く仕上げる。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色	石・長(1~3) ◎		20

第VI層 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	壺	口径(22.8) 残高 2.3	複合口縁壺。口縁拡張部は直立気味に立ち上がり、山形文を施す。	ヨコナデ	ハケ(4~5本/1cm)	黒褐色	石・長(1~3) ○		20
28	鉢	口径(31.5) 残高 8.3	口縁部は「く」の字状にゆるやかに下がり、胴部の張りは弱い。	①タテハケ ②ヨコハケ	ヨコハケ	乳褐色	石・長(1~5) ◎		
29	器台	残高 5.9	器台の脚部。円孔あり。	タテミガキ	ナデ	乳褐色	石・長(1~2) ◎		
30	ジョッキ	底径 10.6 残高 4.5	ジョッキ形土器の底部。突出部をもち、やや上げ底を呈する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色	石・長(1~5) ◎		21
31	甕	底径 5.4 残高 3.5	甕形土器の底部。突出部をもち、底部中央部はナデにより凹んでいる。	ハケ	ナデ	褐色 茶褐色	石・長(1~4) ○		21
32	壺	底径 4.2 残高 3.1	平底の底部。	ハケ	ナデ	乳褐色	石・長(1~5) ◎		21
33	壺	底径(8.6) 残高 3.6	突出部をもつ、上げ底の底部片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄褐色 暗褐色	石・長(1~5) ◎		
34	甕	残高 4.3	小片。貼り付け凸帯(刻み目あり)。	ナデ	磨滅の為不明	黄褐色	石・長(1~2) ○		20
35	浅鉢	残高 3.1	緩やかに外反する口縁。内面に1条の沈線文を施す。	ナデ	ミガキ?	暗灰褐色	石・長(1~3) ◎		20
36	壺	残高 4.8	頸部片。3条の細沈線による流水文の上下に2条以上の沈線文を施す。	ナデ	ナデ	黄灰褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎		20
37	壺	残高 3.2	緩やかに外反する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	(口縁)ヨコナデ ①ヘラミガキ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1~2) ◎		20
38	壺	残高 4.0	口頸部片。緩かに外反する口縁部。口縁下に段をもつ。	磨滅の為不明	ヨコナデ	褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		20

表29 第VI層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
39	石錐	完	不明	5.6	1.0	3.6	102.167		21
40	石鏃	完形	黒曜石	2.7	2.0	0.45	1.164		21
41	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.2	0.2	7.316		21

第6章

野津子山（ノツコヤマ）遺跡

第6章　野津子山遺跡

1．調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1990（平成2）年5月、㈱えひめワールドより松山市久万ノ台乙170番地他における観光開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『19　衣山弥生遺跡・衣山古墳群B』内にある。調査地の北東400mには、久万ノ台古墳群（現愛媛県立松山西高等学校を含む）、北1.25kmには埴輪列をもち前方後円墳の可能性もある船ヶ谷向山古墳、南南西1.2kmには御産所権現山遺跡、また南1.4kmには全長30mの前方後円墳の朝日谷2号墳、南東950mには全長40mの前方後円墳である永塚古墳など、松山平野における古墳時代墓域の一つの中核をなす地域である。

これらのことにより、当該地における埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1991（平成3）年11月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、須恵器・陶磁器・石器等を検出し、当該地に古墳時代～近世に至る遺跡が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・㈱えひめワールド二者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、観光開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古墳時代～近世にかけての当該地及び周辺地域の集落形態解明を主目的とし、㈱松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが主体となり、㈱えひめワールド・㈱伸張開発の協力のもと、1992（平成4）年3月2日開始した。

(2)　調査組織

調 査 地　松山市みどりヶ丘249番地他

遺 跡 名　野津子山遺跡

調査期間　野外調査1992（平成4）年3月2日～同年4月30日

調査面積　643m²

調査委託　㈱えひめワールド

調査担当　調査員　梅木　謙一・武正　良浩

調査協力　㈱伸張開発

調査作業員　高橋　恒、山本　圭、松本　剛、中島　宏、大久保英昭、富山　寛之、黒田　正機、林　亨、木村　浩紀、渡部　竜二、坂元　守、山下　邦明、白方　勇次、岡田　久子、岡田　弥生、白形　安子、乗松　和枝、谷口よし子、

常廣　一恵、藤田　潤子、横田三都子、森田　利恵、松本美知子、黒田　令子、
上西　真弓、持永　皆子、生鷹　千代

(3)　調査の工程

本調査地は、㈱えひめワールドが、観光物産センター建設を計画しているところである。文化教育課と㈱えひめワールドの二者は、当該地の試掘調査に先立ち度重なる協議を行った。その結果、試掘調査申請地が大規模開発であること、原因者の都合等から試掘調査地を二分割することとなった。分割は、便宜上古三津地区（20,712.33㎡）と久万ノ台地区（28,980.51㎡）とした。平成３年度に古三津地区の試掘調査及び本格調査を、平成４年度に久万ノ台地区の試掘調査を実施した。

調査の工程を略記する。

平成３年度　古三津地区試掘調査（平成３年11月28日～平成４年２月25日）
32本のトレンチ溝を設定し、試掘調査を実施。

第37図　調査地測量図

古三津地区本調査　（平成４年３月２日～同年４月30日）

平成４年３月２日　　重機にて表土の除去を行う。

４～７日　　５ｍグリットを設置する。

９～13日　　遺構の検出を行う。

16～18日　　遺構を掘り下げる。遺構内より遺物を検出する。

19～21日　　測量と遺物の取り上げを行う。

記録写真の撮影と測量の補足を行う。

23～４月30日　　出土遺物・記録図面等の整理を行う。

平成４年度　久万ノ台地区試掘調査（平成４年５月18日～同年８月31日）

22本のトレンチ溝を設定し、試掘調査を実施。

なお、平成４年度実施の久万ノ台地区の試掘調査の結果、文化教育課は本格調査の必要性なしとの判断を下す。ただし、工事においては慎重な工事と遺跡が発見された場合の連絡事項を伝達した。

２．層　位

本遺跡は、標高18ｍ前後の丘陵部緩斜面に立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（土壌改良土）、第Ⅱ層灰色土（旧耕作土）、第Ⅲ層淡黄色土である。第Ⅲ層淡黄色土は無遺物層で、地山と呼ばれるものである。第Ⅰ～Ⅱ層は20cm～40cmの厚さである。

遺構は、第Ⅲ層上面での検出である。土壙状遺構７基を検出した。

遺物は、第Ⅱ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器（赤色チャートの石鏃１点）等がある。

なお、調査にあたり調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。呼称名は、第38図に示す。

３．遺構と遺物（第38図）

調査前は果樹園であった為、耕作時の削平を受けており、土壌改良土及び耕作土を除去すると遺構検出面（やや風化した岩盤）であった。調査区の中にもかなりの果樹木の掘り込み痕が確認され、古墳時代～近世の遺構と近・現代の遺構とを丹念に区別しながら調査を進めた。その結果、土壙状遺構を７基検出した。また、遺構内及び地山直上から須恵器片を数点検出した。

(1) 土壙状遺構（第38図）

本調査において確認された土壙状遺構は７基である。すべて第Ⅲ層上面での検出である。これらの遺構は、時期は特定できないが、近現代以前の可能性があるものである。

ＳＫ１　調査区北側Ｆ７・８区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.25m×幅0.6m、深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈している。床面は硬く、ほぼ平坦である。覆土は黒褐色土一層である。

ＳＫ２　調査区北側Ｆ７・８区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.5m×幅0.7m、深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈している。覆土は黒褐色土一層である。

ＳＫ３　調査区Ｄ３区に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ2.2m×幅0.6m、深さ25cmを測る。断面形は皿状を呈している。覆土は黒褐色土一層である。

ＳＫ４　調査区南側Ｃ２区に位置する。平面形は不整形な方形を呈し、規模は長さ1.6m×幅1.4m、深さ20cmを測る。断面形はレンズ状を呈している。覆土は黒灰褐色土である。

ＳＫ５　調査区Ｃ１・Ｄ１区に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.7m×幅0.52m、深さ20cmを測る。断面形は皿状を呈している。覆土は黒灰褐色土一層である。

ＳＫ６　調査区北側Ｇ９区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.65m×幅0.8m、深さ35cmを測る。断面形はレンズ状を呈している。覆土は黒灰褐色土である。

ＳＫ７　調査区Ｇ８区に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ0.6m×幅0.4m、深さ30cmを測る。断面形は皿状を呈している。覆土は黒灰褐色土である。

(2) 出土遺物（第39図１～５）

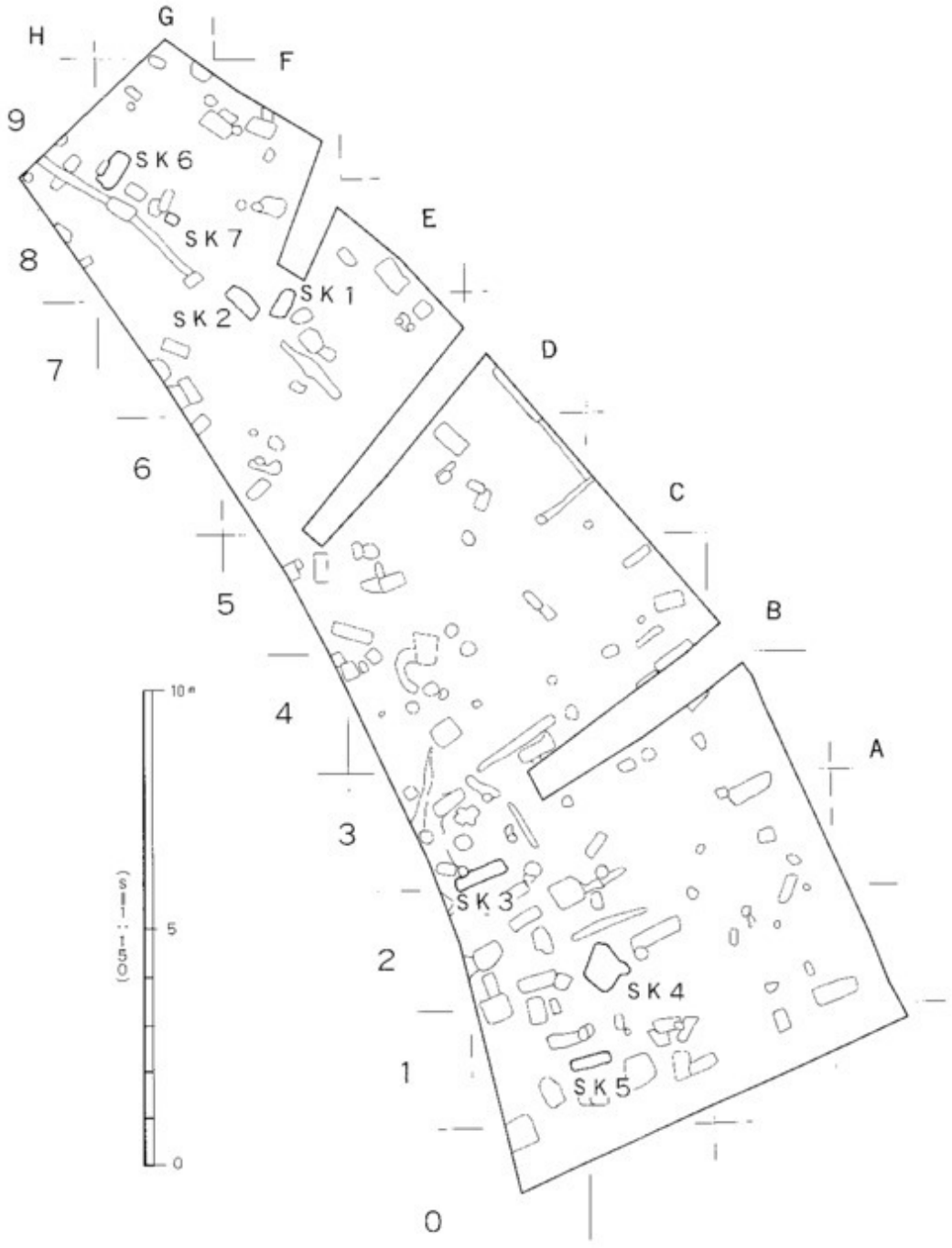
須恵器（１～４）　１は土壙ＳＫ３出土の須恵器坏蓋である。天井部は笠形を呈し、天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面は回転ナデ調整を施す。２～４はトレンチ内出土の須恵器である。２はやや扁平な天井部をもつ坏蓋。天井部上位は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施し、天井部内面に同心円の浅い文様が認められる。３は長頸瓶の頸・肩部片。頸部はやや内傾して立ち上がり、頸部と肩部の境界に１条の凸線が巡る。内外面共に回転ナデ調整を施す。４は短頸壺の口縁部片。内傾して立ち上がる口縁部は端部を丸くおさめている。内外面共にナデ調整を施しており、内面に指頭痕が看取される。

弥生土器（５）　近現代壙より出土する。５は弥生時代後期後半の大型鉢形土器である。口縁部は「く」の字状を呈し、長くゆるやかに曲がるものである。胴部の張りは強く、外面はヘラ磨き、内面は刷毛目調整をする。

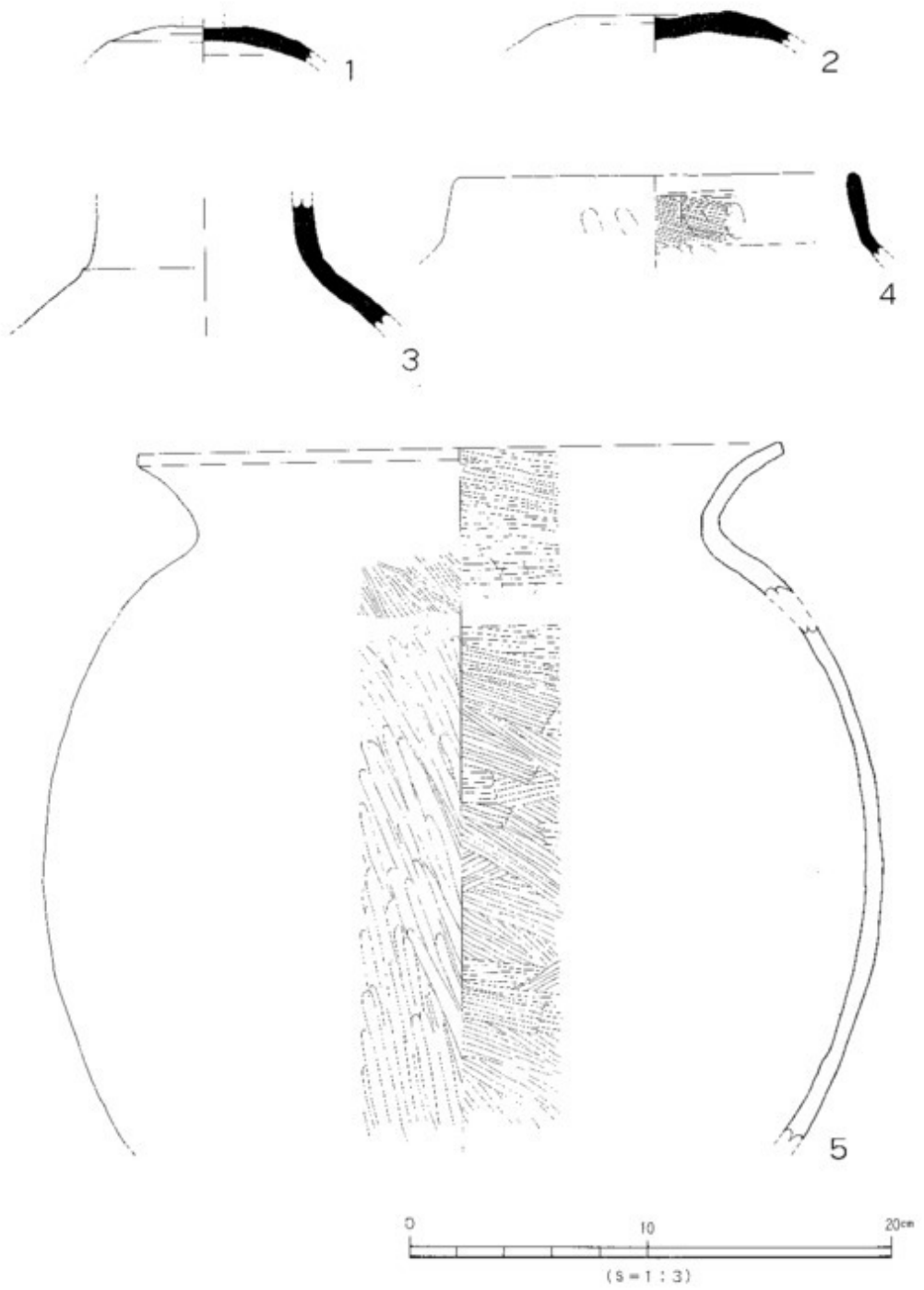
４．小　結

当該地における試掘調査及び本調査では、古墳時代～近世の遺物と同時期かと考えられる遺構を確認した。

当該地を含む周辺地は、松山平野における古墳時代の墓域の一つの中核をなす地域である。


H
G
F
E
D
C
B
A
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
SK6
SK7
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
10m
5
0
(SI=1:150)

第38図　遺構配置図



第39図　ＳＫ・包含層出土遺物実測図

よって本調査地内での古墳の検出は想定されるところであったが、調査の結果は未検出であった。これは、柑橘植樹による開墾が行われ、土地利用が進行していたことと、地形の変動（古三津地区西側部で地滑りあとを確認）等により消滅した可能性が考えられる。加えて、調査地内からは、板状ないし人頭大の石が丘陵頂上部にみられ、時期不定ながらも遺構が検出される。さらに須恵器等の遺物が出土するなど、古墳時代の遺跡の存在とその消滅を想定可能にしている。

また、弥生時代後期後半の鉢形土器は、破片としても大きいものであり、隣接する久万ノ台遺跡（第5章）を含め、当地域の弥生時代後期の集落存在とその範囲を明らかにする資料として注目される。

周辺地域には急速な土地開発の波が押し寄せており、自然地形も大きく変わろうとしている。当地域では、稀少かつ貴重な資料の出土が多いことから、慎重な対応並びに綿密な調査が要求されるところである。

表30　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	F7·8	長方形	皿状	1.25×0.6×0.1	黒褐色土			時期不明
2	F7·8	長方形	皿状	1.5×0.7×0.1	黒褐色土			時期不明
3	D3	長方形	皿状	2.2×0.6×0.25	黄褐色土	須恵器		古墳以降
4	C2	不整方形	レンズ状	1.6×1.4×0.2	黒灰褐色土			時期不明
5	C1·D1	長方形	皿状	1.7×0.32×0.2	黒灰褐色土			時期不明
6	G9	長方形	レンズ状	1.65×0.8×0.35	黒灰褐色土			時期不明
7	G8	長方形	皿状	0.6×0.4×0.3	黒灰褐色土			時期不明

表31　SK・包含層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調 (内面)	胎土	焼成	備考	図版
1	坏蓋	残高 1.4	笠形の天井部。器壁は比較的厚い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		SK3	27
2	坏蓋	残高 1.4	やや扁平な天井部からゆるやかに口縁部に至る。	㋐ヘラ回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ (同心円叩き)	灰色 灰色	石·長(1~2) ◎		トレンチ	27
3	蓋	残高 4.6	やや内傾してたちあがる頸部。頸部と肩部の境界に1条の凸線あり。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		トレンチ	27
4	壺	口径(24.7) 現高 5.0	内傾する口縁部。端部は丸い。	ナデ	ナデ (指頭痕)	灰色 灰色	密 ◎		トレンチ	27
5	鉢	口径(26.7)	長くゆるやかに外反する口縁。頸部直下に工具痕。	㋐ハケ ㋑ヘラミガキ	ハケ (5~6本/1cm)	淡茶褐色 黄茶褐色	密 ◎			27

（註）　遺構・遺物一覧の凡例はP29を参照

第７章　山越遺跡（２次）出土の弥生前期土器

梅木謙一・水口あをい

はじめに

松山平野における弥生前期の土器は、前半は『持田式』、後半は『阿方・片山式』で総称される。後半の土器様相は資料が豊富なため明らかな部分は多いが、前半については良好な資料に恵まれず不明な点が数多くみられた。近年、調査数の増加に伴い、前期前半の資料も相次いで出土し、朝美澤遺跡２次（註1）、文京遺跡４次（註２）、樽味遺跡（註３）では一括ないし良好な資料が確認された。これ等の資料は、報告書により整理・分析が行われ、前期前半の土器様相の一面を明らかにするものとなった。

本稿では、山越遺跡２次調査ＳＤ２出土の土器について整理・分析を行い、前期前半の基礎資料の提示と既成資料との比較検討を試みるものである。（梅木）

１．山越遺跡２次調査ＳＤ２出土品

本節では、山越遺跡２次調査ＳＤ２出土の前期前半の土器について、器種構成や器形、施文、調整について整理・分類し、基礎資料の提示を行う。

(1)　器種と器形

器種は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器で構成される。

甕形土器　口縁部６点、体部片２点がある。形態には、如意形系（７点）と縄文晩期凸帯文系（１点、以下「凸帯文系」と記す）の二形態が存在する。如意形系は、口縁部の屈曲が強く折り曲がるものと、緩やかなものがある。胴部上半は若干のふくらみをもつ。口縁端部は全て面取りが行われ、「コ」字状を呈し、刻み目が施される。凸帯文系は、直立する口縁下に貼り付け凸帯をめぐらすもので、口縁部と凸帯上に細く小さい刻み目を施す。

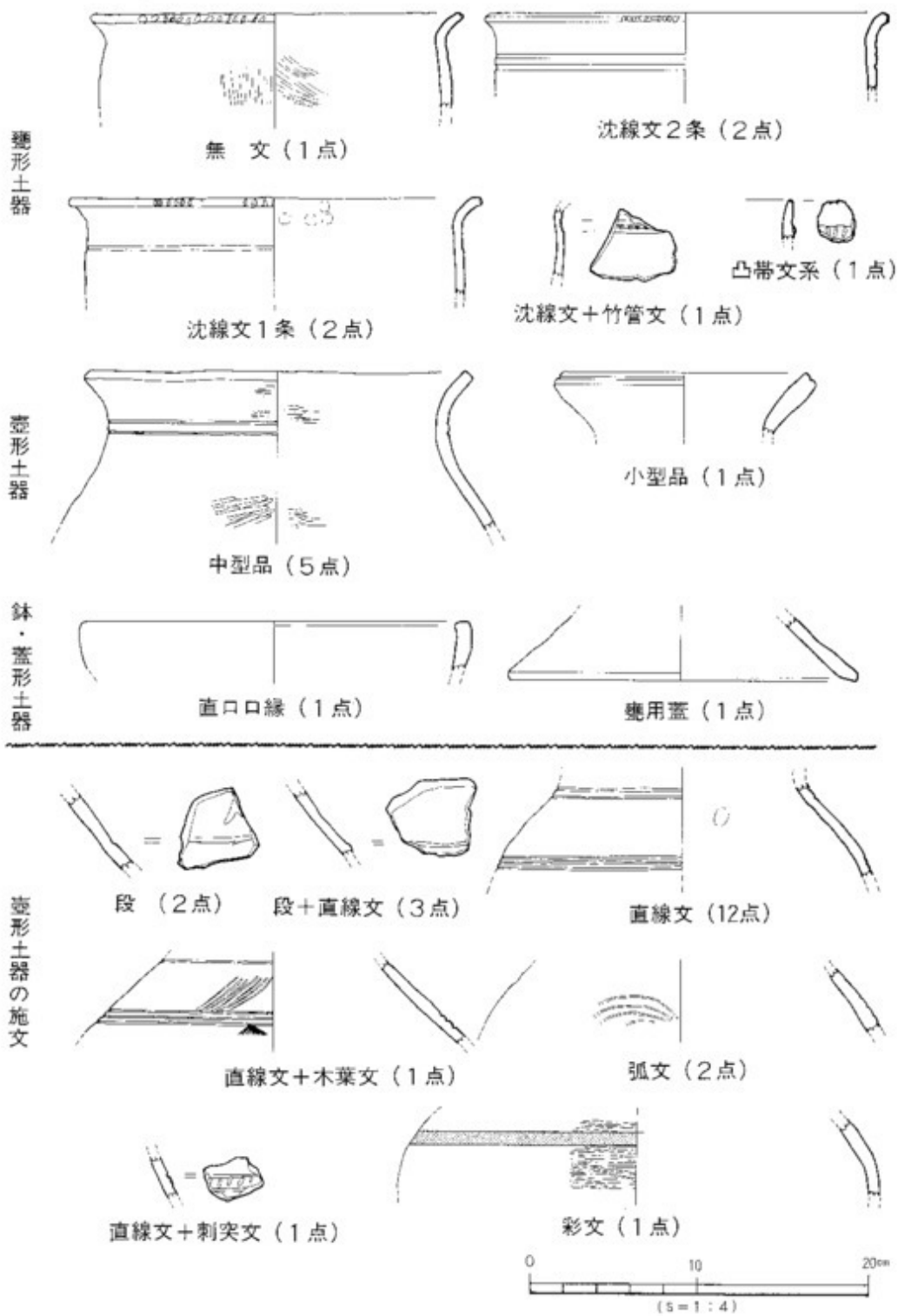
壺形土器　口縁部６点、体部片23点がある。残存する土器片が小片の為器形の全様を知りえるものではない。口縁部の法量（推定）より、中型品（15～30cm未満・５点）と小型品（15cm未満・１点）がある。口縁部形態は緩やかに外反し、口縁下（口頸部境）の貼付けによる段はみられず沈線文を施すものである。

鉢形土器　口縁は直口（1点）で、わずかに内湾ぎみに立ち上がり、端部は「コ」字状を呈するものがある。

蓋形土器　裾部は「ハ」の字状に開き端部はわずかに外反するものがある。内面に煤の付着を看取する。口径は20.3cmを計る。

(2)　施　文

甕形土器　如意形系では、無文（１点）、１条の沈線文（２点）、２条の沈線文（２点）、沈線文＋竹管文（１点）がある。口縁端部には全て刻み目を施し、全面（２点）に施すものと



第40図　山越遺跡(２次)ＳＤ２出土資料

下半（３点）に施すものがある。また刻み目の大きさは、無文のものは切り込みが深く明瞭であるが、下半に施すものは浅く小さいものである。

壺形土器　段部(沈線化)、段＋直線文、直線文、弧文、直線文＋木葉文、直線文＋刺突文、彩文（赤色顔料・註４）がみられる。段部（２点）は、明瞭なものではなく沈線化したものである。段＋直線文（３点）は、沈線化した段下に直線文（ヨコ）を施す。直線文（ヨコ・12点）は、口縁端部、頸部、胴部に１～３条を施すものである。弧文（２点）は、細い沈線で弧を描く。直線文＋刺突文（１点）は、直線文間に縦長の刺突文を施す。彩文（１点）は、胴部に0.9cm幅で帯状に焼成後塗彩を施したものである。

(3)　調　整

甕形土器　如意形系では、口縁部内外面にナデ（ヨコナデ）調整を顕著に残す。体部外面は刷毛目調整をのこすものであるが顕著ではない。内面は、最終仕上げにナデ調整を行う。

壺形土器　体部外面は細かいヘラ磨き調整（ヨコ）を行う。内面はヘラ磨き調整（ヨコ）やナデ仕上げがみられるが、磨滅の為調整方法が不明なものもある。

鉢形土器　磨滅の為不明である。

蓋形土器　端部は内外面共にヨコナデ調整で、胴部内外面はナデ調整を行う。　（水口）

２．弥生前期前半の土器―松山平野―

本節では、松山平野の前期前半の資料である朝美澤遺跡２次、文京遺跡４次、樽味遺跡出土品について検討し、その比較を行い前期前半の土器様相を提示するものである。なお、各遺跡及び遺構の詳細は調査報告書を参照していただきたい。

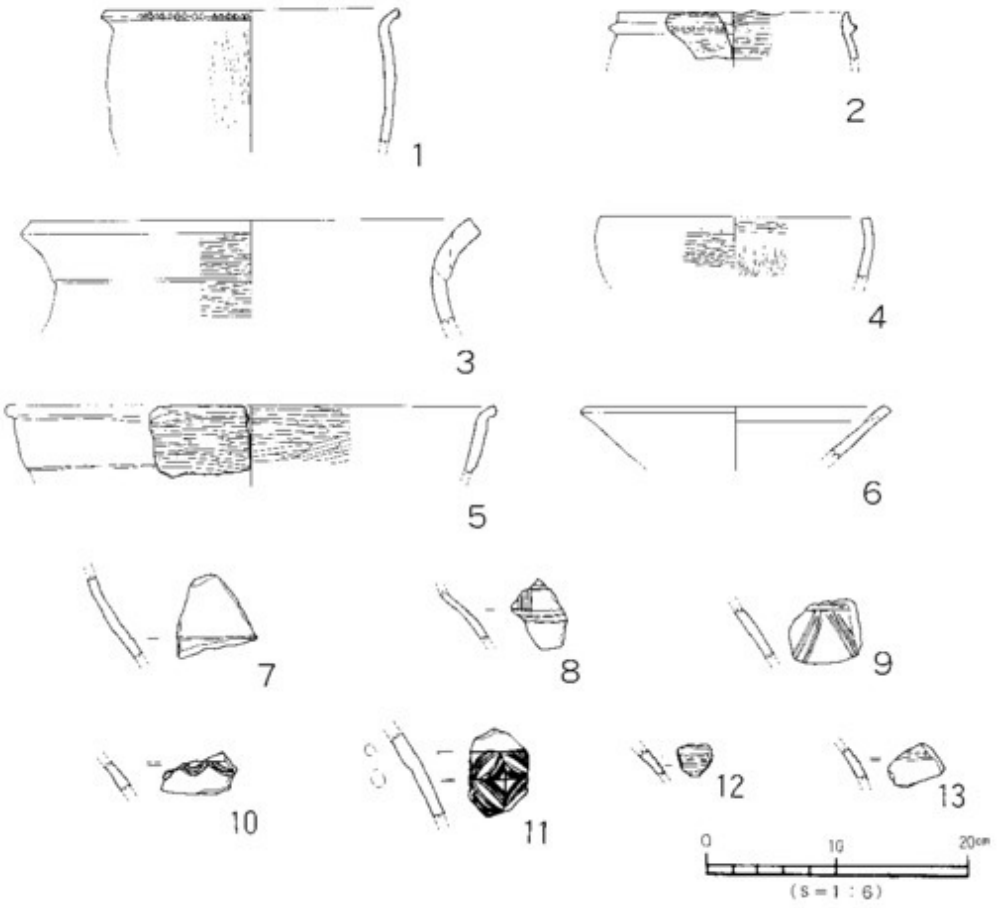
(1)　朝美澤遺跡２次第Ⅲ層下部（第41図１～13）

器種は、甕形土器（１・２）、壺形土器（３・７～13）が主体となり、鉢形土器（４・５）と僅かに高坏形土器（６）が伴う（註５）。甕形土器は如意形系のものが主体となり、凸帯文系のものは少数である。壺形土器は大～小型品があり、口頸部境に段をもつものである。鉢形土器は、直口口縁のものと外反口縁のものがある。なお、甕形土器と鉢形土器の胴部には有段になるものや屈折するものがみられる。施文は、甕形土器の胴部への加飾は無文であり、壺形土器には頸部～胴上半部に段・直線文（タテ・ヨコ）・斜線文（山形文）・弧文・木葉文・刺突文・竹管文が施される。高杯形土器は、杯部内面に段をもつ。調整は、甕形土器は刷毛目調整後、ナデ調整を行うものが多い。壺形土器はヘラ磨きである。

(2)　文京遺跡４次ＳＢ２（第42図１～11）

器種は、甕形土器（１～３・９）、壺形土器（４・５・10・11）が主体となり、鉢形土器（６～８）が伴う。甕形土器は如意形系のものがみられる。壺形土器は中・小型品があり、口頸

朝美澤遺跡第Ⅲ層下部



第41図　松山平野の弥生前期前半の土器　(1)

部境が有段なものと沈線文による区画のものがある。鉢形土器は直口口縁のものがある。施文は、甕形土器の胴部への加飾は無文・沈線文（1～3条）・沈線文＋刺突文があり、壺形土器には直線文・木葉文がみられる。鉢形土器は無文で、稀に文様をもつものがある（8）。調整は、甕形土器は刷毛目調整痕を残さず、ナデにより仕上げる。壺形土器はヘラ磨き調整となる。なお、文京遺跡4次ではＳＢ2と同時期のＳＢ1がある（第42図12～15）。遺物の出土量は少ないが、凸帯文系の甕形土器と口頸部及び頸胴部境が沈線文（段状に施す）により区画される壺形土器が伴出している。

(3)　樽味遺跡ＳＤ4　（第42図16～23）

器種は、甕形土器、壺形土器が主体となり、鉢形土器と僅かに蓋形土器（甕用）が伴う。甕形土器は如意形系のものがある。壺形土器は大～小型品があり、口頸部境は弱い段であるが沈線文を施すことで成形されるものと沈線文での区画によるものがある。鉢形土器は直口

口縁のものがある。施文は、甕形土器の胴部への加飾は無文・沈線文（１～２条）、壺形土器は頸部～胴上半部に直線文・斜線文・弧文・木葉文が用いられる。調整は、甕形土器は刷毛目調整痕を顕著に残さず、壺形土器はヘラ磨き調整となる。

(4) 前期前半の土器様相

朝美澤遺跡２次第Ⅲ層下部、文京遺跡４次ＳＢ２・１、樽味遺跡ＳＤ４の土器について、その共通点をあげ、前期前半の土器様相を検討する。器種は甕形土器、壺形土器、鉢形土器が主要となり、高杯形土器と蓋形土器（甕用）は僅かに伴出するものとしてみられる。なお、壺用の蓋形土器の出土は現在までにみられない。

器形は、甕形土器は如意形系のものが多数をしめ、凸帯文系のものは少数が伴うにとどまる。壺形土器は大～小製品があり、口頸部境の形状に着目すると、有段のものと沈線文区画のものに分類される。朝美澤遺跡２次第Ⅲ層下部は有段のものでしめられ、文京遺跡４次ＳＢ２・樽味遺跡ＳＤ４は有段と沈線文区画の二つのものを用いる。鉢形土器は、直口口縁のものが主体となる。

施文は、甕形土器は胴部加飾に着目すると、無文のものと有文のものに分類される。朝美澤遺跡第Ⅲ層下部は無文でしめられ、文京遺跡ＳＢ２・樽味遺跡ＳＤ４は無文と有文の二つのものを用い、さらに有文のものは１～３条の沈線文を施すものに限られる。壺形土器は、頸部～胴上半部に段をもつものがある一方加飾され、直線文系（タテ・ヨコ・ナナメ・山形等）、弧文系（重弧文・木葉文）、刺突文系（刺突文・竹管文）の文様が共通するモチーフとして施されている。

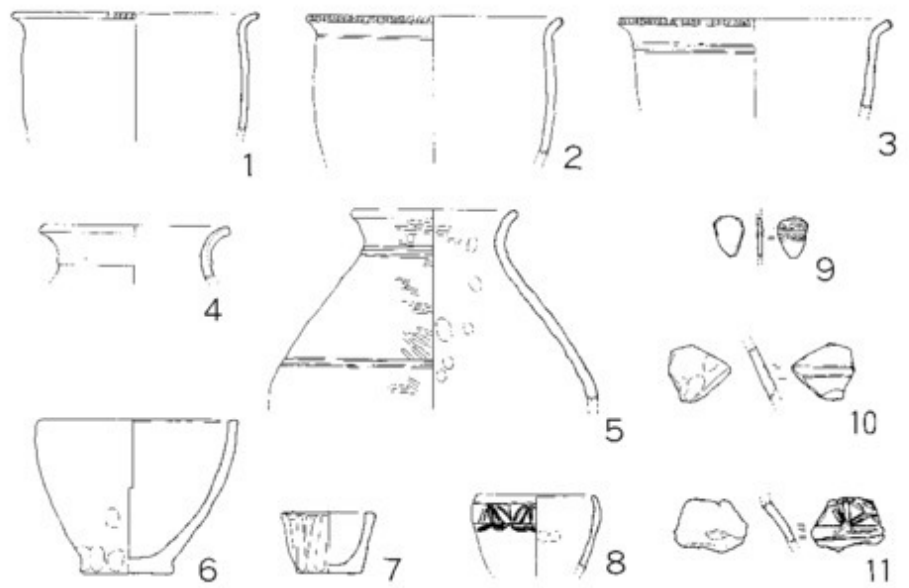
調整は、甕形土器は刷毛目痕を顕著に残さず、磨きないしナデにより仕上げる傾向が強い。壺形土器はヘラ磨き調整を用いるものである。

朝美澤遺跡２次第Ⅲ層下部、文京遺跡４次ＳＢ２・１、樽味遺跡ＳＤ４は、総じて同じ要素をもつが、甕形土器の施文（無文、無文＋沈線文１～３条）や壺形土器の口頸部境の形状（段、段＋沈線文）に違いがみられ、朝美澤遺跡２次第Ⅲ層下部（仮にⅠ群とする）と文京遺跡４次ＳＢ２・同ＳＢ１・樽味遺跡ＳＤ４（仮にⅡ群とする）の二群に区分される。

さて、Ⅰ群とⅡ群の関係及びその位置付けである。両群は、前述のごとく属性の一部の要素において違いがみられるものである。一般に前期の土器は、甕形土器の胴部施文は、無文から有文、さらに多条へと移行し、壺形土器の口頸部境の形状は有段から沈線文での区画に移行するといわれ、これ等は時間的変化形態として理解されているところである。この事象は、当平野においても同様な傾向を示すものだとすれば、先のⅠ群とⅡ群は、Ⅰ群からⅡ群への時間的推移の関係にあるといえる。さらに、Ⅰ群は松山平野の前期前半でも古い様相をもつもの（古相）、Ⅱ群は新しい様相をもつもの（新相）として理解される（註６）。

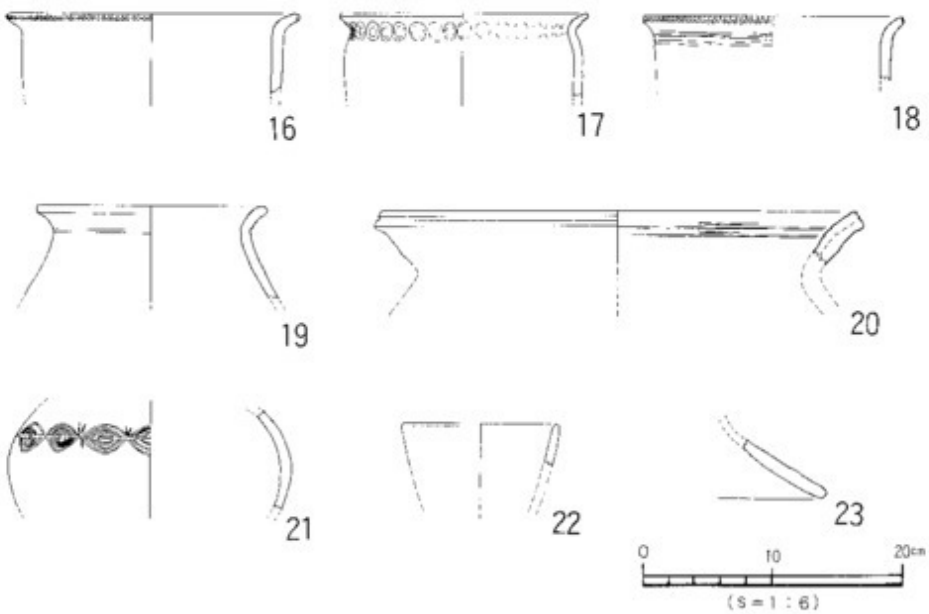
（梅木）

文京遺跡４次ＳＢ２



文京遺跡４次ＳＢ１

樽味遺跡ＳＤ４



第42図　松山平野の弥生前期前半の土器　(2)

３．山越遺跡２次ＳＤ２の土器相

山越遺跡２次ＳＤ２出土の土器は、１節で器種・器形、施文、調整について整理と分類を行い、出土品を資料化した。本節ではこの資料を用い、２節で得られた着目点と方法により山越遺跡２次ＳＤ２の土器相を求め、次に松山平野出土の前期前半の資料との比較を行う。

山越遺跡２次ＳＤ２は、器種は甕形土器と壺形土器が主体となり、少数の鉢形土器と蓋形土器（甕用）が伴う。甕形土器は、如意形系のものに僅かに凸帯文系のものが伴う。壺形土器は中・小型品があり、口頸部境は沈線文区画のものである。鉢形土器は直口口縁のものがある。施文は、甕形土器は無文・沈線文（１～２条）・沈線文＋刺突文があり、壺形土器には頸部～胴上半部に段・直線文系・弧文系・刺突文系・彩文がモチーフとなり加飾される。調整は、甕形土器は刷毛目痕を顕著に残すものは少なく、壺形土器はヘラ磨き調整となる。

これ等のことより、山越遺跡２次ＳＤ２出土品は、平野の前期前半の土器様相と同じくし、さらには甕形土器の施文や壺形土器の口頸部形態・施文の特徴より、文京遺跡４次ＳＢ２・同ＳＢ１や樽味遺跡ＳＤ４の一群（Ⅱ群）と同一のものであるといえる。

また、山越遺跡２次ＳＤ２出土品の時間的位置付けはⅡ群に属することより、松山平野の前期前半の新しい様相をもつもの（新相）として理解される。（梅木）

４．結　語

本稿では、山越遺跡２次ＳＤ２出土品の資料化と、同時期である松山平野の前期前半の資料について分析を試みた。その結果、山越遺跡２次ＳＤ２出土資料は、松山平野の前期前半の様相をもち、さらにはその特徴より前期前半でも新しい様相（新相）をもつものとして位置付けされた。

山越遺跡２次ＳＤ２資料は、前期前半の基礎資料、かつ新しい様相を設定するための追認資料であり、貴重な資料であるといえる。

本稿執筆に際しては、下條信行、宮本一夫、田崎博之の各先生方より、御指導・御教示を賜った。末筆ながら記して謝意を表するものである。（梅木）

［追稿］

松山平野における弥生前期前半の土器様相は、本稿を加えても明らかでない部分が多い。よって、今後の調査及び研究に際しての課題や視点を以下に略記するものとする。

●器種構成は、前期前半において既に、一般的な弥生土器の器種が存在するが、その比率は定かでない。壺形土器用の蓋形土器の存在は課題である。

●器形では、各器種とも全様が不明で、特に壺形土器の資料が望まれる。また、高坏形土器と蓋形土器は良好な資料がなく、器種判断に際し（特に、底部小片での判別）慎重を要する。

結　　語

●縄文晩期後半（刻み目凸帯文期）の土器は、当平野においても、弥生時代前期前半では一部の器種・器形が継続する可能性がある。器種は、深鉢（本稿では甕形土器凸帯文系と記した）と浅鉢である。深鉢は、口縁部の形態は凸帯の形状（細い・薄い・扁平な三角形・帯状）や貼付けの位置（口縁端部、端部より下がる）に複数のものがみられる。浅鉢は、胴部が屈折（屈曲）することで器形をとどめるものである。器形態の整理と分析が必要である。

●各器種の器形態変化については、資料の追加を待たなければならないが、本稿設定のⅠ・Ⅱ群の間にも弱干の器形態の変化は認められるものと考えている。

●施文では、壺形土器の文様種において、便宜的に「系」を用語として使用した。これは、土器片が小片のため文様が確定できるものが少ないためである。また、「系」は、表現方法に着目したものであり、一般的に使用可能な用語であるかは要検討のものである。

●甕形土器の胴部への加飾は、無文のものが主体となるものから、有文のものへと変化するが、有文の場合１～２条が新相の主体となり、３条のものはより新しい傾向が現れたものとして考えている。沈線文の数は時期判断（短期間の区別）において絶対的なものとはいい難く、一つの目安にすぎないものと考えている。

●甕形土器如意形系の口縁端部への刻み目は、端部全面に施すものもあるが、下半（下端を含む）に施す傾向が強い。この傾向は、既にⅠ群（古相）においてもみとめられる。

なお、凸帯文系のものの口縁端部及び凸帯上の刻み目は施すことが多いが、前時代と比べるとその形状は細く（小さく）、不規則なものとなる。

（註）

(1) 梅木謙一・宮内慎一編　1992　『嵐美澤遺跡・辻町遺跡』　㈱松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(2) 栗田茂敏　1992　「文京遺跡４次調査」『道後城北遺跡群』　㈱松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(3) 宮本一夫編　1989　『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

(4) 本田光子・成瀬正和　1991　「古代松山平野の赤色顔料―弥生時代編(1)」『松山大学構内遺跡―第２次調査』　松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

(5) 再調査の結果、甕用の蓋形土器の可能性が高い土器片（小片）を２点確認した。他に出土事例がないことより断定はできないが、この時期に土製の蓋形土器が使用された可能性は充分に考えられる。

(6) Ⅱ類（新相）に比定される資料は、松山市久米高畑遺跡５次ＳＫ２、同９次ＳＫ７より出土している。

久米高畑遺跡５次

宮崎泰好　1989　「久米高畑遺跡（５次）」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

久米高畑遺跡９次

池田　学　1991　「久米高畑遺跡９次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

第8章　調査成果と課題

山越及び久万ノ台地域の調査では弥生～古墳時代、古代、中世の生活関連遺構と遺物を確認し、同時代の集落存在が明らかになった。

山越遺跡（1～3次）

弥生時代　山越遺跡一帯は、以前より前期後半や中期の遺物が出土し、同時期の集落存在が想定されていた。今回の調査では、前期前半、後期後半の遺構と遺物が確認され、よって山越周辺には弥生時代において継続的に集落が経営されていたことが想定されるようになった。特に注目されるのは、2次調査地検出のＳＤ２である。ＳＤ２は前期前半の溝状遺構で、土器・木製鍬・有茎磨製石鏃が出土した。各資料は、現時点において、松山平野で最も古い資料であり、かつ出土例の稀少なものであり重要な資料といえる。土器は出土量が少ないが、器種構成や調整・施文等の手法が分析できるものとして、松山平野の前期土器の基礎資料となるものである（第7章）。木製鍬・磨製石鏃は平野にとどまらず、瀬戸内地方においても貴重な資料となるものである。

古墳時代　1次調査地では前半期の竪穴式住居址（ＳＢ１）を検出した。山越遺跡内での古墳時代生活関連遺構の確認としては初例となる。ＳＢ１は平面形が四角形で、主柱穴4本とカマドを附設しており、古墳時代住居址の典型的な形態を呈する。ただし、当平野における古墳時代の土器編年が確立されていないことより、時期比定においては特定をさけた。これは、本資料が当平野におけるカマド研究（導入時期）に対し課題を与えるものとなるからである。この他、3次調査地からは、前期の二重口縁壺の口縁片が出土し、当平野では数少ない資料として注目される。また、6～8Ｃ代の須恵器の出土は古墳時代～古代の集落の存在を示唆するものとなった。

久万ノ台・野津子山遺跡

弥生時代　久万ノ台遺跡からは、前期と後期末の土器が少量ではあるが得られた。周辺地での同資料の出土例は調査以前には僅かであったため、同地域での前期及び後期末の集落存在を示唆するものとして注意したい。また、野津子山遺跡では、弥生後期の土器片が出土した。遺構は確認できなかったものの、その立地より丘陵地での調査は古墳に限らず、集落関連遺構の検出にも努力しなければならないことを提示するものとなった。

古代～中世　当平野内においても近年になり中世の遺構・遺物を注意し、調査に重きをおくものとなった。ただし、未だその資料数は少なく、久万ノ台遺跡出土資料は少量ながらも一つの基礎資料になるものであり評価されよう。

今回の調査は、資料数が多くはなかったが、調査地周囲の集落動態及び平野における稀少資料を得たことで評価されるものであろう。

写 真 図 版

写真図版例言

1．遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カ メ ラ　アサヒペンタックス67

　　ニコンニューFM2　他

レ ン ズ　ペンタックス67　75㎜F4.5　他

　　ズームニッコール28～85㎜　他

フィルム　ネオパンSS・カラーネガ

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ メ ラ　トヨ／ビュー45G

レ ン ズ　ジンマーS240㎜F5.6　他

ストロボ　コメット／CA-32 2灯・CB2400 2灯（バンク使用）

スタンド他　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フィルム　白黒　プラスXパン4_x5

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフイルム現像・焼き付けは、大西が行った。

（白黒に限る。）

使用機材：

引 伸 機　ラッキー450MD

　　ラッキー90MS

レ ン ズ　エル・ニッコール135㎜F5.6A

　　エル・ニッコール50㎜F2.8N

印 画 紙　イルフォードマルチグレード　RC

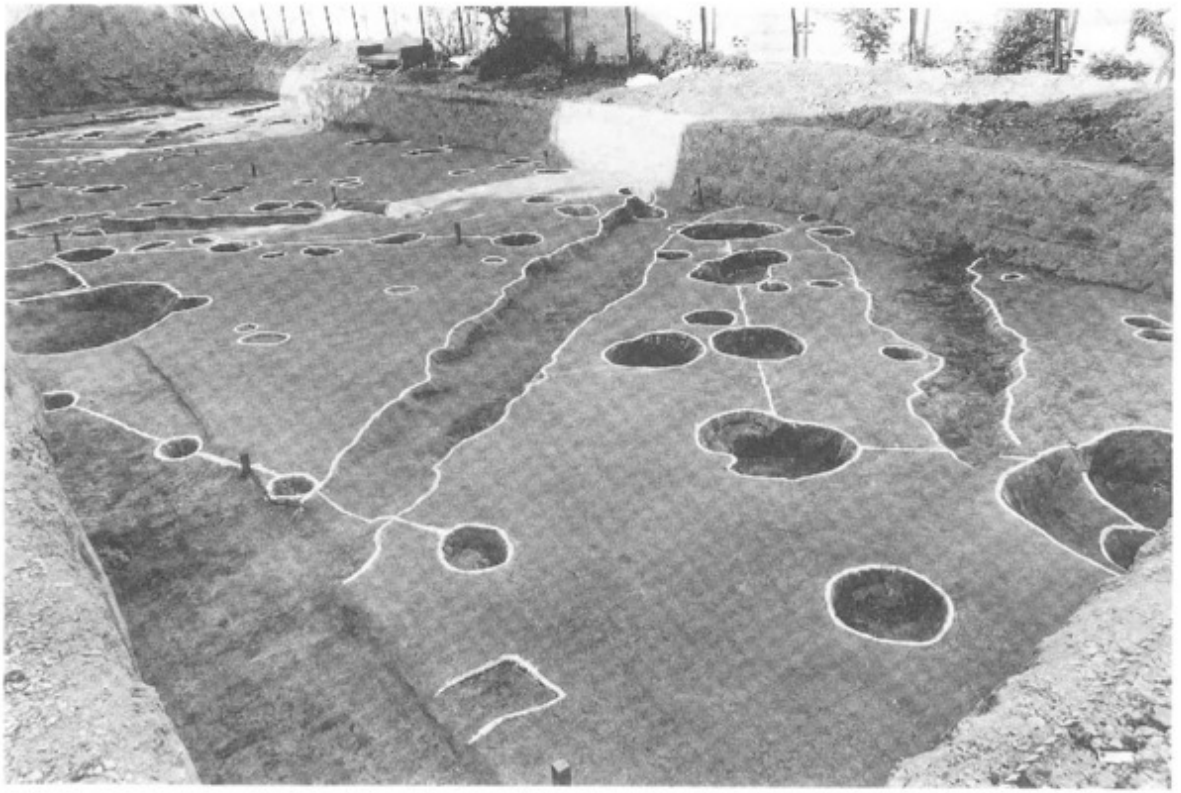
4．製版　150線

印刷　オフセット

用紙　マットカラー105kg

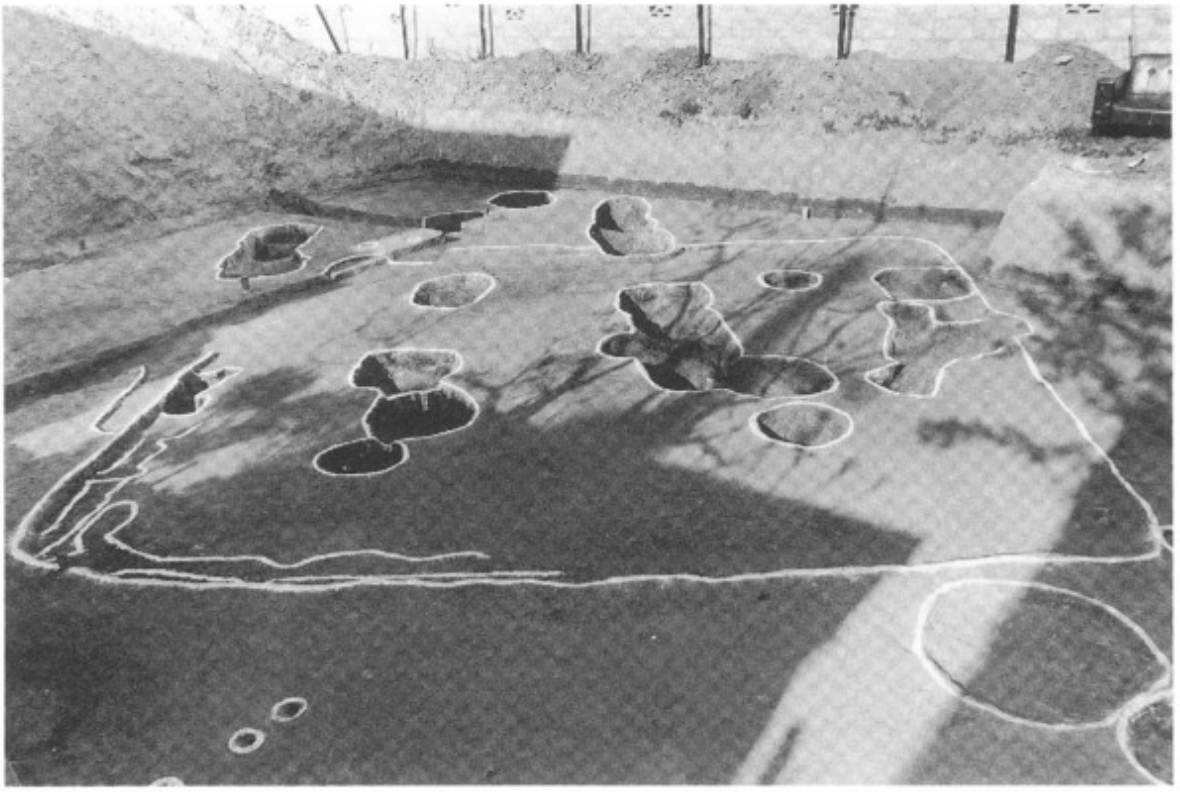
【参考】　『埋文写真研究』Vol.1～3

1　北半部遺構検出状況（北より）

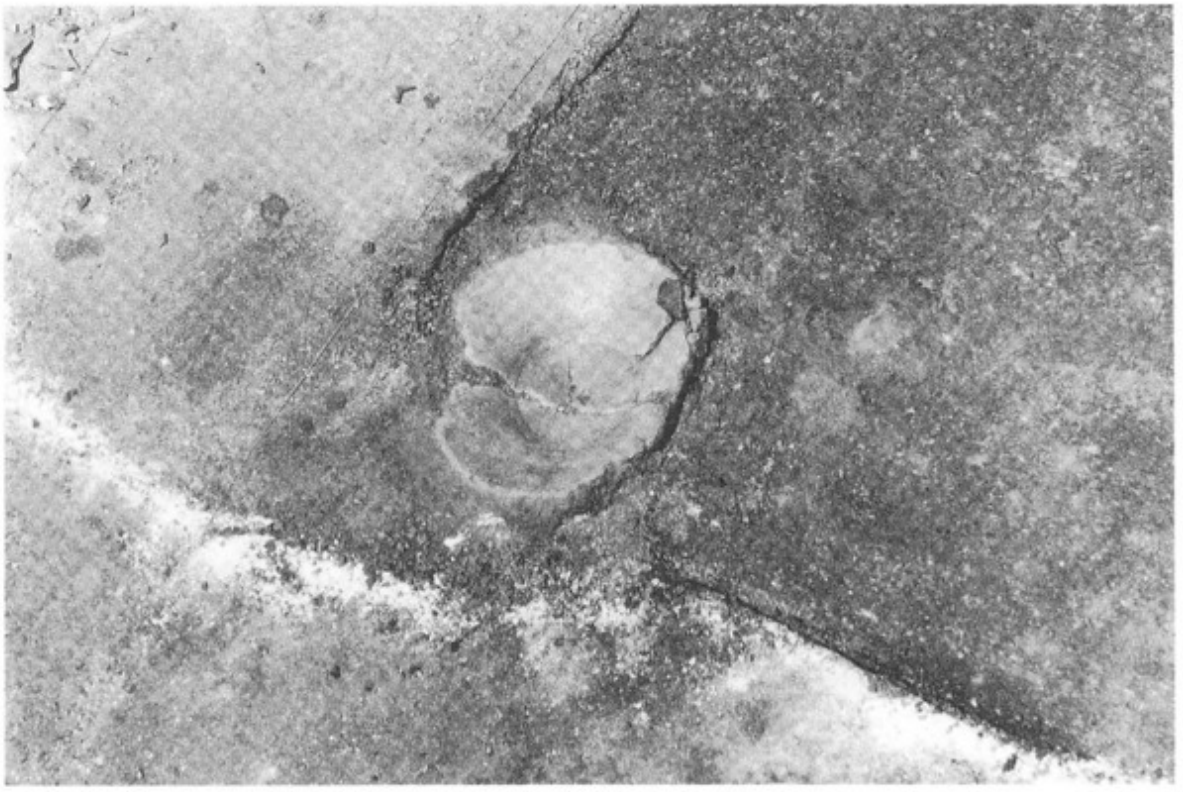


2　南半部遺構検出状況（南より）

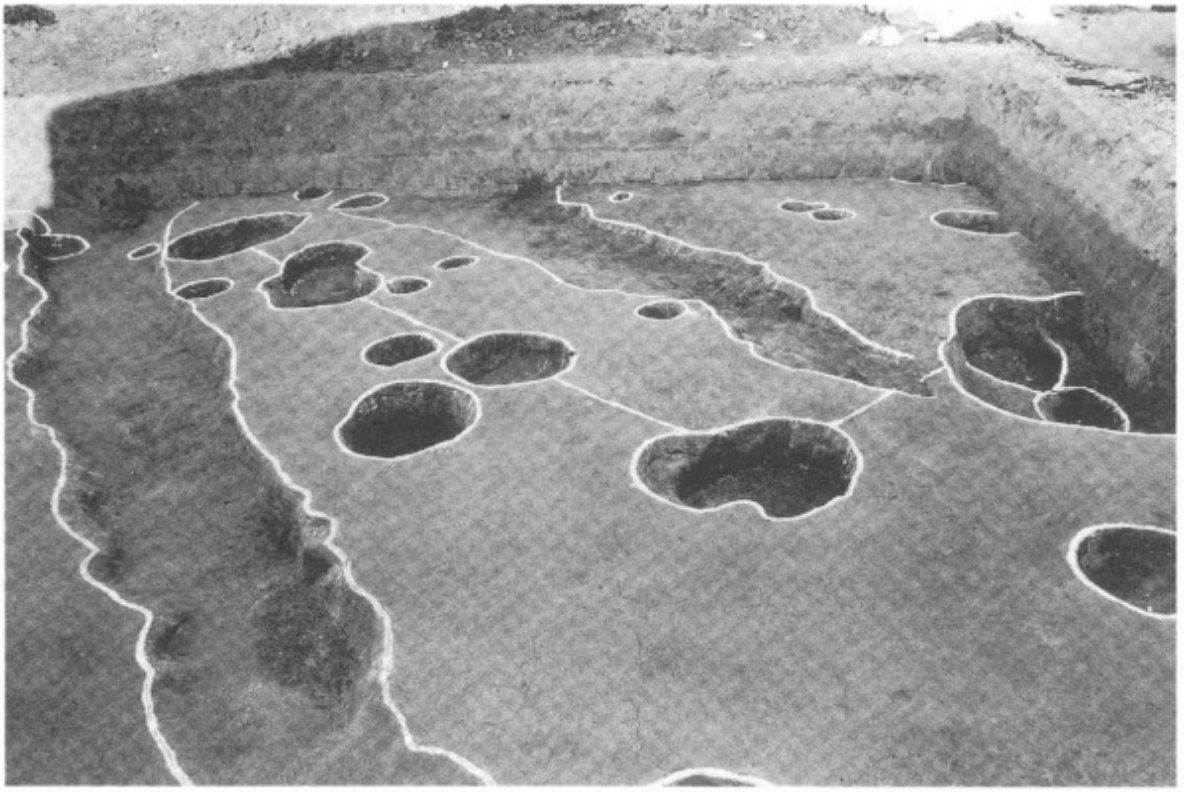
図版二



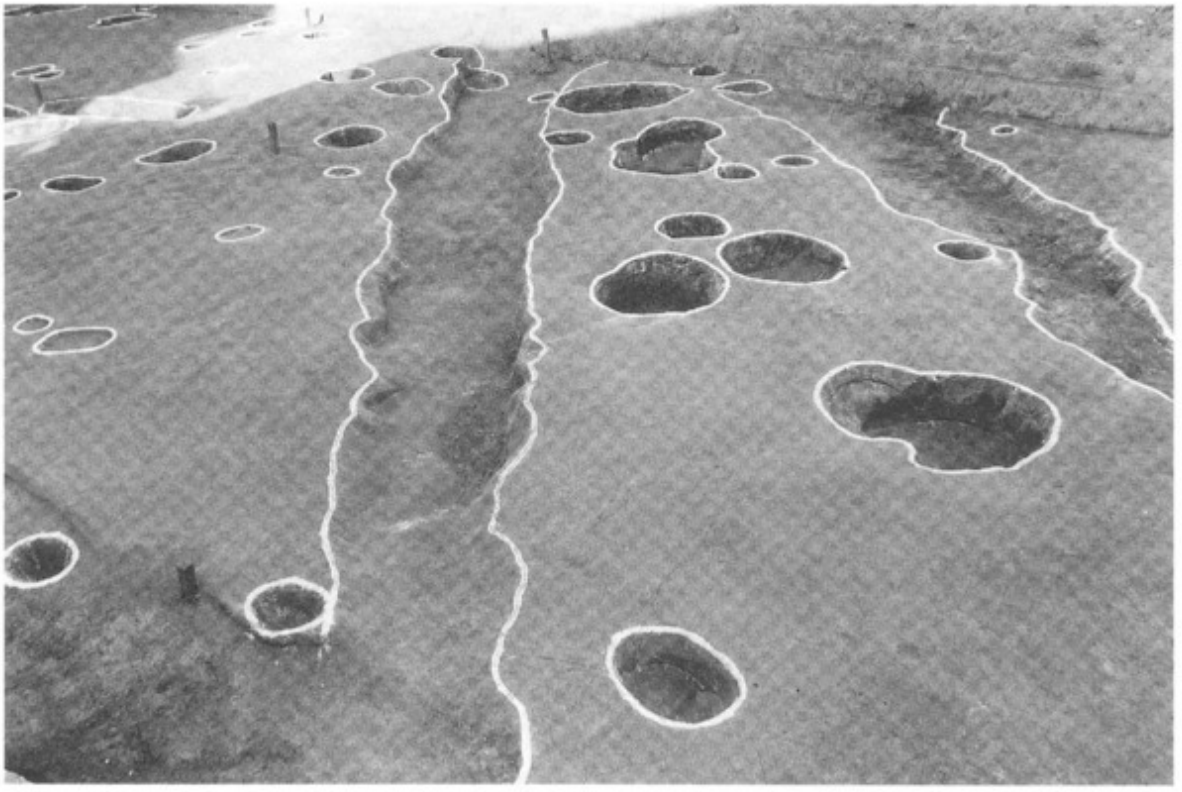
1　SB1（西より）



2　SB1　遺物出土状況（南より）



1　掘立2（西より）



2　SD2，3（西より）

図版四

1

2

3

4

7

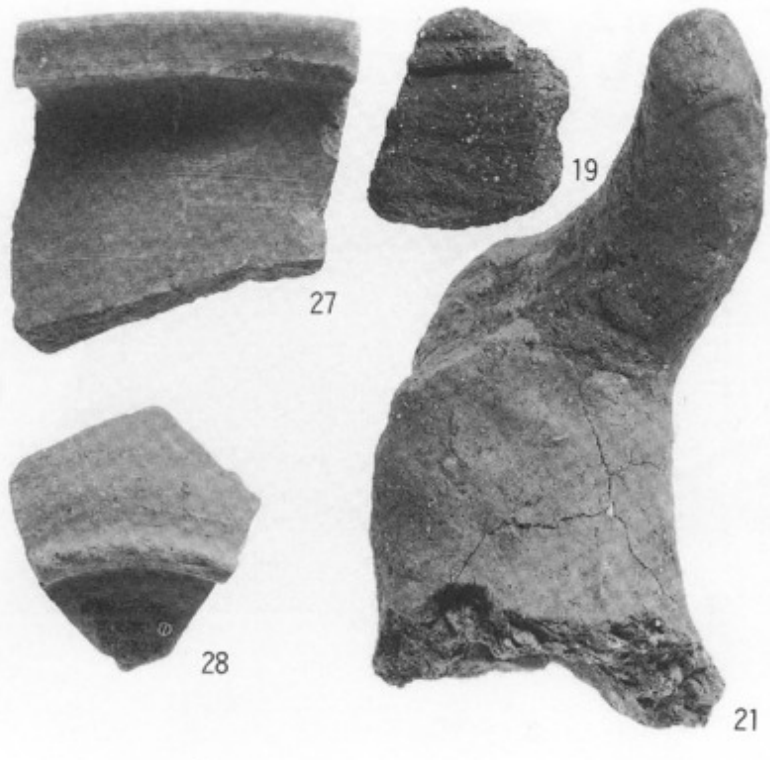
14

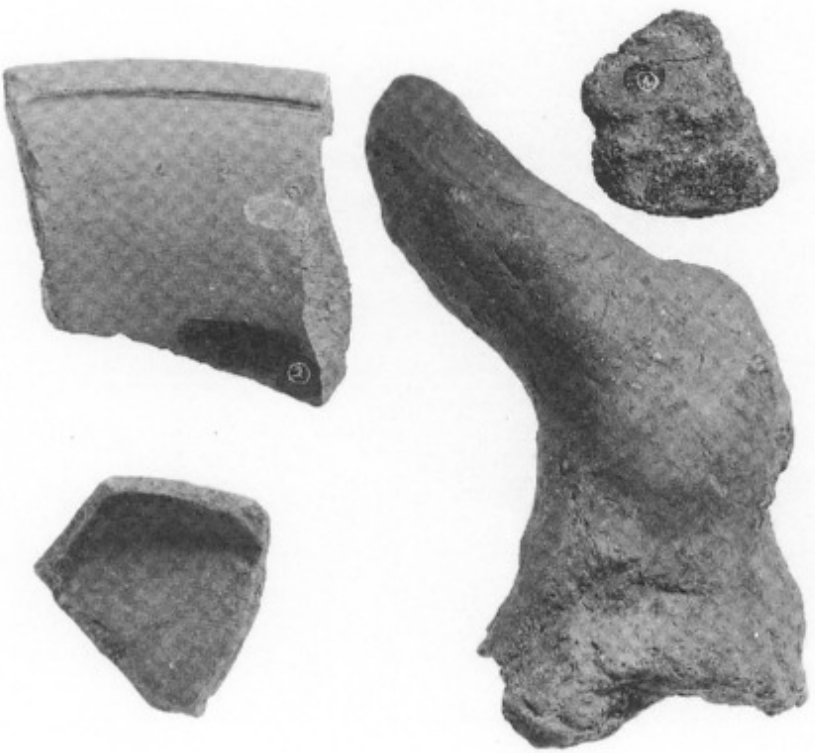
6

9

15

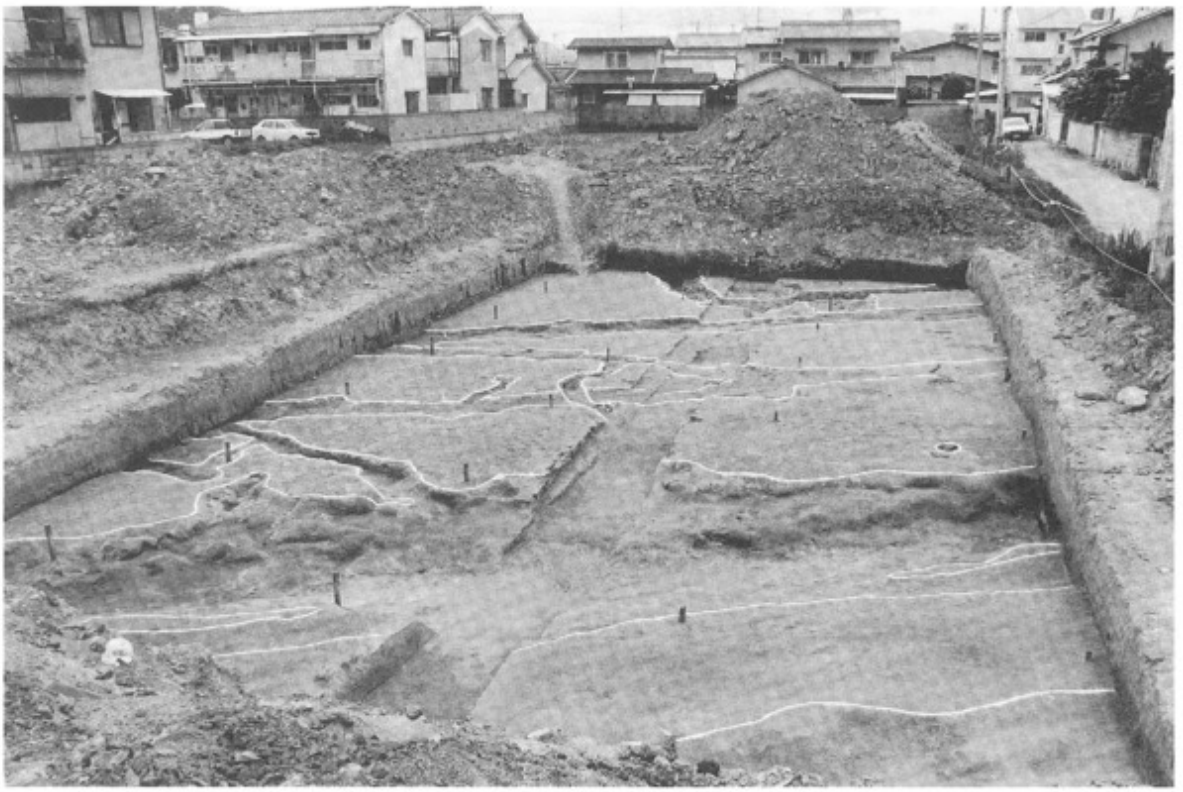
1　SB1出土遺物（1～4）、SD・SK・SP出土遺物（6・7・9・14・15）



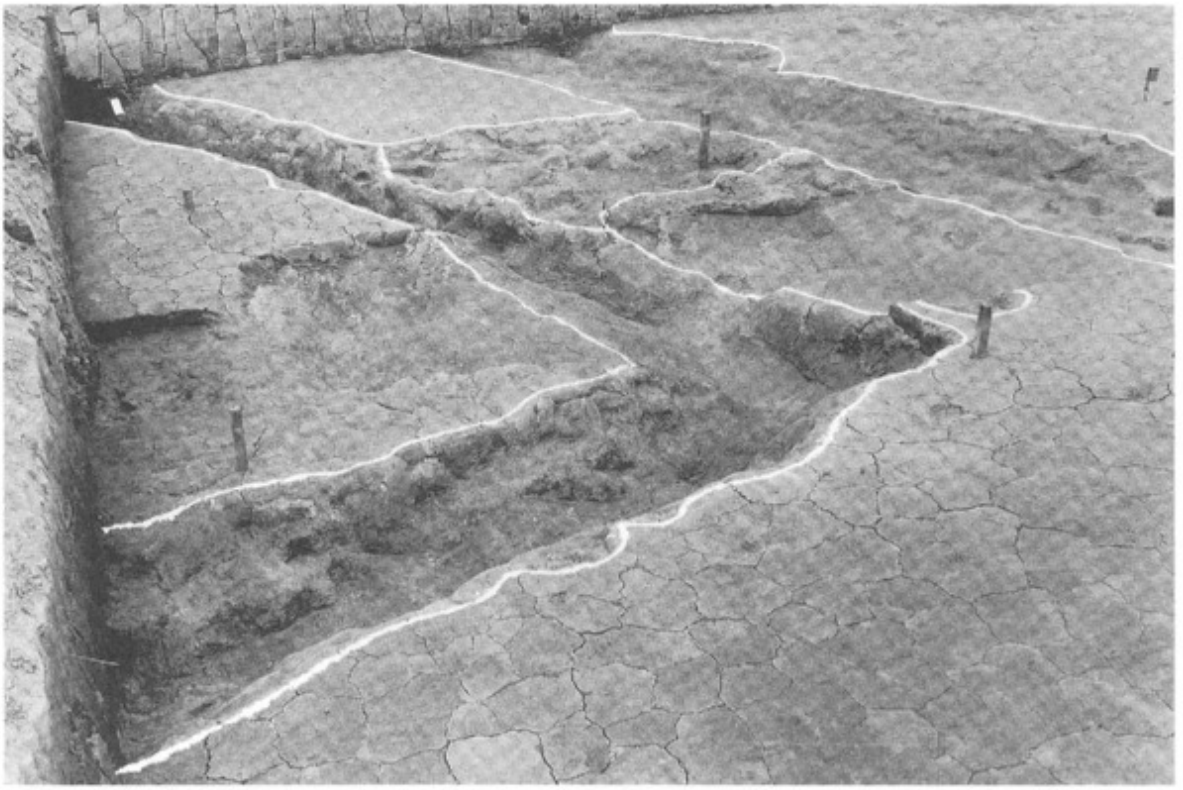


1　包含層出土遺物〔上〕：外面、〔下〕：内面

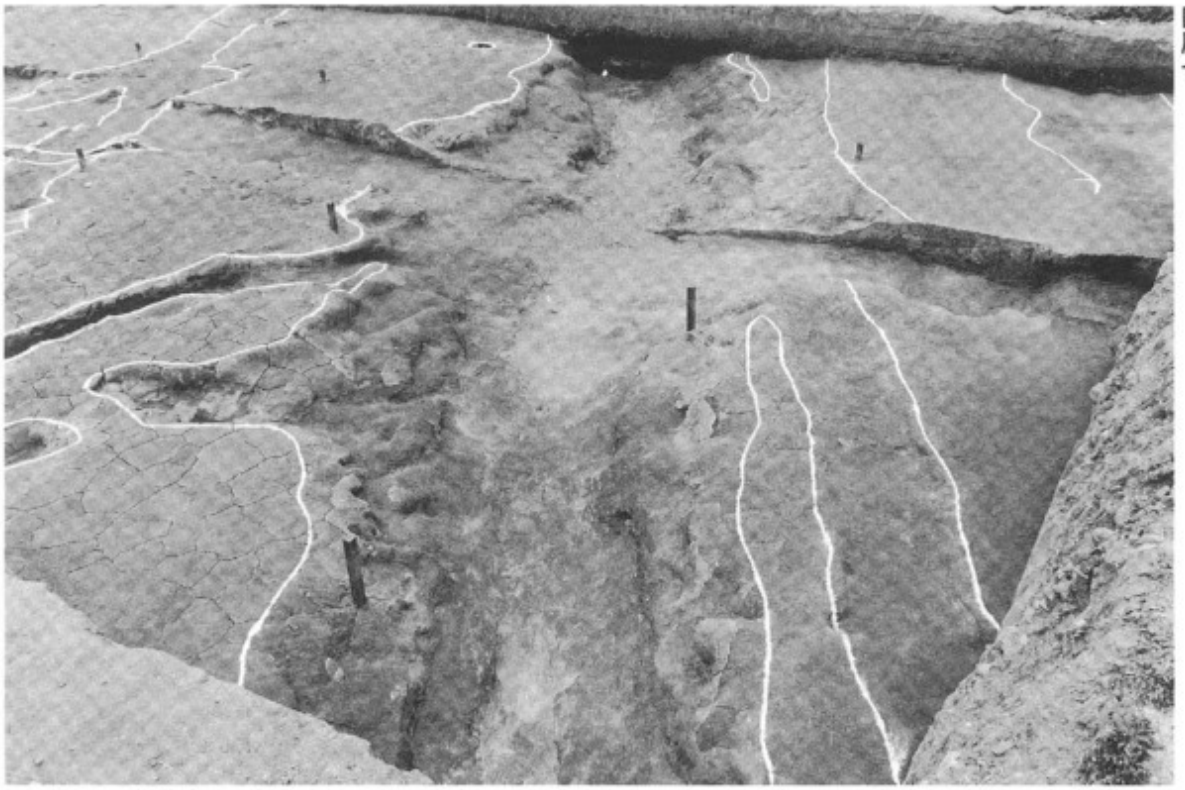
図版六



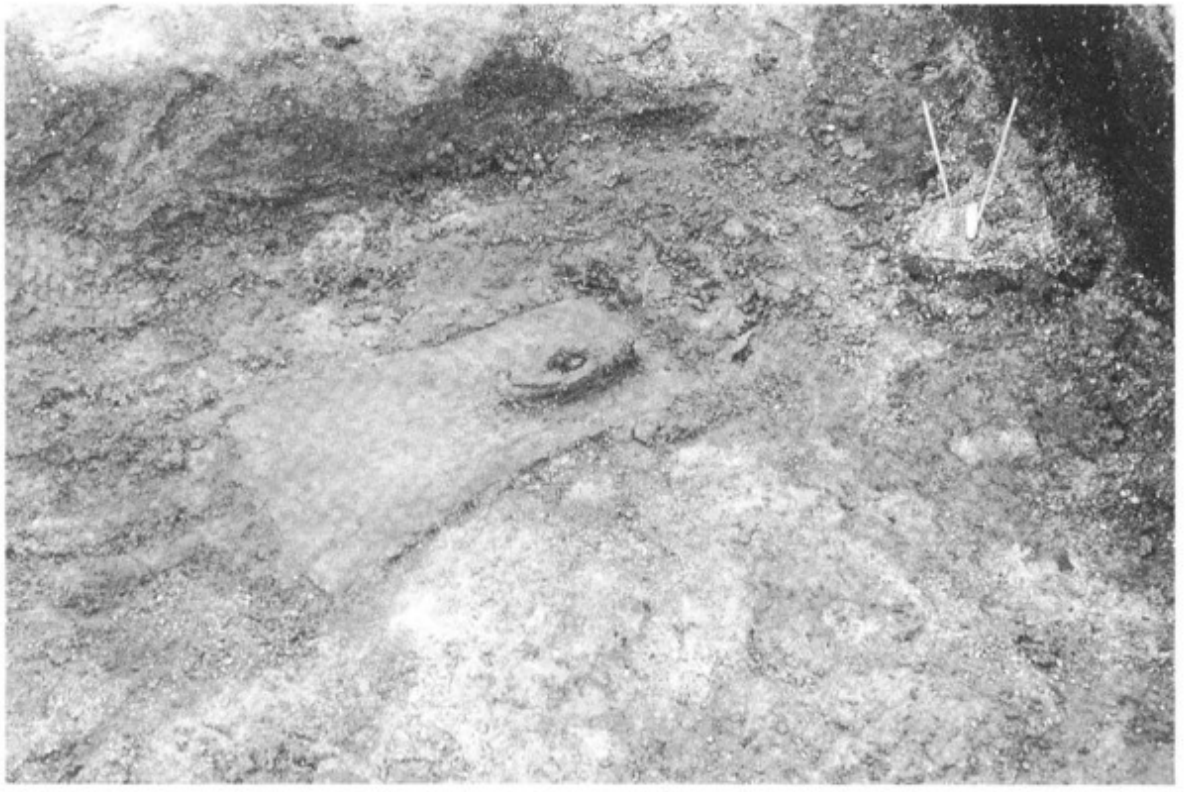
1　遺構検出状況（北より）



2　ＳＤ５（南西より）

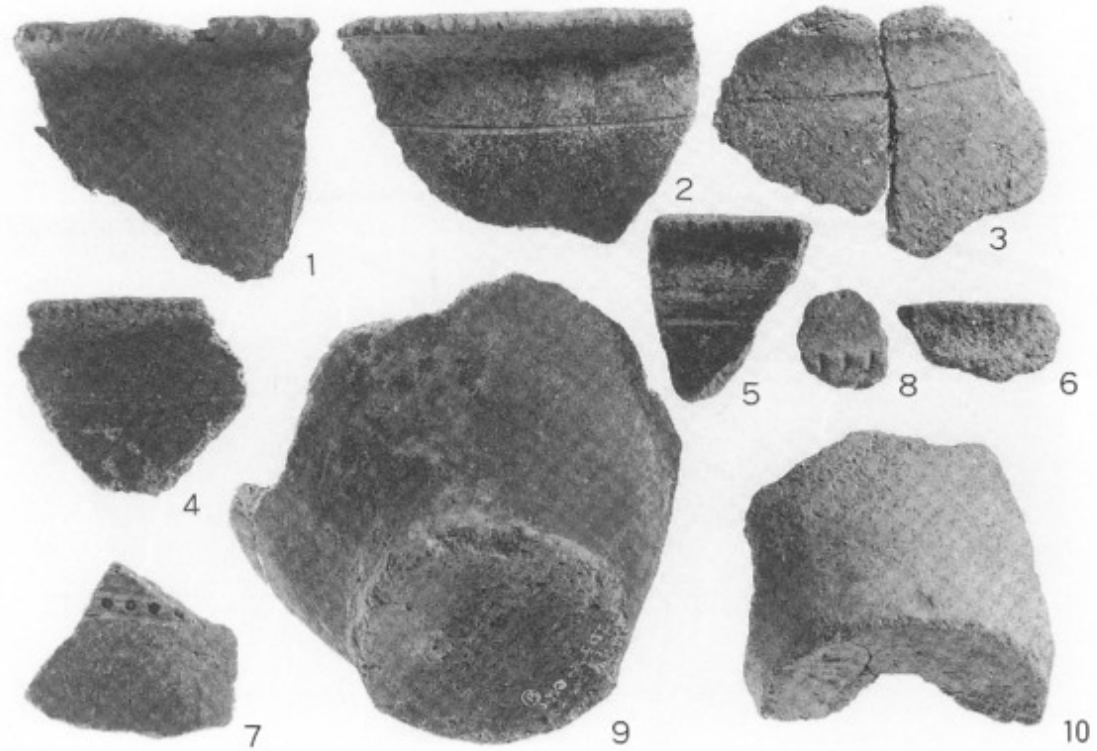


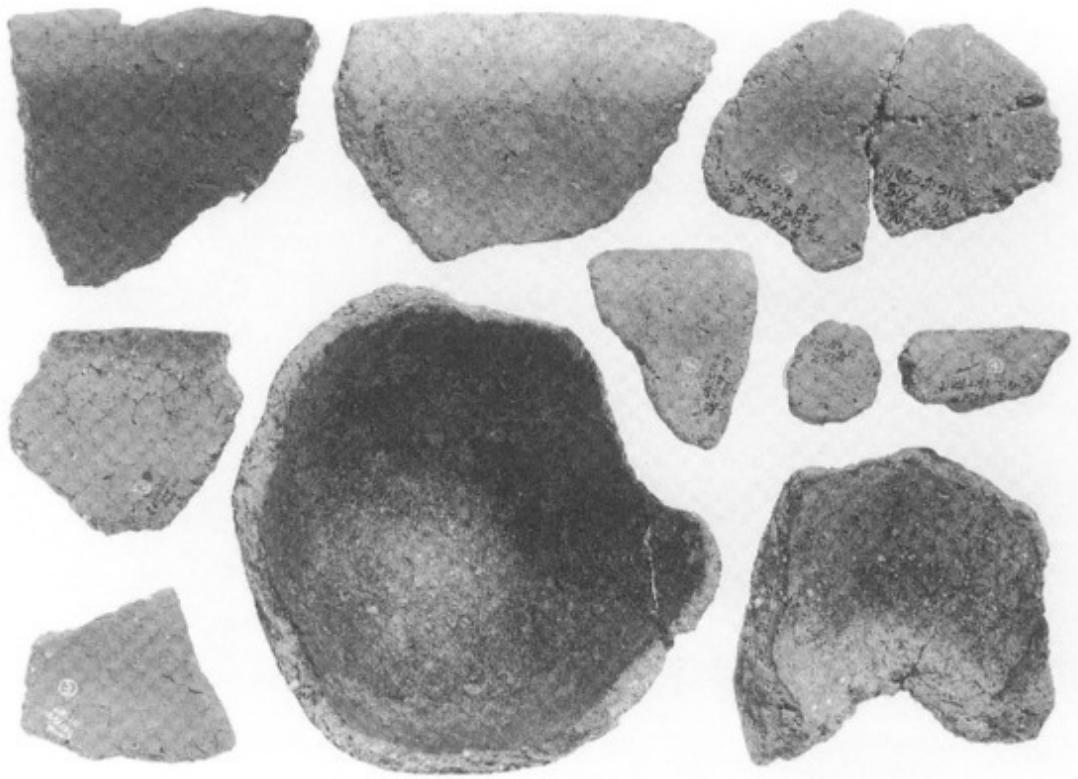
1　ＳＤ２（北東より）



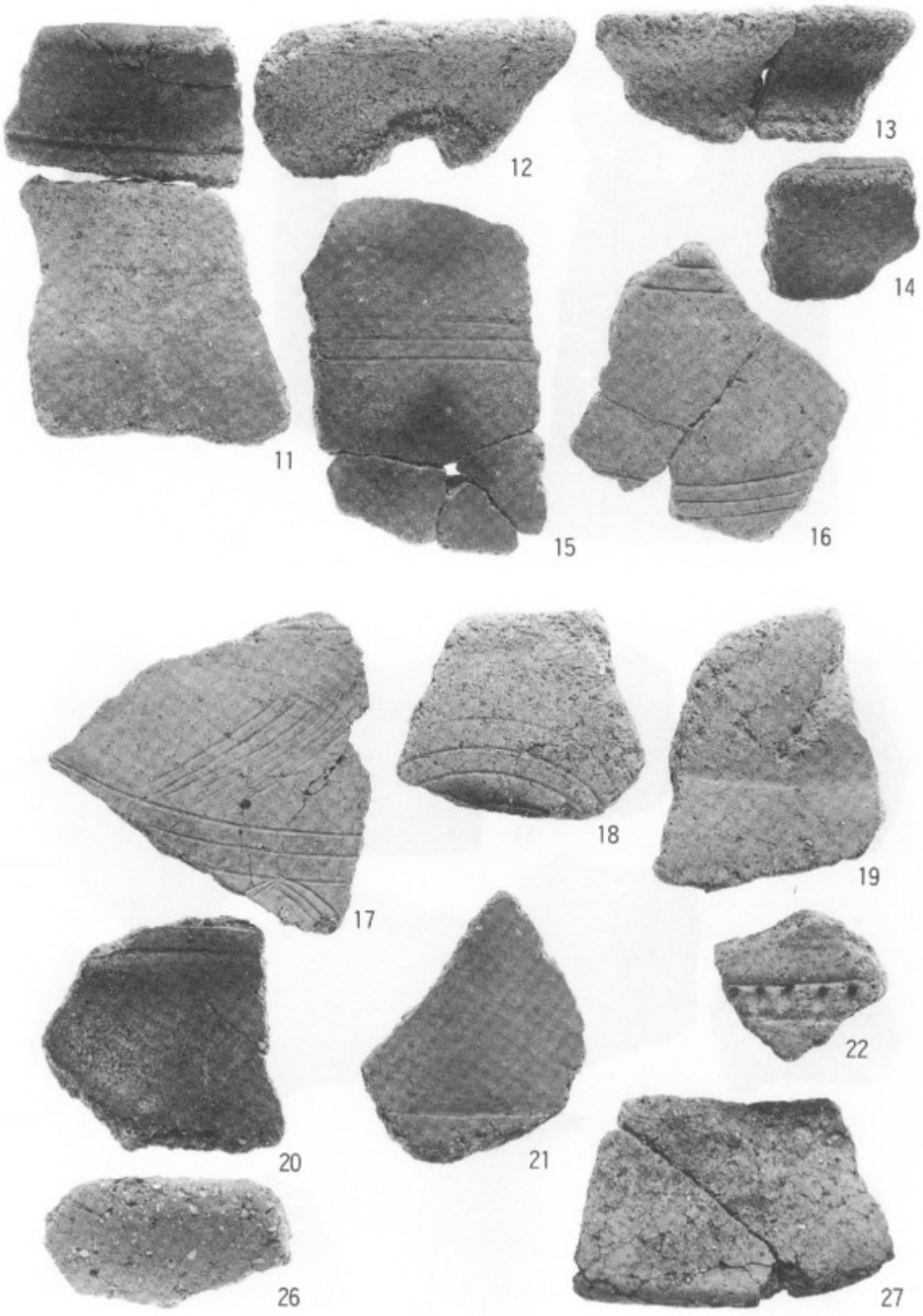
2　ＳＤ２内　木製平鍬・有茎石鏃出土状況（南より）

図版八

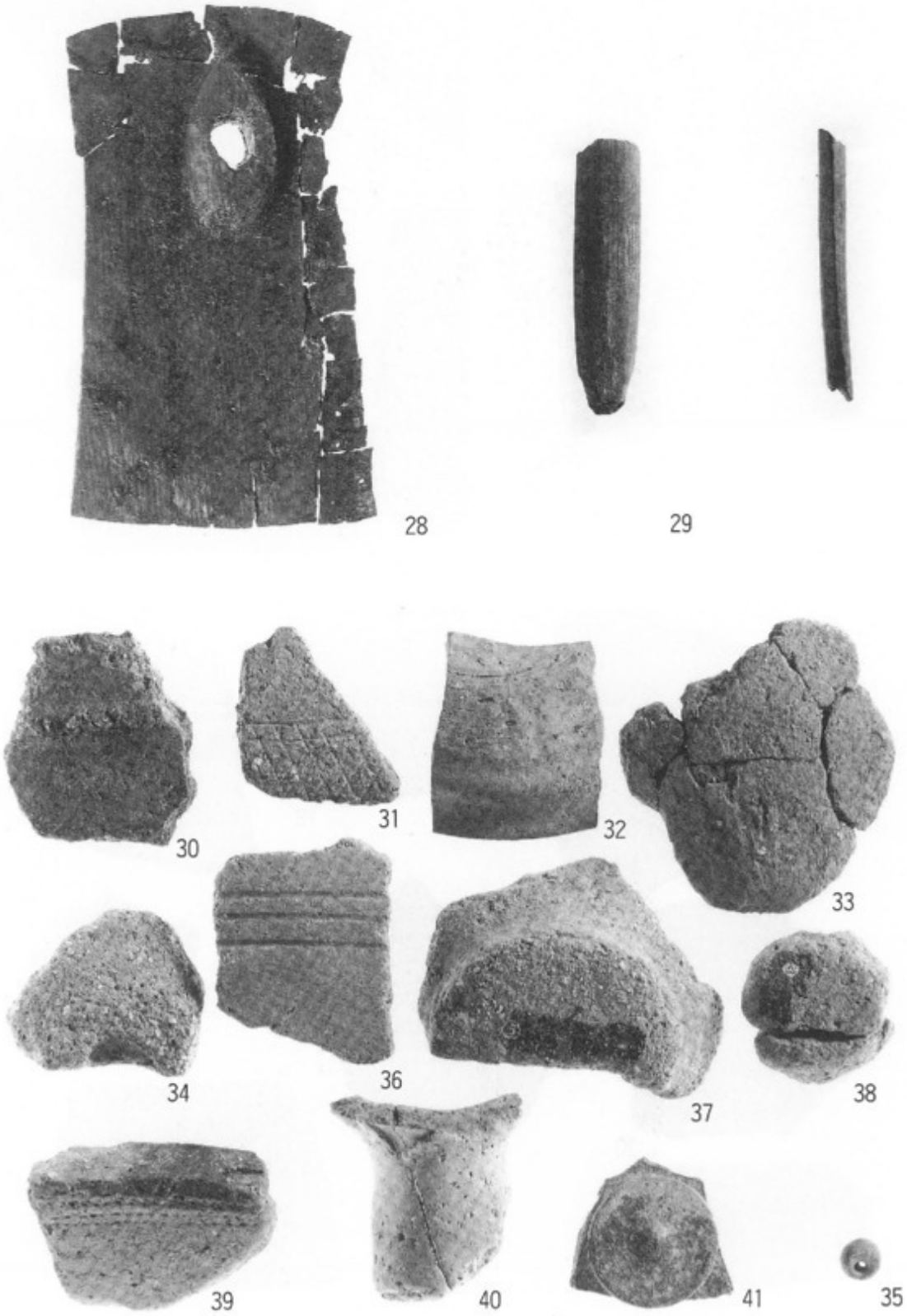




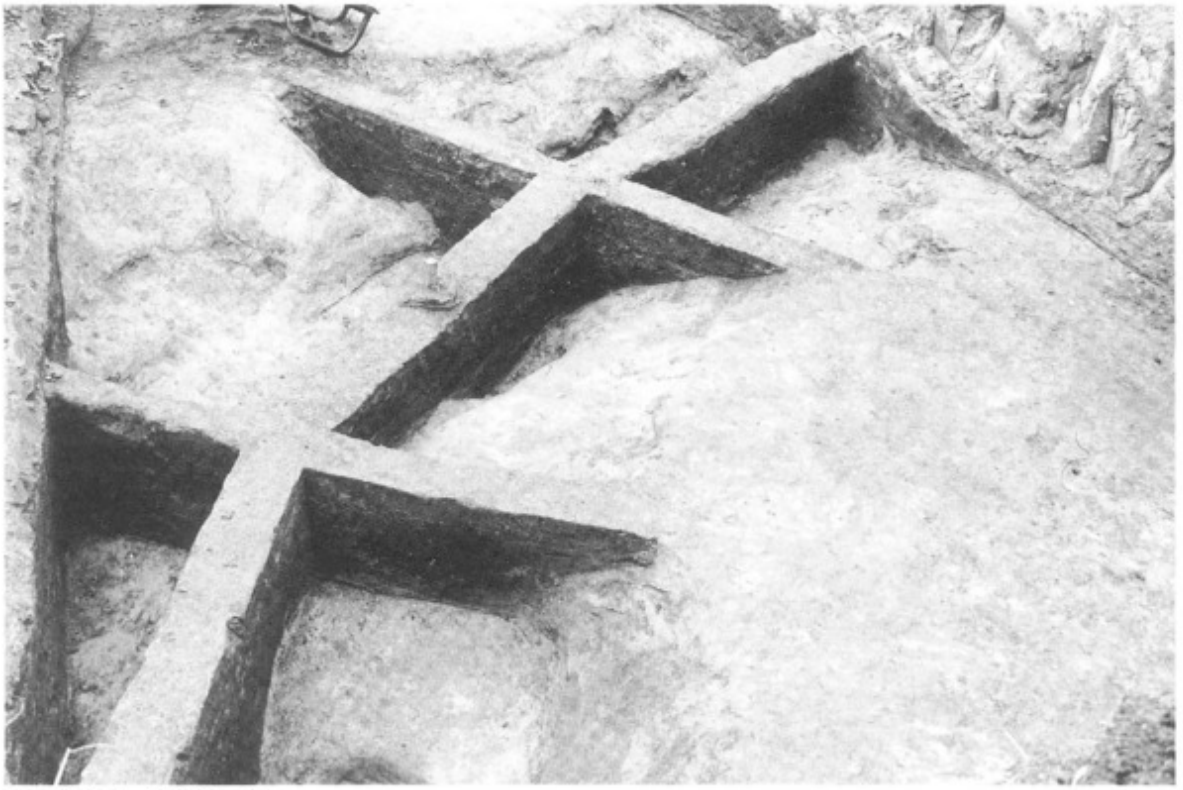
1　ＳＤ２出土遺物①　〔上〕：外面、〔下〕：内面



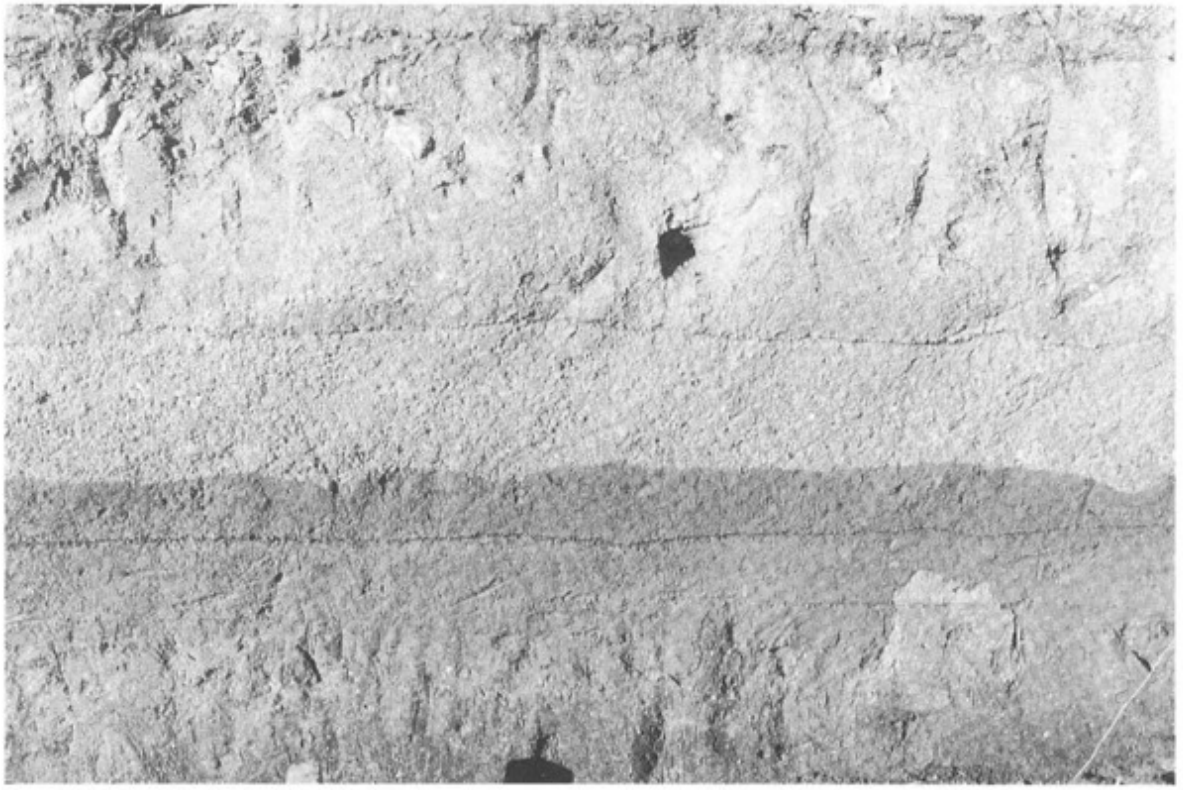
1　ＳＤ２出土遺物②



1　ＳＤ２出土遺物（28・29）、ＳＤ３出土遺物（30）、包含層出土遺物（31～41）

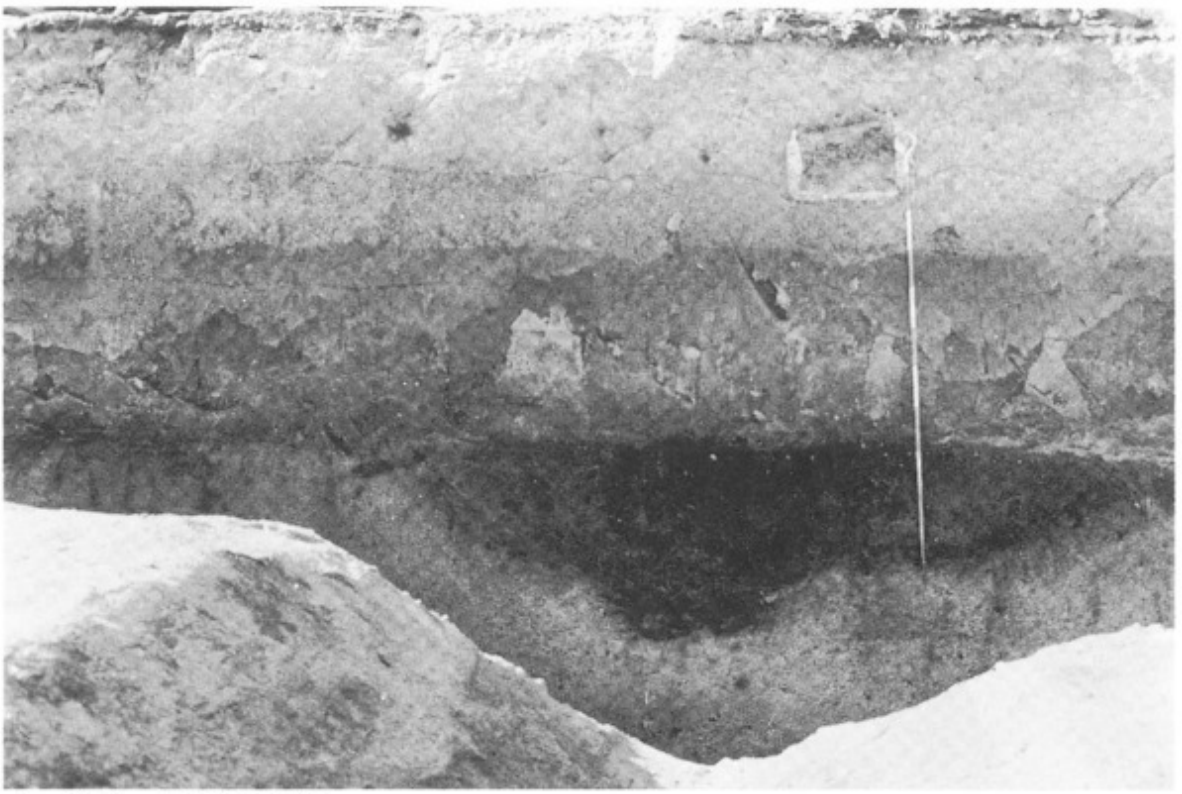


1　ＳＤ１（南東より）



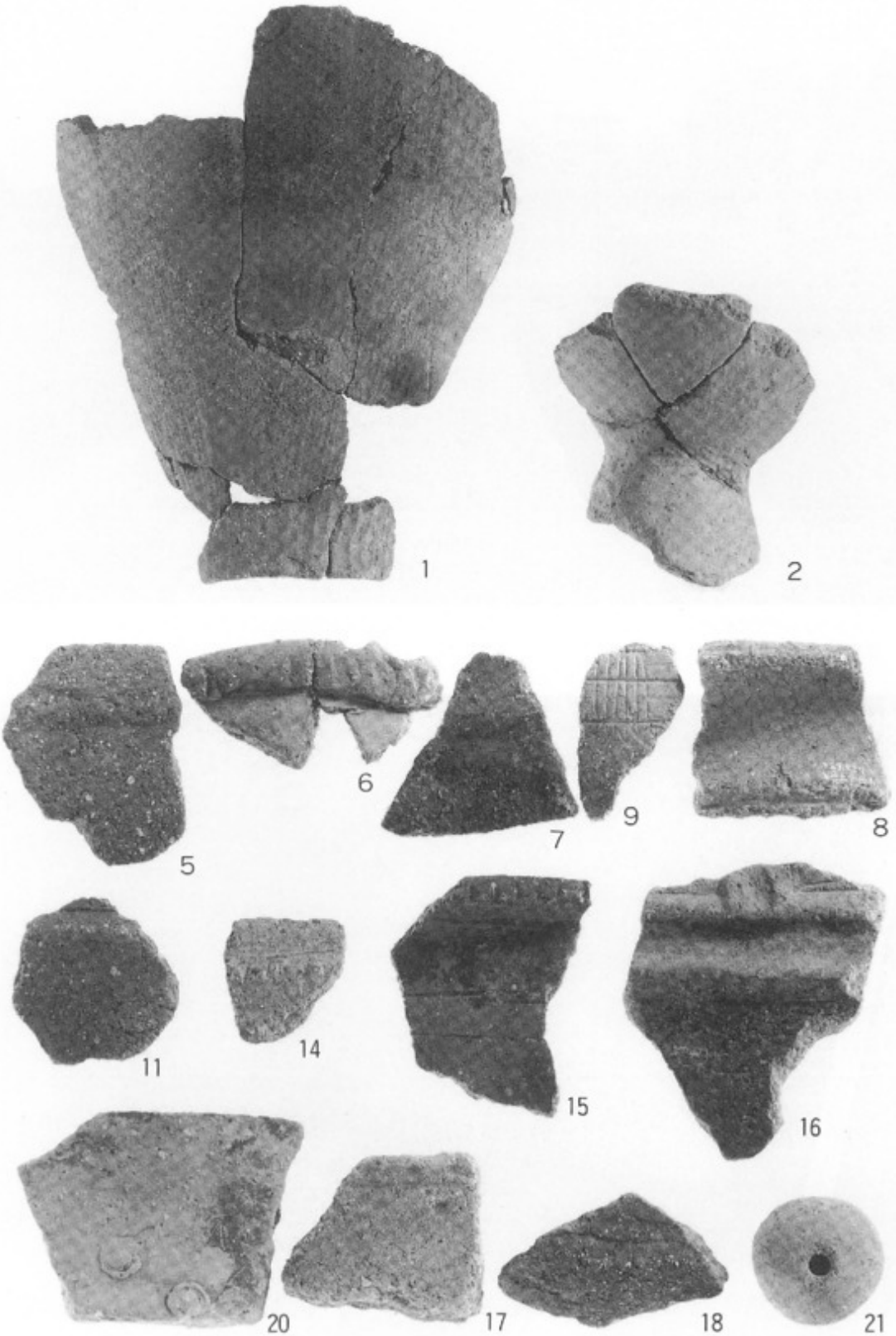
2　調査区西壁土層（東より）

図版一二



1　SD3　土層（東より）

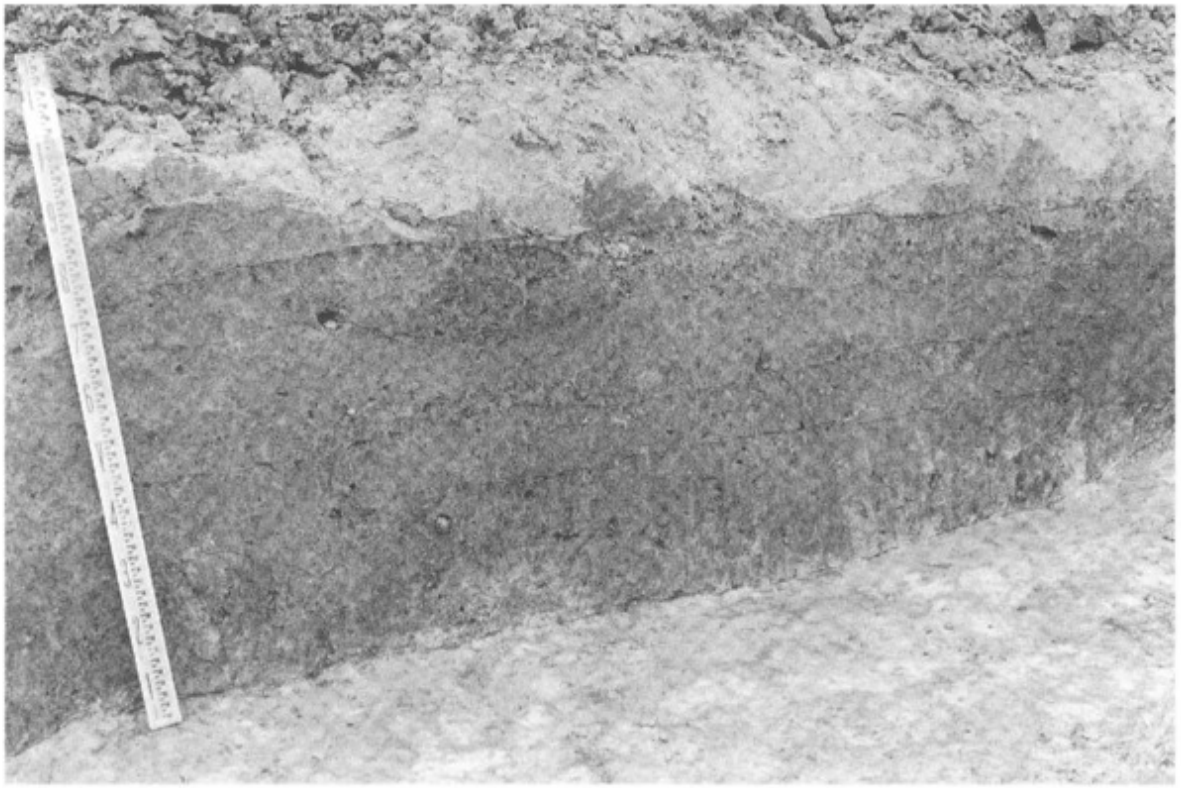
2　調査作業風景



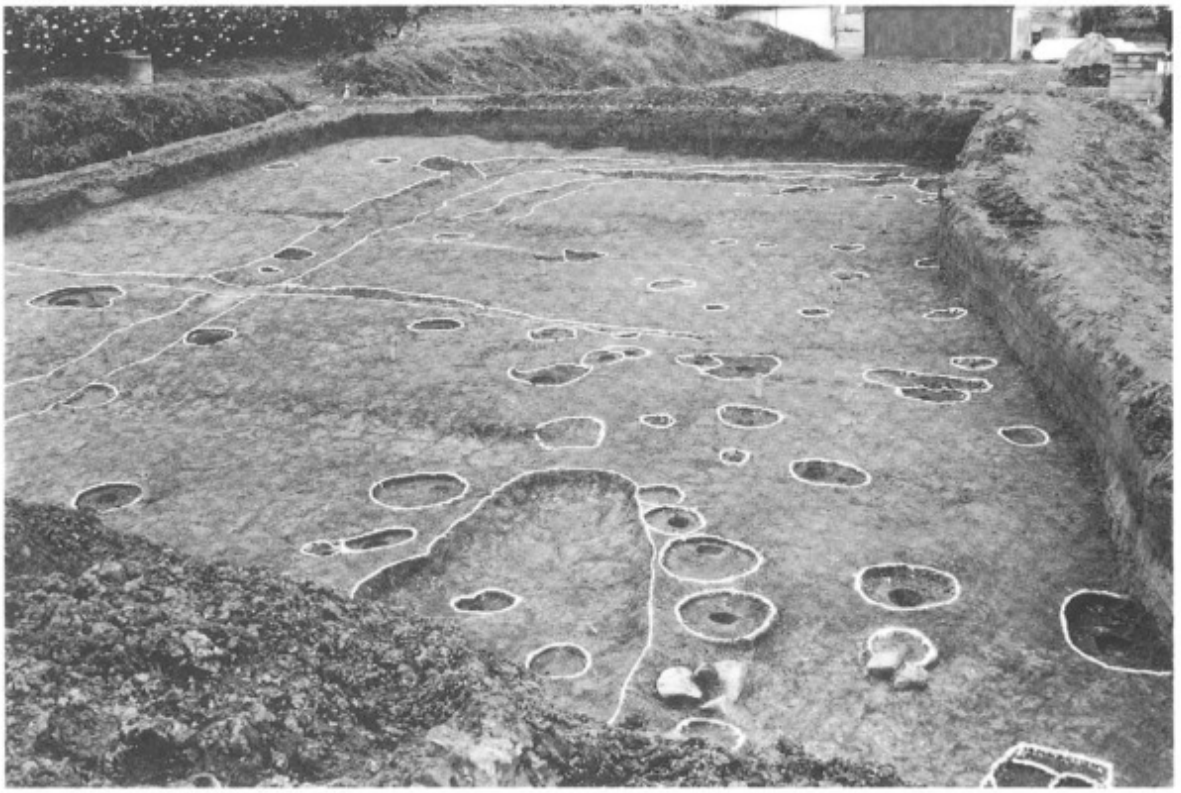
1　ＳＫ１出土遺物（１）、ＳＫ２出土遺物（２）、包含層出土遺物（５～11）、出土地点不明の遺物（14～21）

図版一四

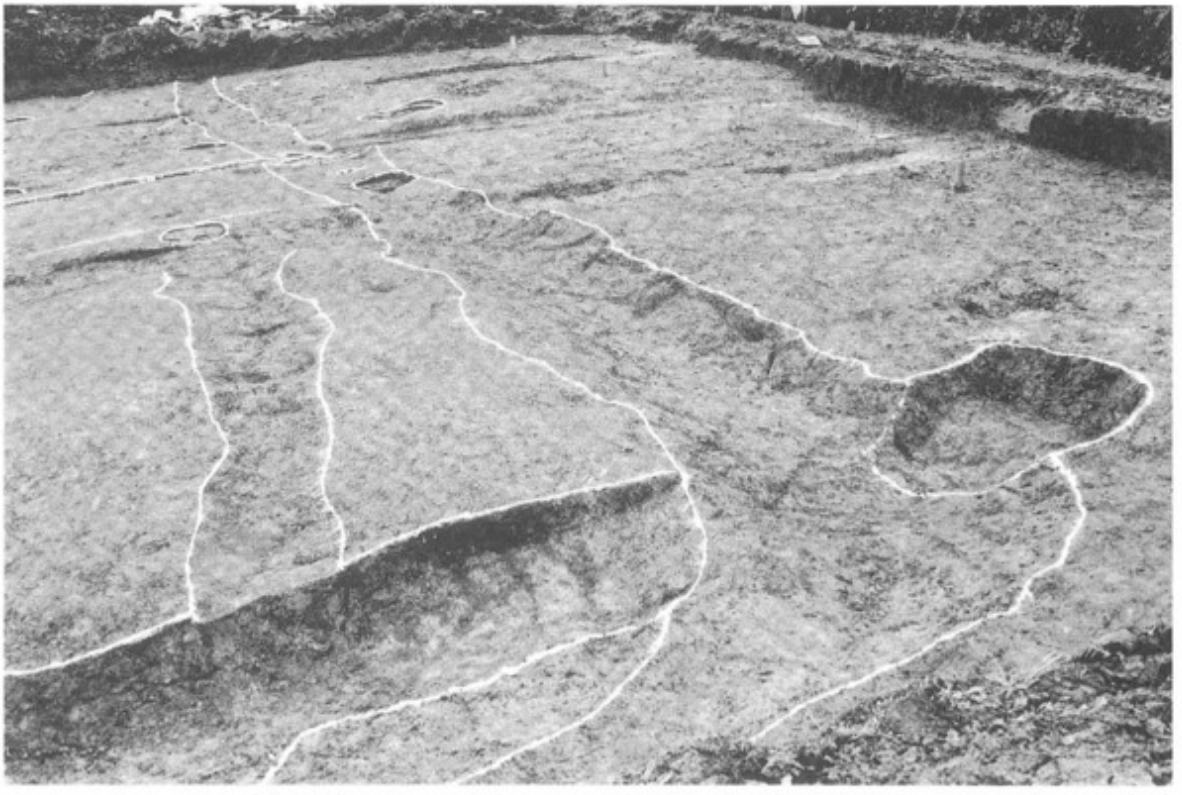
1　調査前全景（東より）



2　B区　南壁土層（北より）

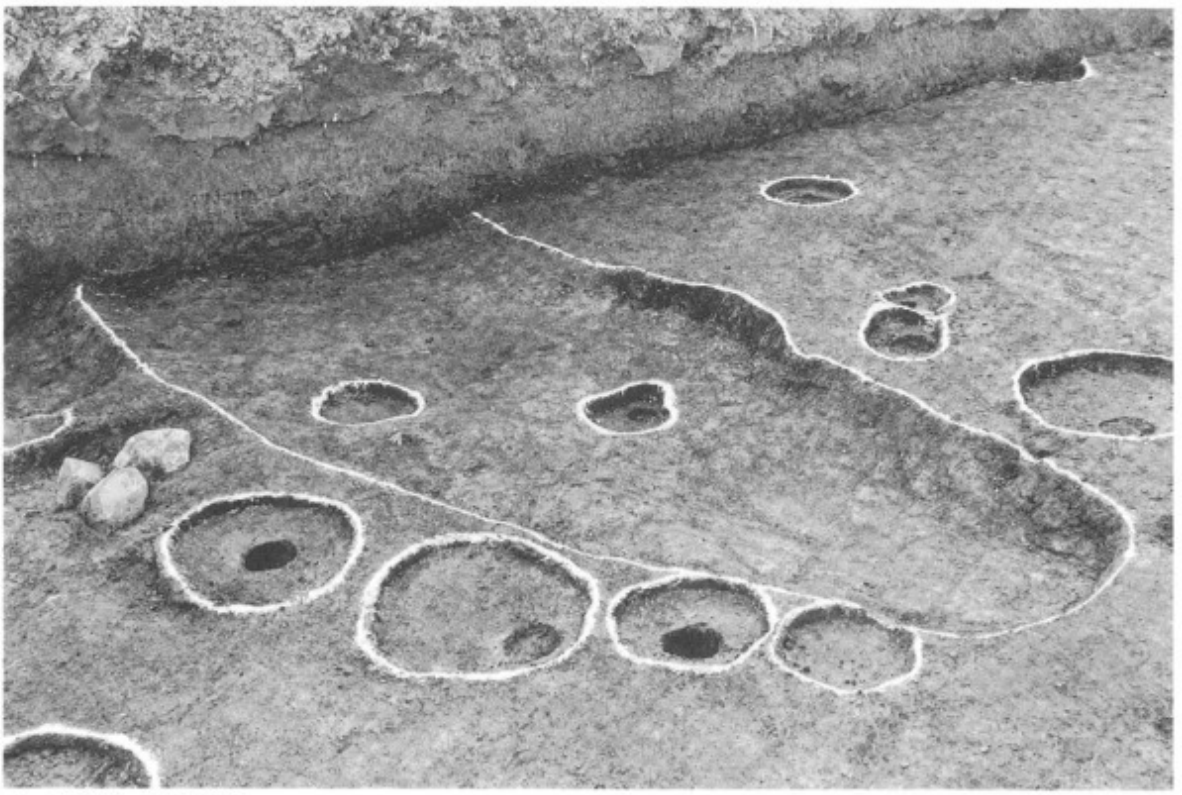


1　A区　完掘状況（南より）

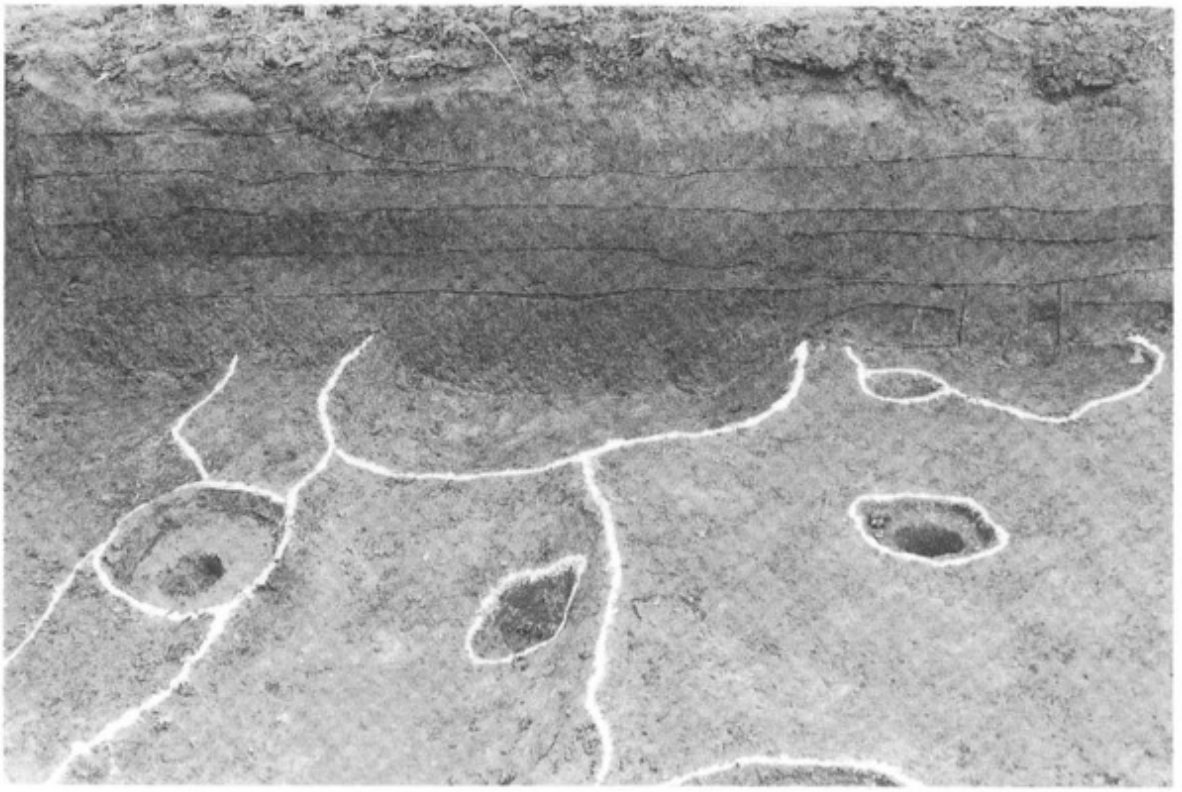


2　SD1、2、3（北より）

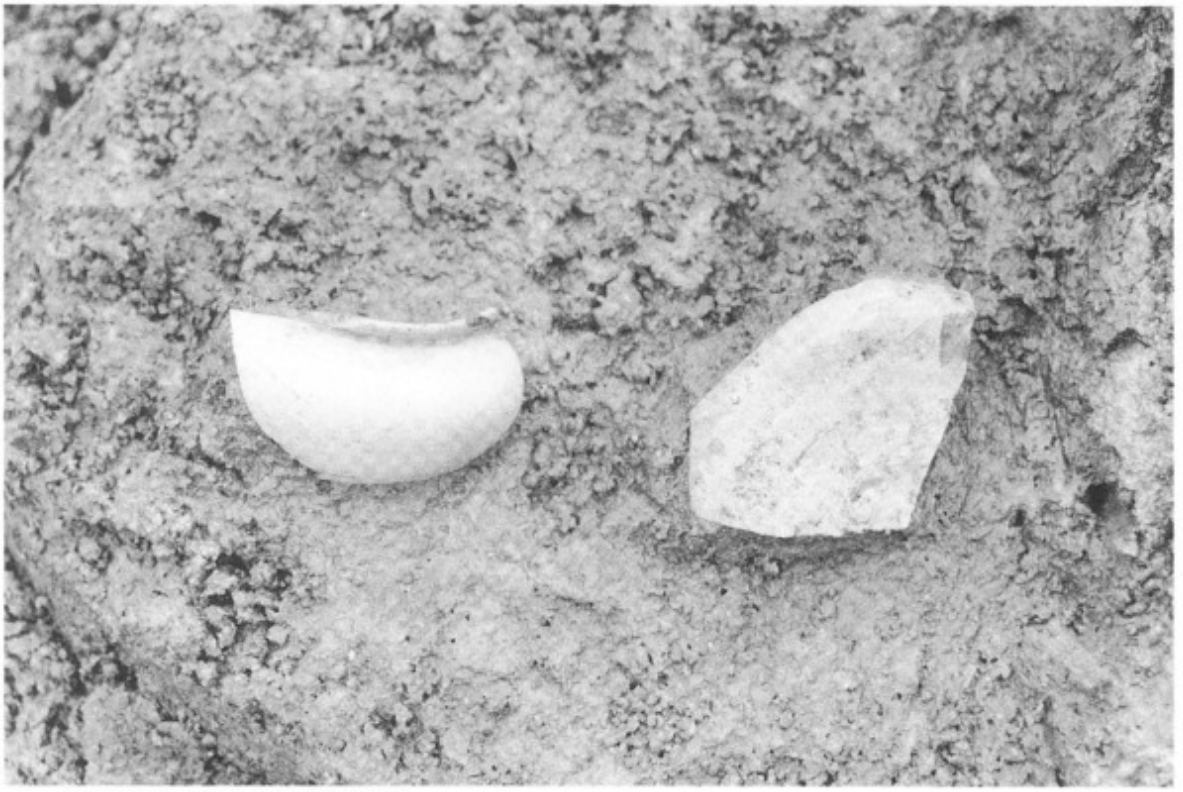
図版一六



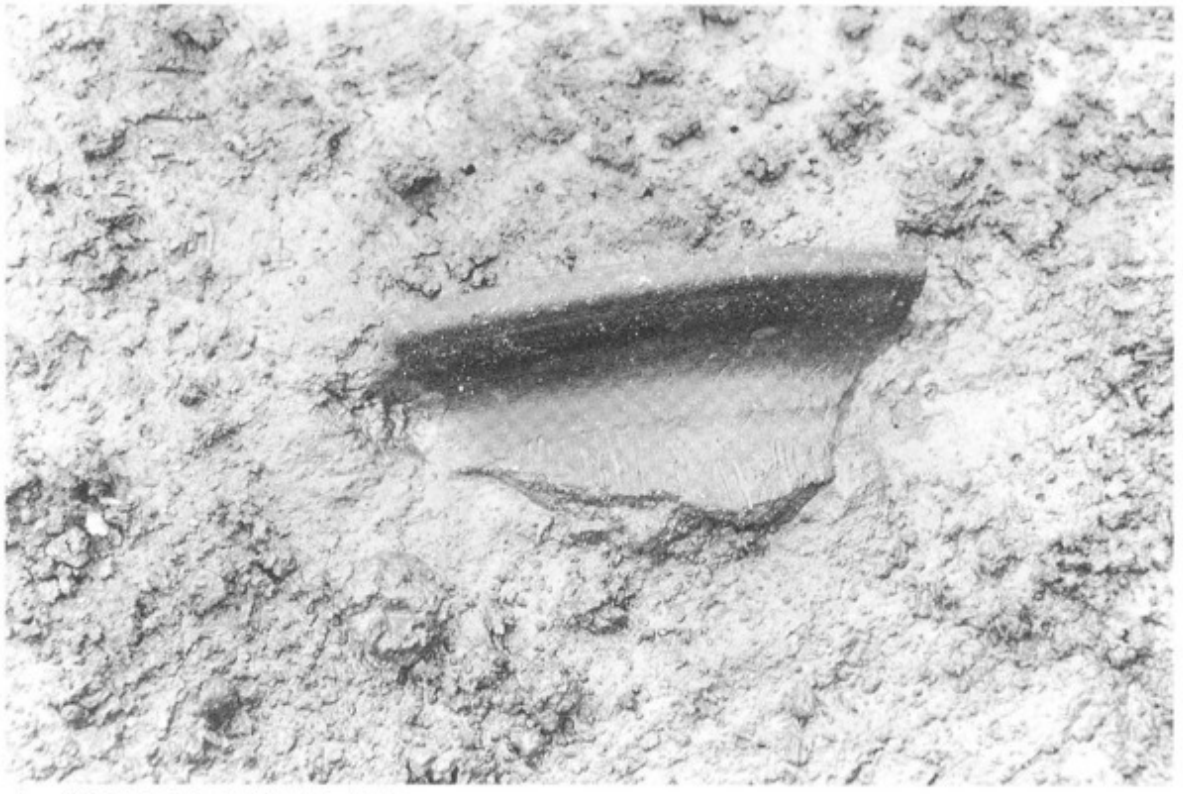
1　SD5（東より）



2　SK1（西より）

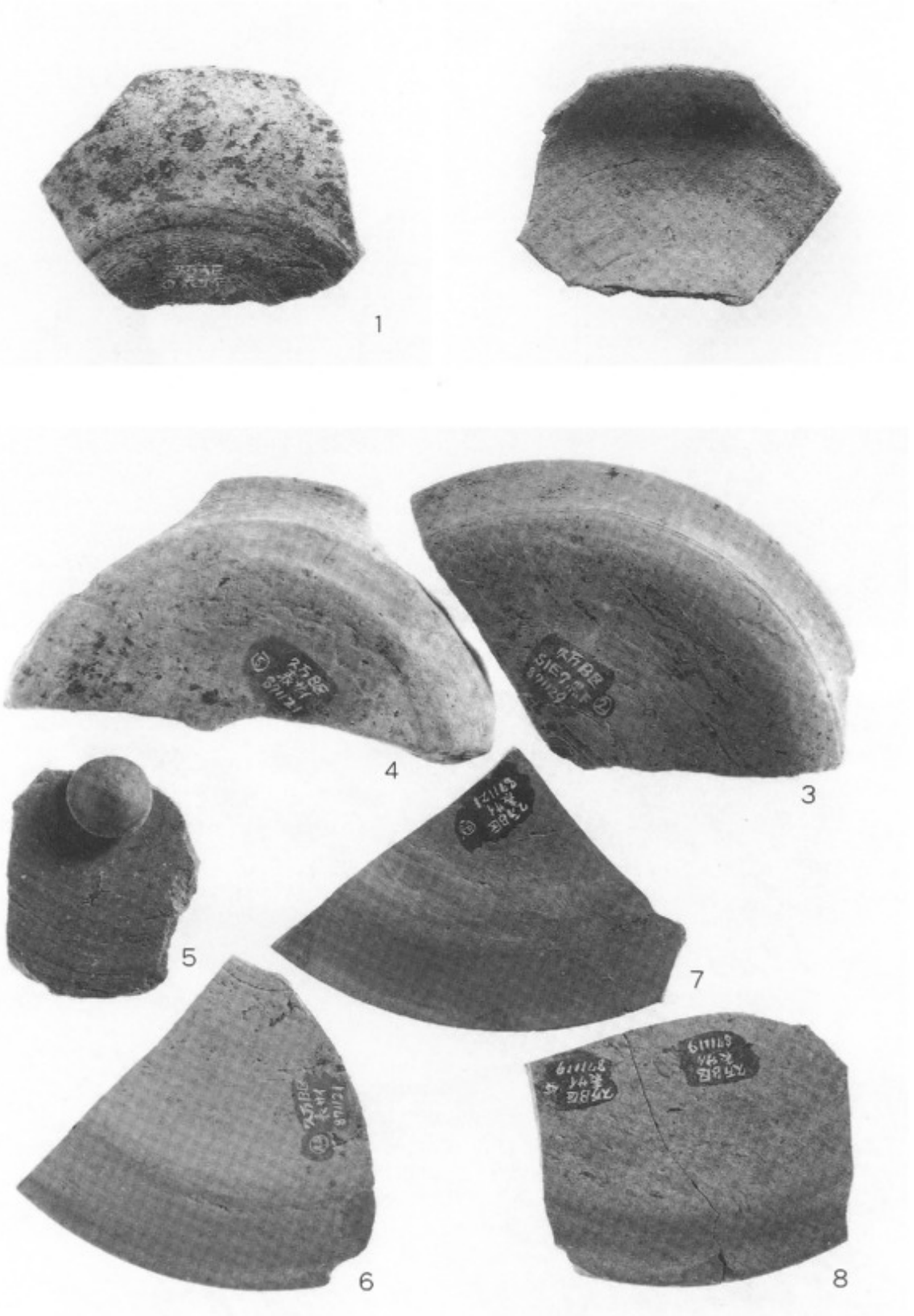


1　第Ⅴ層遺物出土状況（北より）



2　第Ⅵ層遺物出土状況（北より）

図版一八

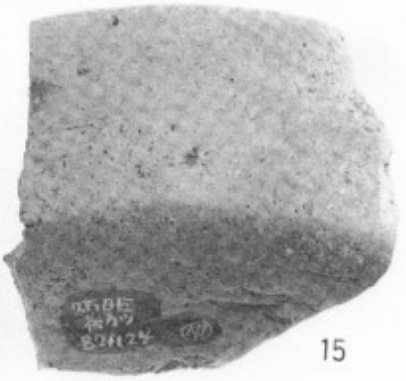


1　第Ⅳ層出土遺物（1～3）、第Ⅴ層出土遺物（5～8）

10

11

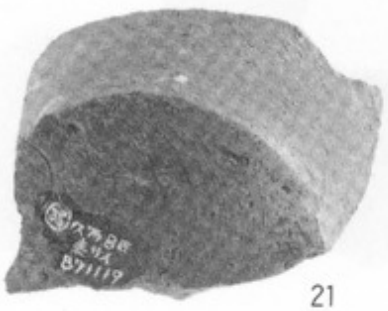
12



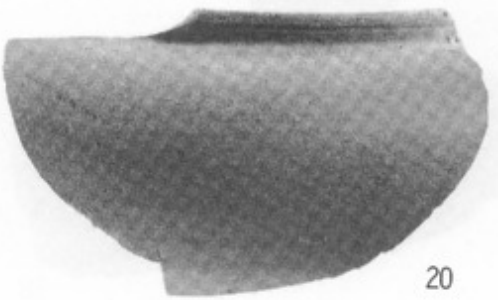
15

18

19



21



20

1　第Ⅴ層出土遺物

22

25

26

27

34 35 36

37 38

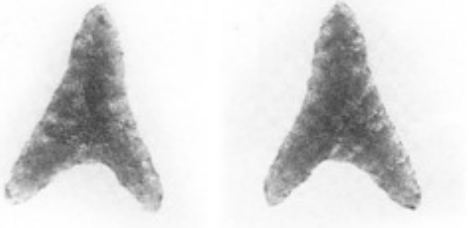
1　第VI層出土遺物①

30

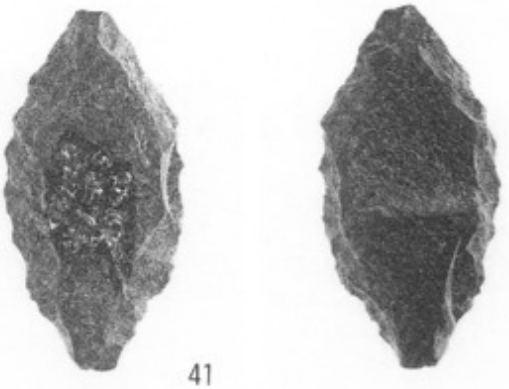
31

32

39



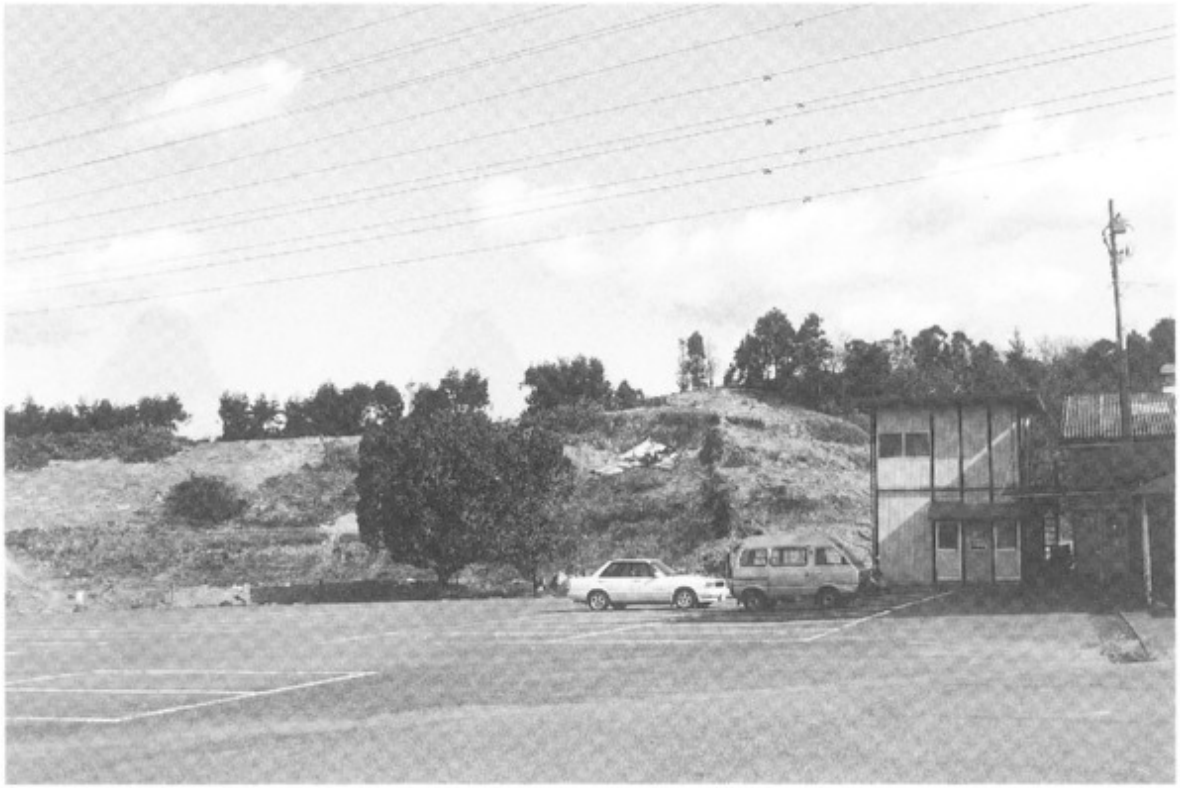
40



41

1　第VI層出土遺物②

1　調査対象地遠景（北東より）



2　調査対象地遠景（南より）

1　調査対象地遠景（南西より）

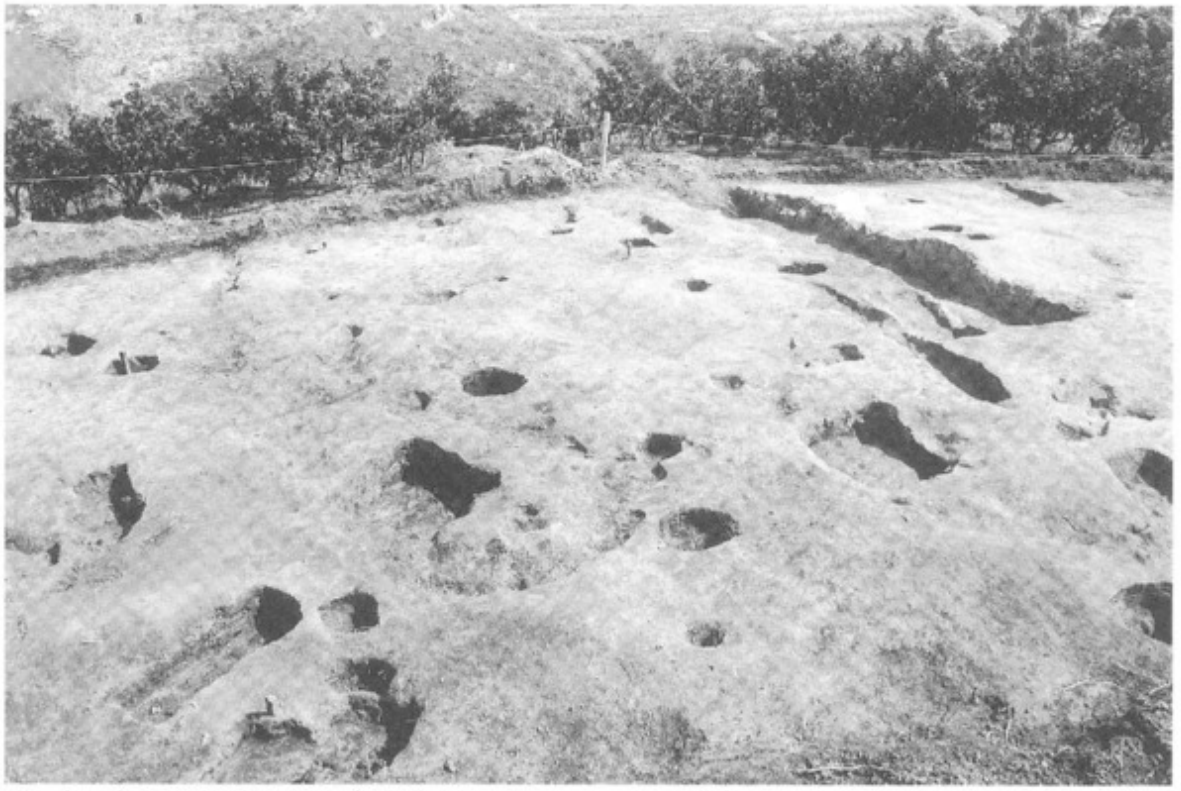
2　久万ノ台地区試掘近景（北より）

図版二四

1　古三津地区本調査地遠景（南東より）

2　古三津地区本調査地近景（南東より）

1　古三津地区本調査地近景（西より）

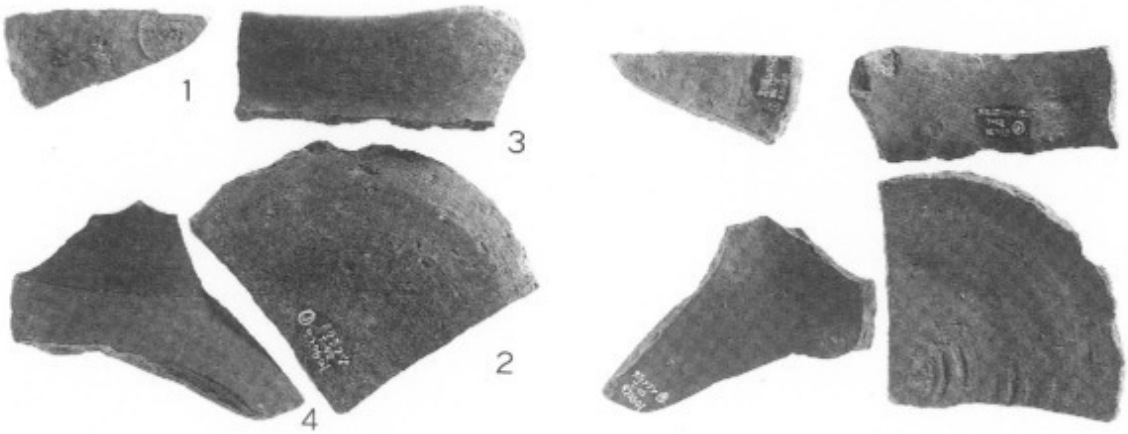


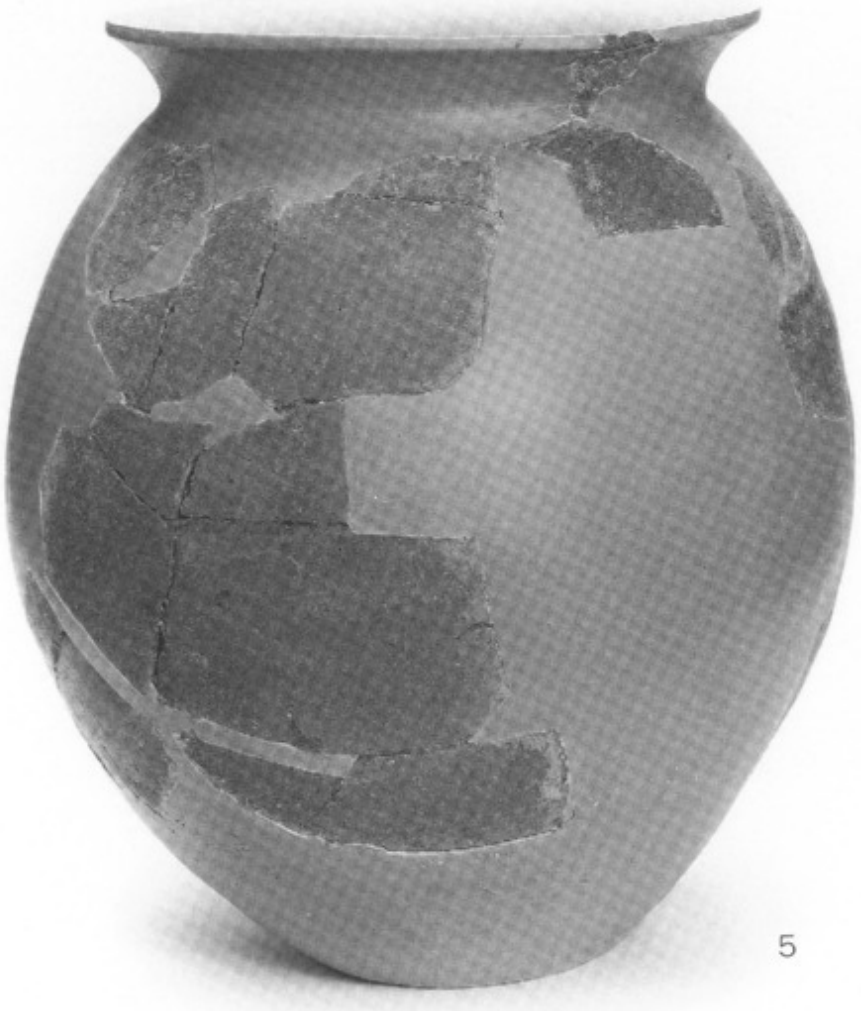
2　古三津地区本調査地近景（北西より）

図版二六

1　古三津地区本調査地近景（北西より）

2　古三津地区本調査地近景（西より）





1　出土遺物

松山市文化財調査報告書　第32集

山越・久万ノ台の遺跡

平成5年3月31日　発行

編　集　松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7－2

発　行　TEL（0899）48－6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL（0899）23－6363

印　刷　明星印刷工業株式会社

〒790 松山市土居田町500番地

TEL（0899）71－7111